

# 京都府遺跡調査概報

## 第 59 冊

1. 丹後あじわいの郷関係遺跡
  - (1) ニゴレ遺跡
  - (2) 桐谷古墳群
2. 奈具岡遺跡第5次調査地点試掘
3. 伏見城跡
4. 平安京跡・旧二条城跡

1 9 9 4

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

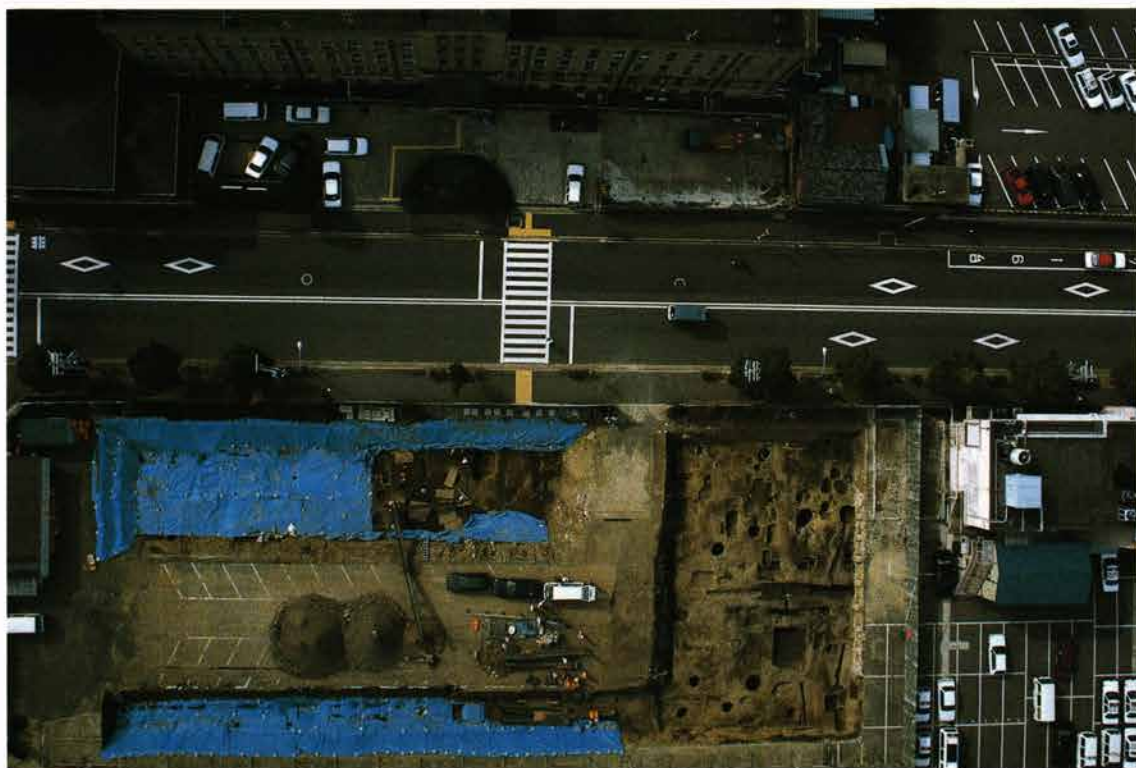


(1) ニゴレ遺跡遠景



(2) ニゴレ遺跡B拡張区遠景





(1) 北地区第1面全景（上が西）



(2) 南地区第1面全景（上が西）



(1) 金箔軒丸瓦



(2) 金箔軒平瓦



(3) 金箔瓦





(1) 金箔軒丸瓦



(2) 金箔軒丸瓦



(3) 金箔軒平瓦



(4) 金箔軒平瓦



(5) 桐文金箔軒丸瓦



(6) 違い鷹羽文飾り瓦

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、発足以来12年以上経過し、今後も職員一同心を新たにして調査・研究に邁進しようと日夜努力しております。この間、当調査研究センターの業務遂行にあたりまして、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

これまでの調査をふりかえってみますと、公共事業は年々増大し、それに伴う発掘調査も単に件数の増加だけでなく、とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。このような発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行し公表するとともに、毎年、展覧会や埋蔵文化財セミナー等を開催し、発掘調査で出土した遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成4・5年度に実施した発掘調査のうち、京都府農林水産部、京都府土木建築部、京都府教育委員会の依頼を受けて実施した、丹後あじわいの郷関係遺跡、奈良岡遺跡第5次調査地点試掘、伏見城跡、平安京跡・旧二条城跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、埋蔵文化財への関心と理解を深める上で何がしらかの役に立てば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会・弥栄町教育委員会・京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所などの関係諸機関、ならびに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理事長 福山敏男



## 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- |                 |                   |
|-----------------|-------------------|
| 1. 丹後あじわいの郷関係遺跡 | 2. 奈具岡遺跡第5次調査地点試掘 |
| 3. 伏見城跡         | 4. 平安京跡・旧二条城跡     |

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 丹後あじわいの郷関係遺跡 (1)ニゴレ遺跡	竹野郡弥栄町字鳥取	平4.9.24～ 平6.2.25	京都府農林水産部	岡崎研一
	(2)桐谷古墳群	竹野郡弥栄町鳥取・ 木橋		
2. 奈具岡遺跡第5次調査地点 試掘	竹野郡弥栄町溝谷	平5.12.1～ 平6.1.21	京都府土木建築部	田代 弘
3. 伏見城跡	京都市伏見区桃山毛 利長門町8	平5.10.4～ 平6.2.3	京都府教育委員会	岩松 保
4. 平安京跡・旧二条城跡	京都市上京区両御霊 町ほか	平4.6.22～ 平5.3.4 平5.4.7～ 6.29	京都府警察本部	森島康雄

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

## 目 次

1. 丹後あじわいの郷関係遺跡平成5年度発掘調査概要-----	1
(1) ニゴレ遺跡-----	8
(2) 桐谷古墳群-----	25
2. 奈具岡遺跡第5次調査地点試掘調査概要-----	31
3. 伏見城跡平成5年度発掘調査概要-----	35
4. 平安京跡・旧二条城跡発掘調査概要-----	51



## 挿 図 目 次

1. 丹後あじわいの郷関係遺跡	
第1図	調査地位置図及び周辺遺跡分布図-----2
第2図	調査地配置図-----3
(1) ニゴレ遺跡	
第3図	A 拡張区測量図-----9
第4図	炭窯14(左図)・炭窯12(右図)実測図-----10
第5図	炭窯6実測図-----11
第6図	炭窯5実測図-----12
第7図	炭窯19実測図-----12
第8図	炭窯13実測図-----14
第9図	炭窯29実測図-----15
第10図	炭窯30実測図-----15
第11図	炭窯15実測図-----16
第12図	住居跡9実測図-----17
第13図	住居跡11実測図-----18
第14図	住居跡28・24実測図-----19
第15図	B 拡張区測量図-----21
第16図	1号製鉄炉地形測量図-----22
第17図	排滓場堆積断面図-----23
(2) 桐谷古墳群	
第18図	桐谷古墳群地形測量図-----25
第19図	1号墳第1主体部実測図-----26
第20図	1号墳第2主体部実測図-----27
第21図	2号墳主体部実測図-----28
第22図	桐谷1・2号墳測量図-----29
2. 奈具岡遺跡第5次調査地点	
第23図	調査地と周辺の遺跡-----31
第24図	試掘トレンチ配置図-----32

第25図	試掘トレンチ出土遺物(第9トレンチ)	33
------	--------------------	----

### 3. 伏見城跡

第26図	調査地位置図	35
第27図	桃山高校内発掘調査地	36
第28図	調査地中央部東西土層図	39
第29図	検出遺構平面図	40
第30図	S B 01実測図	42
第31図	S B 01柱穴土層断面図	43
第32図	S B 02・05実測図	44
第33図	S X 03実測図	45
第34図	出土遺物実測図・拓影(1)各遺構出土	46
第35図	出土遺物実測図(2)瓦層出土	47
第36図	出土遺物実測図・拓影(3)茶褐色土層出土	48

### 4. 平安京跡・旧二条城跡

第37図	調査地位置図	51
第38図	調査区位置図	52
第39図	北地区第1面遺構平面図	53
第40図	溝50A平面図・立面図・断面図	54
第41図	北地区第1面遺構平面図・断面図1	56
第42図	北地区第1面遺構平面図・断面図2	57
第43図	北地区第2面平面図	58
第44図	堀A断面図(北地区北壁)	58
第45図	堀B断面図(2ライン)	58
第46図	井戸210平面図・立面図	59
第47図	建物跡1平面図	60
第48図	石組土坑12平面図・立面図	60
第49図	南地区第1面平面図	61
第50図	石組溝10平面図・立面図・断面図(部分)	63
第51図	南地区第2面平面図	65
第52図	南地区第2面遺構平面図・断面図1	68
第53図	南地区第2面遺構平面図・断面図2	69
第54図	堀A断面図(Iライン)	69



第55図	溝50出土遺物実測図-----	71
第56図	石組溝10出土遺物実測図-----	72
第57図	堀A出土遺物実測図-----	73
第58図	土坑62出土金箔瓦実測図・拓影1-----	74
第59図	土坑62出土金箔瓦実測図・拓影2-----	75
第60図	黒色粘土層出土金箔瓦実測図・拓影1-----	76
第61図	黒色粘土層出土金箔瓦実測図・拓影2-----	77
第62図	金箔瓦実測図・拓影-----	78
第63図	漆器椀他実測図1-----	79
第64図	漆器椀他実測図2-----	80
第65図	漆器椀他実測図3-----	81
第66図	漆器椀他実測図4-----	82
第67図	木製品実測図1-----	84
第68図	木製品実測図2-----	85
第69図	木製品実測図3-----	86
第70図	木製品実測図4-----	87
第71図	石仏実測図1-----	89
第72図	石仏実測図2-----	90
第73図	石仏実測図3-----	91
第74図	北地区第1面における土地利用-----	92
第75図	調査区と町境界との位置関係図-----	93

## 付 表 目 次

### 1. 丹後あじわいの郷関係遺跡

付表1	平成4・5年度「丹後あじわいの郷」整備事業に伴う発掘調査一覧表-----	1
付表2	「丹後あじわいの郷」整備事業に伴う関連遺跡発掘調査一覧表-----	4
付表3	「丹後あじわいの郷」(鳥取・木橋地区)試掘調査成果一覧表-----	6

### 4. 平安京跡・旧二条城跡

付表4	石仏計測表-----	88
-----	------------	----

# 図版目次

## 1. 丹後あじわいの郷関係遺跡

### (1) ニゴレ遺跡

- 図版第1 (1)ニゴレ遺跡遠景(東北東から)  
(2)A 拡張区・桐谷1・2号墳遠景(南から)
- 図版第2 (1)A 拡張区炭窯14近景(南から)  
(2)A 拡張区炭窯29・30近景(南西から)
- 図版第3 (1)A 拡張区住居跡28・24近景(南西から)  
(2)A 拡張区住居跡27・26近景(南西から)
- 図版第4 (1)A 拡張区住居跡1 近景(西から)  
(2)A 拡張区住居跡1 近景(南から)
- 図版第5 (1)A 拡張区住居跡9・11近景(南西から)  
(2)B 拡張区全景(北東から)
- 図版第6 (1)1号製鉄炉調査前全景(南から)  
(2)1号製鉄炉調査前近景(南西から)
- 図版第7 (1)1号製鉄炉全景(北東から) (2)1号製鉄炉近景(北西から)
- 図版第8 (1)1号製鉄炉近景(南西から)  
(2)1号製鉄炉流れ込み土器出土状況(南から)
- 図版第9 (1)1号製鉄炉排滓坑近景(北西から)  
(2)1号製鉄炉排滓坑完掘状況(北から)
- 図版第10 (1)2号製鉄炉近景(南東から) (2)2号製鉄炉近景(南西から)

## 2. 奈良岡遺跡第5次調査地点

- 図版第11 (1)調査前近景(西から) (2)調査前近景(西から)
- 図版第12 (1)試掘調査地遠景(西から) (2)第6トレンチ掘削状況

## 3. 伏見城跡

- 図版第13 (1)調査地全景(西から) (2)調査地全景(北西から)
- 図版第14 (1)S B01検出状況(西から) (2)S B01検出状況(北から)
- 図版第15 (1)S B02・S B05検出状況(西から) (2)S B02完掘状況(北から)
- 図版第16 (1)S B01柱穴5 検出状況(北から) (2)S B01柱穴5 断面(東から)

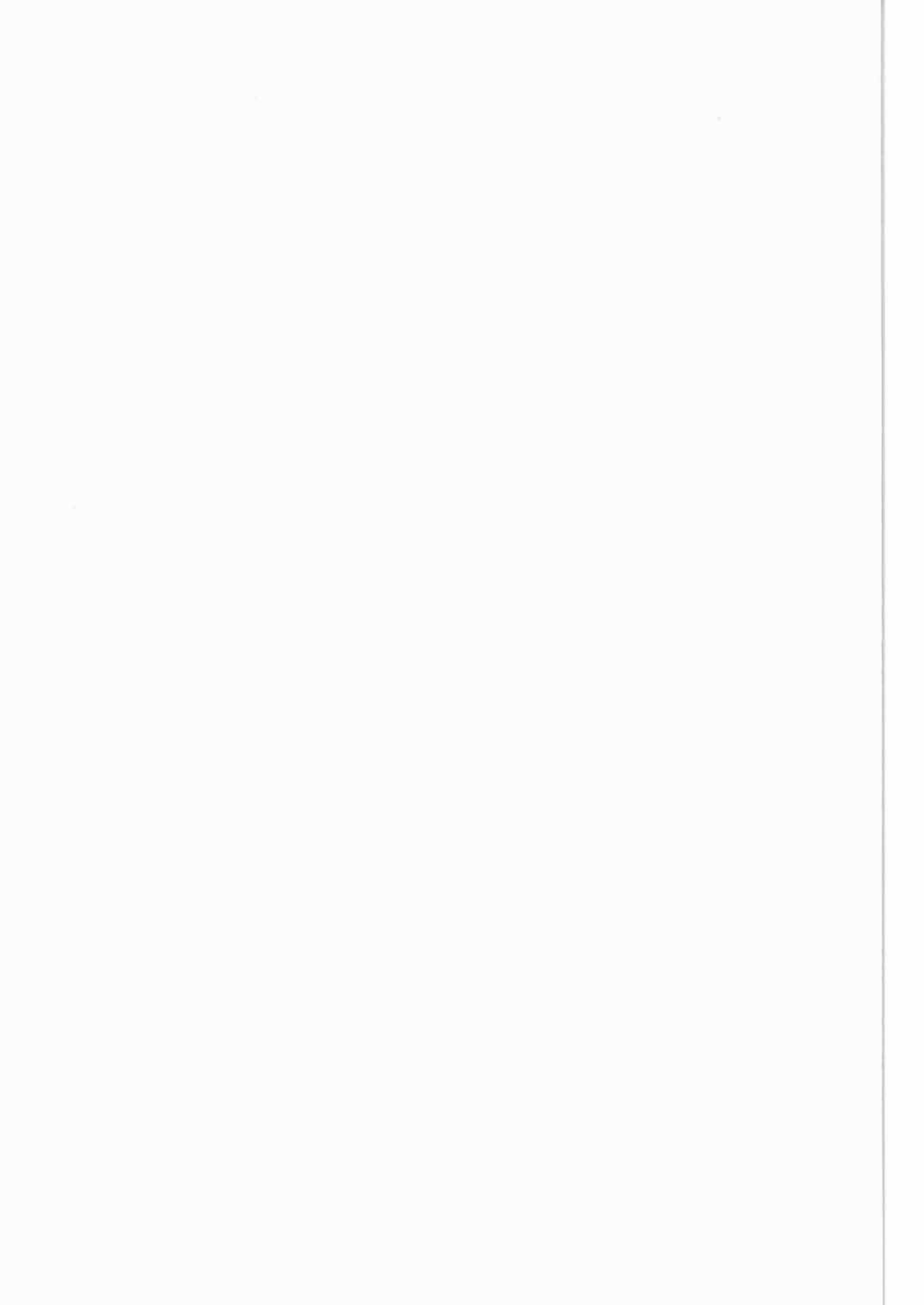
- (3) S B05柱穴1 検出状況(南から)      (4) S B05柱穴1 断面(西南から)
- 図版第17 (1) S B02-1 礎石(西から)      (2) S B02-2 礎石(東から)  
 (3) S B02-3 礎石(東から)      (4) S B02-4 礎石(東から)
- 図版第18 (1) S X03検出状況(西から)      (2) S X03内遺物出土状況(南西から)
- 図版第19 (1) 調査地東端部検出遺構(北から)      (2) 調査地東南部検出遺構(西から)
- 図版第20 (1) サブ・トレンチ内瓦層(南から)  
 (2) 伏見城に伴う整地層(トレンチ西南部分)
- 図版第21 (1) 下層遺構面全景(西南から)      (2) S D16・S D17検出状況(西から)
- 図版第22 出土遺物

#### 4. 平安京跡・旧二条城跡

- 図版第23 (1) 北地区第1面全景(上が北)      (2) 南地区第1面全景(上が西)
- 図版第24 (1) 北地区第2面全景(南から)      (2) 南地区第2面全景(南から)
- 図版第25 (1) 溝50全景(南東から)      (2) 溝50杭列検出状況(南から)
- 図版第26 (1) 溝50杭列検出状況(北東から)      (2) 溝50断面(南から)
- 図版第27 (1) 土坑62検出状況(南から)      (2) 土坑62断面(南から)
- 図版第28 (1) 土坑39断面(西から)      (2) 土坑43断面(西から)
- 図版第29 (1) 土坑42断面(北西から)      (2) 土坑63断面(西から)
- 図版第30 (1) 土坑114全景(南から)      (2) 土坑114遺物出土状況(南西から)
- 図版第31 (1) 土坑89・90断面(南から)      (2) 土坑136断面(北から)
- 図版第32 (1) 堀A 検出状況(南から)      (2) 堀A 断面(南から)
- 図版第33 (1) 堀B 検出状況(南から)      (2) 井戸210全景(南から)
- 図版第34 (1) 建物跡1 全景(上が北)      (2) 石組溝10南部(上が西)
- 図版第35 (1) 石組溝10南部(南から)      (2) 石組溝10屈曲部(東から)
- 図版第36 (1) 石組土坑12全景(西から)      (2) 石組土坑12東面石組状況(西から)
- 図版第37 (1) 石組土坑12南面石組状況(北から)  
 (2) 石組土坑12北面石組状況(南から)
- 図版第38 (1) 土坑303全景(南から)      (2) 土坑310全景(東から)
- 図版第39 (1) 堀A (北から)      (2) 堀A (南から)      (3) 堀A 断面(北から)
- 図版第40 (1) 土坑503全景(南から)      (2) 井戸546全景(北から)
- 図版第41 (1) 井戸501全景(北から)      (2) 井戸501石組状況(北から)
- 図版第42 出土遺物(1)
- 図版第43 出土遺物(2)

- 图版第44 出土遺物(3)  
图版第45 出土遺物(4)  
图版第46 出土遺物(5)  
图版第47 出土遺物(6)  
图版第48 出土遺物(7)  
图版第49 出土遺物(8)  
图版第50 出土遺物(9)  
图版第51 出土遺物(10)  
图版第52 出土遺物(11)  
图版第53 出土遺物(12)  
图版第54 出土遺物(13)  
图版第55 出土遺物(14)  
图版第56 出土遺物(15)  
图版第57 出土遺物(16)  
图版第58 出土遺物(17)





# 1. 丹後あじわいの郷関係遺跡 平成5年度発掘調査概要

## はじめに

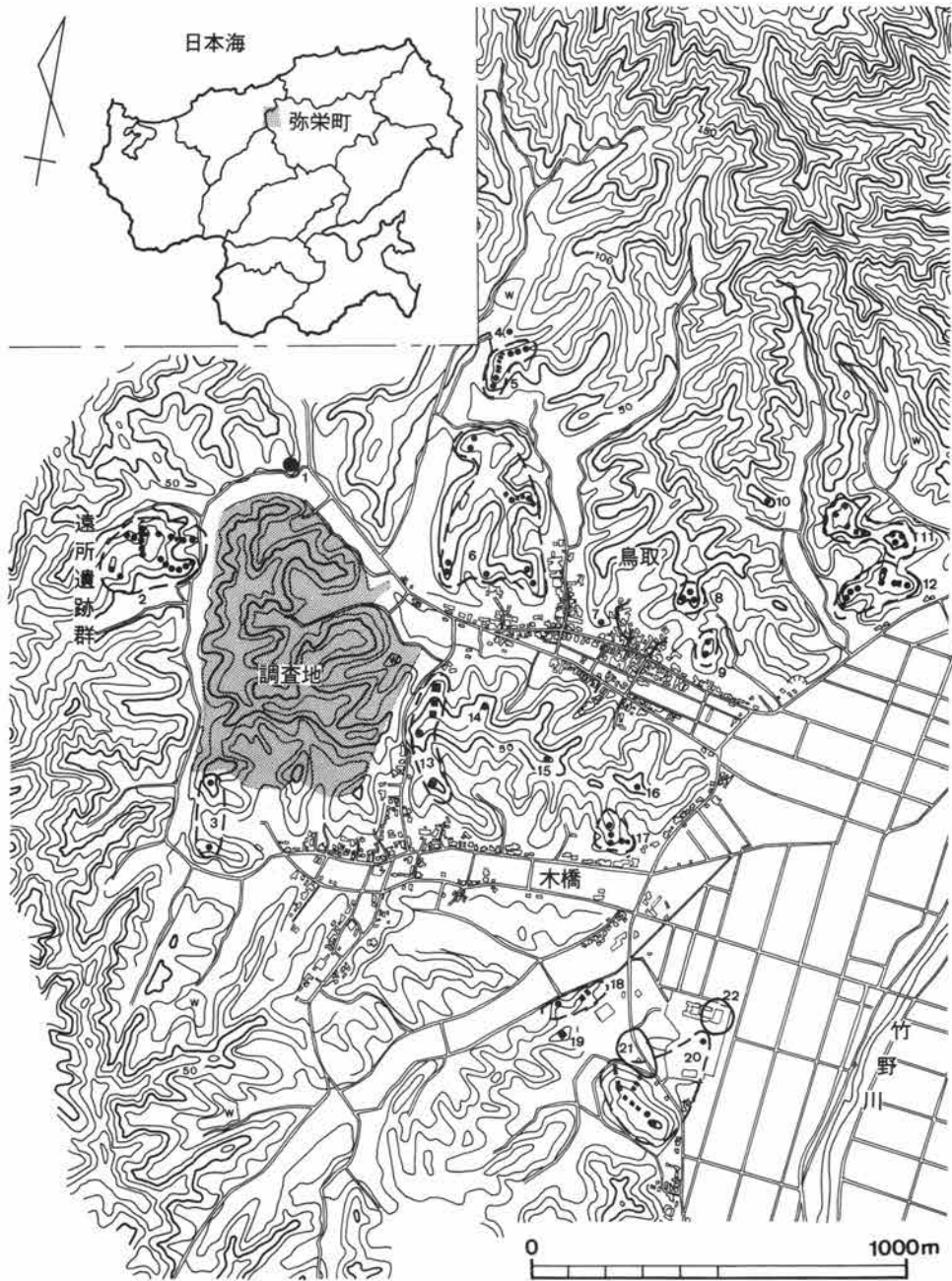
本調査は、京都府農林水産部園芸経済課が計画・推進している「丹後あじわいの郷」整備事業に伴い、(社)京都府農業開発公社の依頼を受けて、平成4年度から発掘調査を実施している。現在、丹後半島では丹後国営農地開発事業が進行中である。これに伴って計画された「丹後あじわいの郷」整備事業とは、この国営農地で生産された農産物の集荷・出荷場として、また体験型観光農園の提供など、生産から出荷・販売まで一元的に行う施設の整備で、京都府竹野郡弥栄町字鳥取・木橋の山間に計画された。事業予定地は、公園区域約37haと観光農園区域約63haからなる約100haの広大な面積である。ここは、古代製鉄遺跡として脚光を浴びた遠所遺跡群の東隣りにあたり、平成4年度に京都府教育委員会と弥栄町教育委員会が実施した分布調査の成果を基準にして実施したものである。

調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施してきた。今年度の現地調査は、平成5年4月20日から平成6年2月25日まで行い、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富、同主任調査員増田孝彦、同調査員岡崎研一、黒坪一樹が担当した。概報執筆は、岡崎研一が行った。調査期間中は、地元有志の方々や学生諸氏に参加していただき、作業員及び調査補助員、整理員として作業に従事していただいた<sup>(注1)</sup>。また、調査にあたり、弥栄町教育委員会をはじめとする関係諸機関の御協力を得ることができ、また地元の<sup>(注2)</sup>の方々にも多大な御協力を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。

なお、調査にかかる経費は、全額社団法人京都府農業開発公社が負担した。

付表1 平成4・5年度「丹後あじわいの郷」整備事業に伴う発掘調査一覧表

遺跡名	所在地	調査期間	担当者
ニゴレ遺跡 桐谷古墳群	竹野郡弥栄町字鳥取	平成4年9月24日 ～平成5年2月26日	調査第1係長 伊野近富 主任調査員 増田孝彦 調査員 岡崎研一 田代 弘
ニゴレ遺跡 鳥取峠古墳群 行者山古墳群	竹野郡弥栄町 字鳥取・字木橋	平成5年4月20日 ～平成6年2月25日	調査第1係長 伊野近富 主任調査員 増田孝彦 調査員 岡崎研一 黒坪一樹



第1図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図

- |            |           |             |            |               |
|------------|-----------|-------------|------------|---------------|
| 1. ニゴレ古墳   | 2. 遠所古墳群  | 3. 奥ノ院古墳群   | 4. 石穴古墳    | 5. ゲンギョウの山古墳群 |
| 6. 宮ノ森古墳群  | 7. 御殿口古墓  | 8. 鳥取愛宕山古墳群 | 9. 大將軍古墳群  | 10. 中山古墳      |
| 11. 小宮谷古墳群 | 12. 桑田古墳群 | 13. 谷奥古墳群   | 14. 黒国古墳   | 15. 留主田古墳     |
| 16. 赤井谷古墳  | 17. 堤谷古墳群 | 18. 高岸古墳群   | 19. オテジ谷古墳 | 20. 坂野古墳群     |
| 21. 坂野遺跡   | 22. 坂野丘遺跡 |             |            |               |

### 位置と周辺の遺跡

丹後半島は、京都府北部に位置する。今回報告するニゴレ遺跡などは、丹後半島の中央である弥栄町に位置し、半島を北流する竹野川中流域の西岸約2kmにあたる。この付近に



第2図 調査地配置図(付表2・3参照)



付表2 「丹後あじわいの郷」整備事業に伴う関連遺跡発掘調査一覧表

地点	名称	種類	所在地		遺跡の概要	備考 「遺跡調査地図」に対応
			大字	小字		
1	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端 一辺6m	1号墳に対応
2	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺4~10m	
3	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺4~10m	
4	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺4.5m、高さ1.5m	2号墳に対応
5	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺8.5m、高さ1.5m	3号墳に対応
6	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺4~10m	
7	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 径9m、高さ1.5m	4号墳に対応
8	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺4m、高さ0.3m	5号墳に対応
9	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 径2m、高さ0.3m	6号墳に対応
10	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺6~8m	
11	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 径12m	古墳状隆起か。
12	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 径13m、高さ2m	7号墳に対応
13	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺4~8m	
14	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺4~8m	
15	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺4~8m	
16	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺4~8m	
17	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺4~8m	
18	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺4~8m	
19	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端 径8.6m、高さ1.8m	10号墳に対応
20	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端 径9.5m、高さ1.5m	9号墳に対応
21	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端 一辺5.5m、高さ1.8m	8号墳に対応
22	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端 径8.5m、高さ2m	11号墳に対応
23	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 径20m	古墳状隆起か。
24	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端 径10.8m、高さ2.3m	13号墳に対応
25	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端 一辺9.8m、高さ1.5m	12号墳に対応
26	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端 一辺5~7m	
27	—	—	鳥取	ニゴレ	丘陵稜から炭窯1基確認。	弥栄町教委調査(H5年度)
28	入道奥古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺7m	古墳状隆起か。
29	入道奥古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺7m	古墳状隆起か。
30	—	—	鳥取	ニゴレ	古墳として認められなかった。	弥栄町教委調査(H5年度)
31	—	—	鳥取	ニゴレ	古墳として認められなかった。	弥栄町教委調査(H5年度)
32	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺7m	残丘?
33	桐谷古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 径18m	
34	—	—	鳥取	ニゴレ	古墳として認められなかった。	当センター調査(H4年度)
35	—	—	鳥取	ニゴレ	古墳として認められなかった。	当センター調査(H4年度)
36	—	—	鳥取	ニゴレ	古墳として認められなかった。	当センター調査(H4年度)
37	—	—	鳥取	ニゴレ	古墳として認められなかった。	当センター調査(H4年度)
38	—	—	鳥取	ニゴレ	古墳として認められなかった。	当センター調査(H4年度)
39	—	—	鳥取	ニゴレ	古墳として認められなかった。	当センター調査(H4年度)
40	—	—	鳥取	ニゴレ	古墳として認められなかった。	当センター調査(H4年度)
41	桐谷古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 径10m、高さ2m、主体部1基 2号墳とする。	当センター調査(H4年度)

丹後あじわいの郷関係遺跡平成5年度発掘調査概要

42	桐谷古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 径15m、高さ2m、主体部2基 1号墳とする。	当センター調査(H4年度)
43	—	—	鳥取	ニゴレ	古墳として認められなかった。	当センター調査(H4年度)
44	—	—	鳥取	ニゴレ	古墳として認められなかった。	当センター調査(H4年度)
45	—	—	鳥取	ニゴレ	古墳として認められなかった。	当センター調査(H4年度)
46	—	—	鳥取	ニゴレ	古墳として認められなかった。	当センター調査(H4年度)
47	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺3～6m	
48	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺3～6m	
49	鳥取峠古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 径10m	
50	鳥取峠古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 径8m	古墳状隆起
51	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺6m	
52	鳥取峠古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 径10m	古墳状隆起か。
53	鳥取峠古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 径8m	
54	—	円墳	木橋	谷奥	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
55	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺2～5m	残丘か？
56	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺2～5m	
57	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺2～5m	
58	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜 一辺2～5m	
59	鳥取峠古墳群	円墳	木橋	権谷	丘陵稜 主体部の一部を確認。鳥取峠1号墳とする。	当センター調査(H5年度)
60	—	—	木橋	権谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
61	—	—	木橋	権谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
62	—	—	木橋	権谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
63	行者山古墳群	円墳	木橋	西谷	丘陵稜 主体部の一部を確認。行者山1号墳とする。	当センター調査(H5年度)
64	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
65	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
66	行者山古墳群	円墳	木橋	西谷	丘陵稜 径10m	小規模な階段状地形
67	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜 一辺2～8m	小規模な階段状地形
68	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
69	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
70	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
71	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
72	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
73	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
74	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
75	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
76	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
77	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
78	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
79	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
80	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
81	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
82	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜 一辺2～8m	当センター調査(H5年度)

83	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	小規模な階段状地形
84	—	—	木橋	西谷	古墳として認められなかった。	当センター調査(H5年度)
85	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜 一辺2～6m	当センター調査(H5年度)
86	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜 一辺2～6m	小規模な階段状地形
87	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜 一辺2～6m	小規模な階段状地形
88	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜 一辺2～6m	小規模な階段状地形
89	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜 一辺2～6m	小規模な階段状地形
90	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜 一辺2～6m	小規模な階段状地形
91	ニゴレ製鉄炉	製鉄	鳥取	ニゴレ	丘陵裾 鉄滓露出	小規模な階段状地形

付表3 「丹後あじわいの郷」(鳥取・木橋地区)試掘調査成果一覧表(番号はトレンチ番号)

鳥取地区				T31	なし	なし	
番号	出土遺物	検出遺構	備考	T32	なし	なし	
T1	なし	なし		T33	なし	なし	
T2	なし	なし		A拡張区	須恵器・土師器 ・炭	炭窯17基・住 居跡10基	
T3	土師器・須恵器	なし		B拡張区	須恵器・土師器 ・炭	住居跡21基・ 鍛冶炉	
T4	土師器・須恵器	なし		C拡張区	鉄滓・須恵器・ 土師器	製鉄炉1基・ 炭窯1基	
T5	なし	なし		D拡張区	鉄滓	製鉄炉1基	
T6	なし	なし		木橋地区・平成6年度調査予定地			
T7	なし	なし		E拡張区	鉄滓	製鉄炉?	
T8	弥生土器(後期) 土師器・須恵器	流路跡		F拡張区	鉄滓	製鉄炉?	
T9	なし	なし		G拡張区	炭	炭窯2基	
T10	炭	炭窯4基		H拡張区	なし	古墳	59地点
T11	なし	なし		木橋地区			
T12	なし	なし		T34	なし	古墳ではない	54地点
T13	なし	なし		T35	なし	古墳ではない	60～62 地点
T14	なし	なし		T36	なし	なし	
T15	なし	なし		T37	なし	なし	
T16	なし	なし		T38	なし	なし	
T17	なし	なし		T39	なし	なし	
T18	なし	なし		T40	炭	炭窯1基	
T19	なし	なし		T41	なし	なし	
T20	なし	なし		T42	なし	なし	
T21	炭	炭窯3基		T43	なし	なし	
T22	炭	炭窯(近代窯)		T44	炭	なし	
T23	なし	なし		T45	炭・土器片	なし	
T24	なし	なし		T46	なし	なし	
T25	なし	なし		T47	なし	なし	
T26	炭	なし		T48	なし	なし	
T27	炭	炭窯(近代窯)		T49	なし	なし	
T28	なし	なし					
T29	なし	なし					
T30	炭	柱穴					

T50	なし	なし		T65	なし	なし	
T51	なし	なし		T66	炭	なし	
T52	炭・土器片	なし		T67	土器片	主体部の一部 を確認	63地点
T53	なし	なし		T68	炭	なし	
T54	なし	なし		T69	なし	なし	
T55	なし	古墳ではない	83・84 地点	T70	なし	なし	
T56	なし	なし		T71	なし	なし	
T57	炭	なし		T72	なし	古墳ではない	64地点
T58	炭・土器片	なし		T73	なし	なし	
T59	なし	なし		T74	なし	なし	
T60	なし	古墳ではない	76～81 地点	T75	なし	なし	
T61	炭	なし		T76	なし	なし	
T62	炭	なし		T77	なし	古墳ではない	65地点
T63	なし	なし		T78	なし	なし	
T64	なし	古墳ではない	68～75 地点	T79	なし	なし	
				T80	なし	なし	

は、4世紀後半から5世紀前半に調査地北側の丘陵上にゲンギョウの山古墳群と宮の森古墳群が構築される<sup>(注3)</sup>。5世紀前半から中頃にはオテジ谷古墳<sup>(注4)</sup>が、また5世紀中頃になると府道網野岩滝線沿いにあるニゴレ古墳が構築される<sup>(注5)</sup>。5世紀末から6世紀中頃には調査地西側に遠所古墳群が構築<sup>(注6)</sup>され、6世紀前半には宮の森古墳群に再度古墳が築造される。6世紀後半には遠所古墳群の一部の古墳に追葬がなされ、7世紀初頭にはゲンギョウの山古墳群内に古墳が構築される。古墳以外では、6世紀後半と8世紀後半の製鉄遺構を検出した遠所遺跡群が、遠所古墳群の地を中心に展開する。この地域での両時期の製鉄炉の発見ならびに、製鉄から鍛冶段階まで一貫して行われていたことなどは、この地域の歴史や、製鉄史に大きな波紋を起し注目され、著名な遺跡となっている<sup>(注7)</sup>。平成4年度の京都府教育委員会と弥栄町教育委員会が実施した分布調査時に鉄滓の堆積を確認していることから、ニゴレ遺跡も遠所遺跡群と同様の製鉄遺跡であると考えられていた。これらの分布調査成果をもとに、平成4年度は主に鳥取地区の試掘調査を行った。その結果、丘陵を掘り込んで造った住居跡や炭窯などの遺構が確認できた。今年度は、試掘調査を進める一方、昨年度の試掘調査成果をもとに、一部本調査を実施してきた。その結果、新たに製鉄炉2基を発見するにいたり、遠所遺跡群から今回の調査地までの広範囲の山間部で、6世紀後半から9世紀後半までの約300年間、連綿と製鉄を行っていたことが判明した。なお、弥栄町内には「遠所<sup>とんじょう</sup>」・「井辺<sup>いのべ</sup>」・「芋野<sup>いもの</sup>」など製鉄関連と思われる地名が存在する。



## (1) ニゴレ遺跡

### 1. はじめに

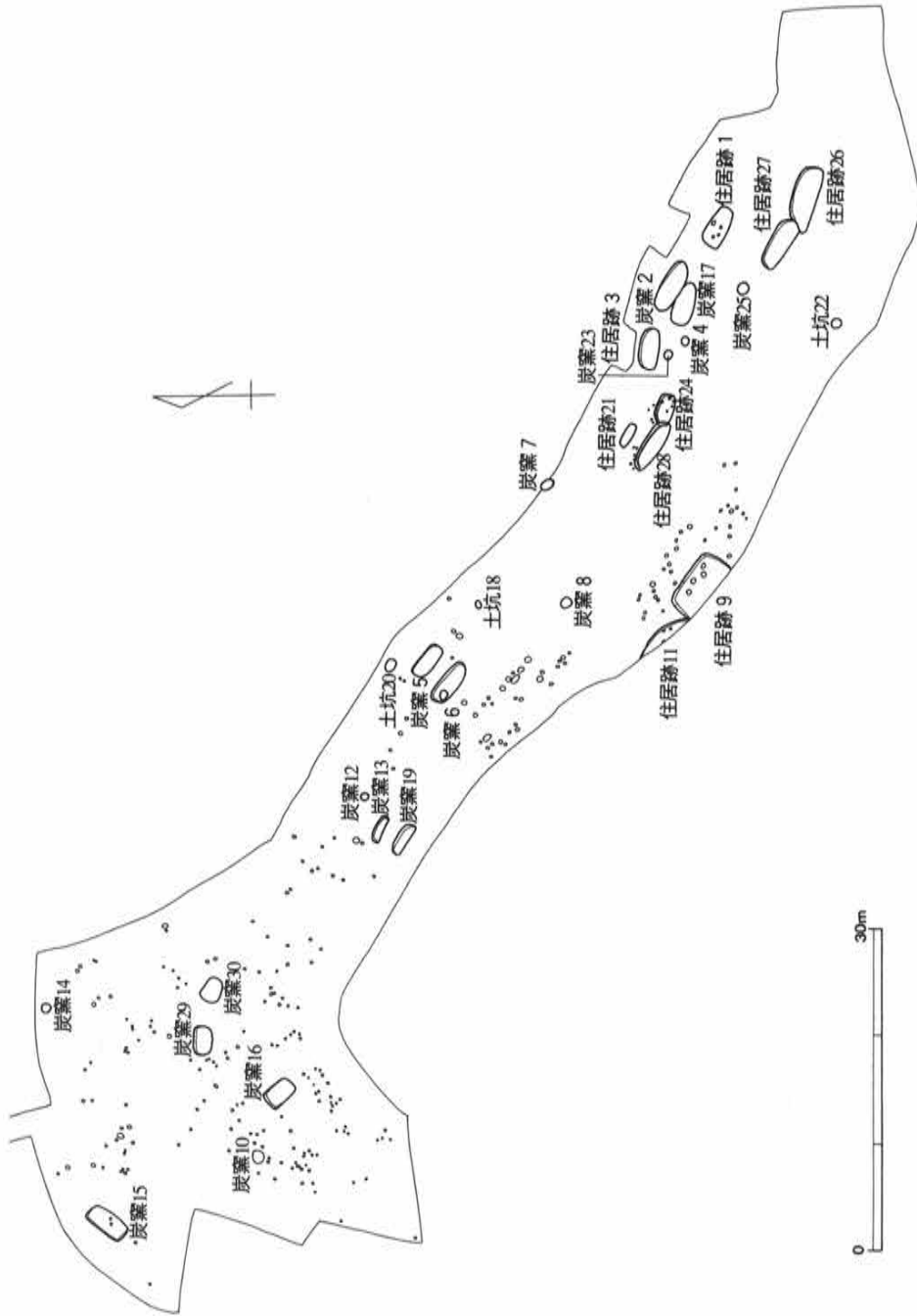
平成4年度に実施した分布調査の成果をもとに、4年度には鳥取地区の谷部と一部の丘陵部の試掘調査を実施した。5年度には、鳥取地区の残りの丘陵部の試掘調査と遺構が集中すると思われる4か所の面的な調査を行った。また、木橋地区の丘陵部ならびに谷部の試掘調査も実施した。これらの成果については、第2図と付表2に示し、試掘調査と拡張区ごとに後述する。

### 2. 試掘調査

試掘調査は、昨年度に引き続いて、鳥取地区ならびに木橋地区で実施し、その面積は、約3,800㎡である。

鳥取地区の試掘調査は、A拡張区の位置する丘陵向かい側の斜面とその尾根筋の範囲、「丹後あじわいの郷」北東隅の池北側の平地部の範囲、B拡張区北東部の田畑部の造成にかかる範囲を、重機で実施した。その結果、B拡張区前面の田畑部の大半は、現在府道網野岩滝線沿いに東流する鳥取川の氾濫域で、耕作土下約2mには拳大の礫が多量に堆積していた。地元の方の話によると、A拡張区の位置する丘陵東側の田畑部から多量の鉄滓を採集したということであった。ところが、試掘を行ったところ、丘陵裾を削って田畑部を広げており、おそらく造成範囲外の田畑部下に製鉄炉が存在すると考えられ、今回の試掘調査ではそのような痕跡は認められなかった。「丹後あじわいの郷」北東隅の池北側の平坦部からは、流路跡を検出した。流路跡は、小さな谷部を北流しており、その規模は幅約10m・耕作土下約4.5mで流路の底となった。流路最下層からは弥生時代後期の土器が流れ込みの形で出土した。耕作土下約3mからは10~20cmの炭の堆積が見られ、その直上で奈良時代後半の土器が出土した。流路跡東側には住居に適した高台があり、おそらくその時代の住居跡が存在するものと考ええる。また、炭の堆積層が認められたことは、この時代の焼失家屋の存在もうかがわせるものと考えている。この高台については、造成範囲外となる。A拡張区向かい側の丘陵部の試掘も行ったが、ここからは明確な遺構の検出にはいたらなかった。「丹後あじわいの郷」造成予定地の中央部を横切る谷筋の奥で若干の炭が見られたことから、その付近を部分的に拡張して遺構の有無を確認する試掘調査を行った。その結果、小型の炭窯3基を確認することができた。

木橋地区においては、分布調査によって古墳があると考えられている丘陵尾根筋、斜面



第3図 A 拡張区測量図

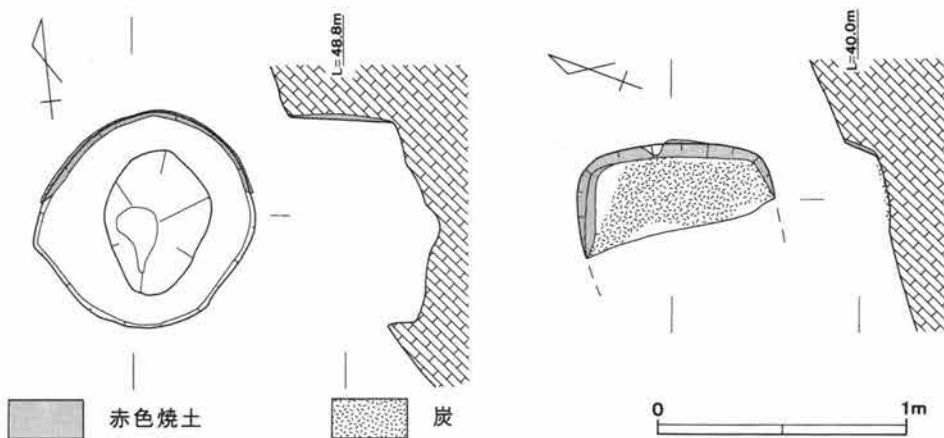
を試掘した。59・63地点から主体部ではないかと思われる色の変わりが一部に見られたことから、59地点を鳥取峠1号墳、63地点を行者山1号墳としたが、63地点については、試掘調査後造成範囲からはずされることとなった。この他の54・60～62・64・65・68～81・83・84地点は、古墳状隆起に見えたが自然地形であることがわかった。谷筋にせり出す丘陵端部は、大きく土砂崩れしており、何らかの原因で現在の地形になったと考えられる。

### 3. A拡張区

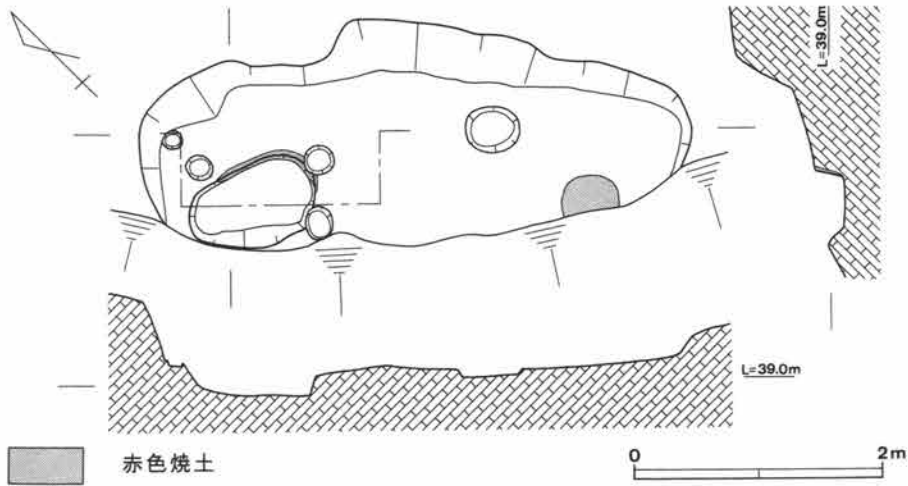
昨年度の試掘調査成果から、桐谷古墳群北側の丘陵南側斜面を約3,000㎡拡張した。その結果、炭窯17基、住居跡10基、柱穴群などを検出した。ここでは、残りのよい遺構を取り上げてその概要を説明する。

**炭窯** 検出した炭窯は、その平面形態から大きく二分できた。径ないし一辺が1m前後の小型と、長辺が2～4mあるやや大型とに分かれる。隣接する遠所遺跡群では、この他に登り窯形態の窯や横口が5か所ほど付く補助燃焼口付きの炭窯など大型の炭窯が確認されているが、今回の調査地からは検出しなかった。このようなことから、長辺が2～4mある炭窯を中型の炭窯と仮称することにする。いずれも丘陵斜面に構築されており、遺構の山手側半分を検出したにすぎない。以下、主な炭窯について概略する。

**炭窯14** A拡張区の丘陵斜面高所に構築された、径約90cmを測る円形の小型炭窯である。検出状況からみる限り、斜面高位側で約40cm、低位側で約10cm掘り込み、中に薪を積み上げて粘土で覆って操業したようである。火のまわりをよくするためか、窯の床面中央が約10cm窪んでいた。高位側の壁面にのみ赤色の焼土が確認できた。この付近はかなり急斜面であるため、近くにわずかな作業場としての平坦地があったと思われるが、このか所



第4図 炭窯14(左図)・炭窯12(右図)実測図



第5図 炭窯6実測図

はすでに流失しており不明である。このように丘陵の高所に、しかも急斜面にまで炭窯を構築するのは、それだけ製鉄を行うにあたり炭が必要とされたと同時に、現地で炭を作り搬出していたようである。遠所遺跡群では、伐採を行いながら窯を構築したためか、このような窯が一定の標高に並ぶ傾向がある。当遺跡では、調査地に限りがあり、それを確認するにはいたらなかったが、同じ傾向を示すものとする。

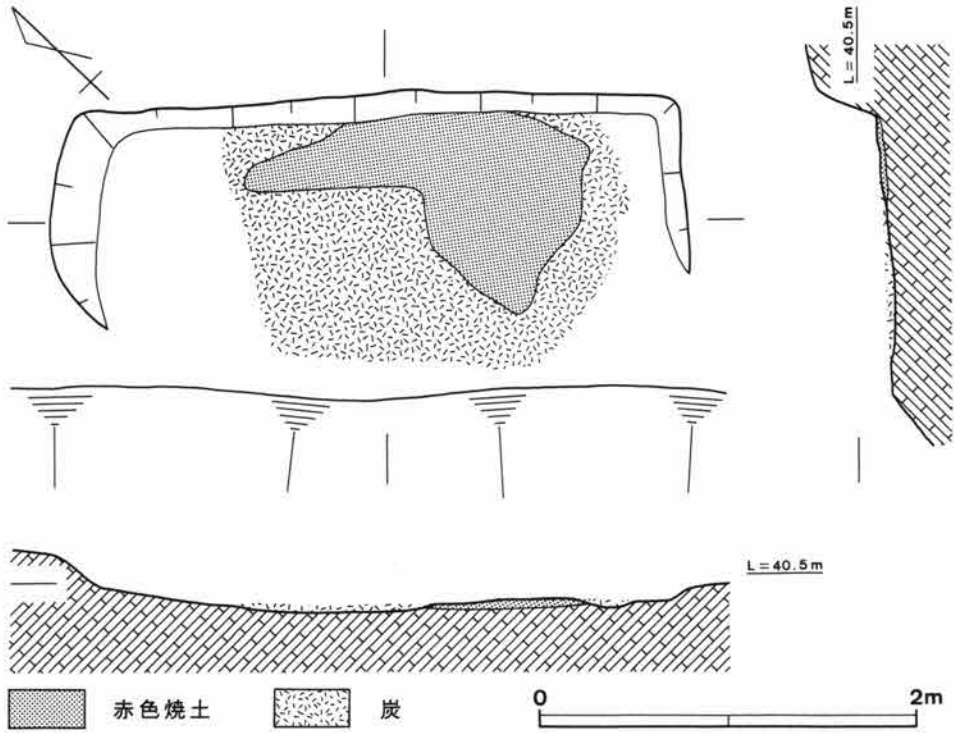
**炭窯12** 一辺約80cmを測る、方形の小型炭窯である。A拡張区の丘陵裾部に構築されており、丘陵低位側が流失していたため、もう一辺の長さについては不明である。現存する三方の壁からは、赤色の焼土が確認できた。窯の床面は平坦であるが、低位側にわずかに傾斜していた。また、床全面から炭が薄く検出できた。炭窯14と同じように構築・操業されたと考えられるが、このような方形の炭窯は、非常に少なかった。

このような小型炭窯は、遠所遺跡群では数百基を数えるほど構築されていたが、当遺跡においてもかなりの数に及ぶと思われる。

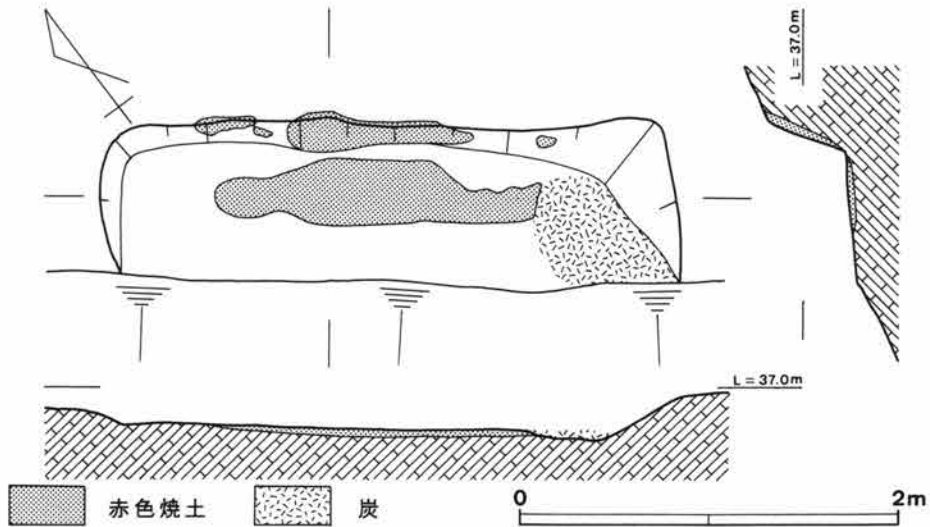
**炭窯6** この窯は、作業場とするためか丘陵を「L」字状に掘削しており、長辺4.4m、確認した短辺1.8mの平坦地を造った後に、その平坦地端から1mほどの不定形な小型炭窯を検出した。炭窯の深さは、平坦地から約20cmを測る。山手の壁面のみ赤色に焼けていた。周囲の平坦地は、わずかに傾斜しており、住居跡のように排水溝はめぐらせておらず、それに伴う柱穴もなかった。これは住居跡ではなく、炭窯を構築し操業するにあたっての簡単な作業場と捉えられる。平坦地のもう一方の端の地面は、わずかで焼けていた。また、炭窯の四隅のうち3か所から径約20cm・深さ約20cmの柱穴を検出した。非常に窯体に近いところにあり、赤色焼土にかかる状態で掘られた柱穴もあった。これらの柱穴は、



平坦地を掘り下げていく際には確認されず、炭窯と同一面で見つかったことから、窯構築時に掘られたものと思われる。炭窯14に比べて浅く掘られて構築されていることから、他の小型炭窯のように薪を積み上げて粘土で覆った窯ではなく、四隅に簡単な柱を立てて竹



第6図 炭窯5実測図



第7図 炭窯19実測図

や木などを用いてしがらみ状にし、粘土を貼りつけて窯壁を造ったものと考えられる。このような窯壁片は、周囲から出土しなかった。焚き口については、作業場と考えられる平坦地より窯体に向かってわずかに傾斜していることから、平坦地中央付近が焚き口になるものと思われる。炭窯は、崖に面して見つかり、おそらくもう少し丘陵低位側に平坦地があったと考えられる。

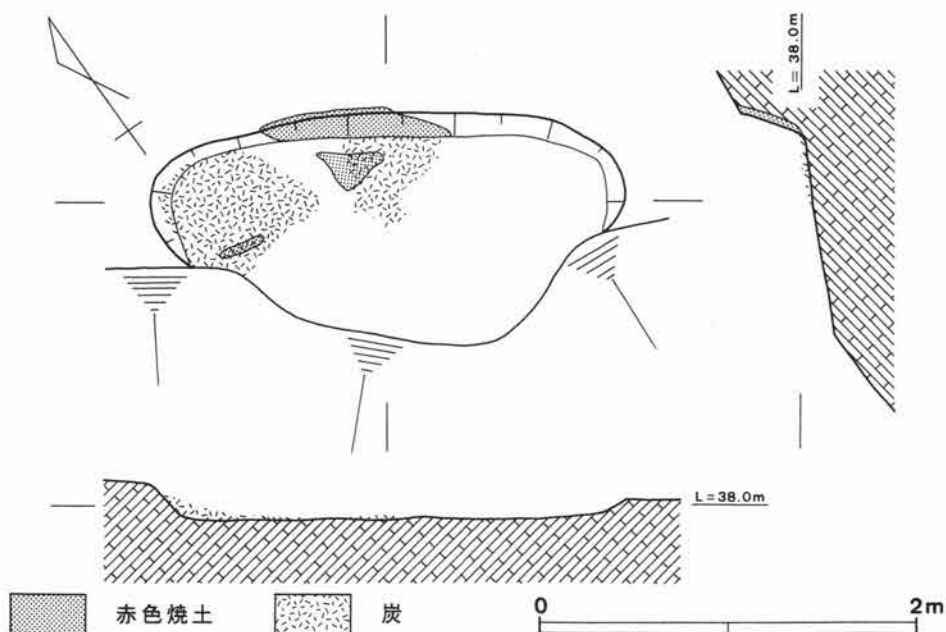
**炭窯5** 丘陵斜面に構築された、長辺約3.4m、確認した短辺約1.5mを測る、中型の炭窯である。山手側で約30cm掘り下げて、丘陵斜面を平坦にし窯を構築したようで、平坦地中央部から2m×1.4mの範囲で、赤色の焼土や炭の堆積を確認した。平坦地南東側に広い範囲で焼土が確認でき、長辺の床面傾斜が南東部より北西部にかけてわずかに傾斜していたことから、平坦地南東側が焚き口部になるものと思われる。現存の壁には、焼けた痕跡は認められなかった。

**炭窯19** 丘陵斜面に構築された、長辺約3m、確認した短辺約0.8m、山手側での深さ約50cmを測る、中型の炭窯である。窯の大半は、すでに流失しており、規模については明確でない。炭窯5と同様に床面は傾斜しており、低い方に炭の堆積がみられた。そこから20~40cmの幅で細長く長辺の壁に沿って赤色に焼けており、また平行するかのように部分的に壁面も焼けていた。

このような窯は、遠所遺跡群でも見つかっており、同じように焼土が広がっていた。これは、丘陵斜面を「L」字状に掘削した後に、床面に等高線と平行に木を並べ、その上に薪を積み上げ、粘土で覆って焼いたものと思われる。このため、床に並べた木と木の間のみ赤色の焼土が残ったものと考えられる。この形態の炭窯は、平坦面の大半を炭窯として利用していたようで、炭窯19は、残りは悪いもののその典型的な窯である。平坦部の南東端で検出した炭は、製品を掻き出した際に堆積したものと思われ、この付近がおそらく焚き口部になると考えられる。平坦部の北西端は、焚き口から最も遠く、炭の堆積や焼けた痕跡もないことから、この付近に煙道部があったと思われる。

このようにみると、炭窯5についても、同じ形態の窯であったと思われる。平坦部の南東側の径約80cmの範囲が赤色に焼けていることから、この付近が焚き口部にあたり、焼土が細長くのびている範囲は炭を作っていた焼成部となり、その北西側の炭や焼土が確認されなかった付近に煙道があったと思われる。このような中型の窯は、小型の窯と比較しても焼成部が大きく、薪の量や薪を覆うための粘土もかなりの量が必要とされたと思われ、薪や粘土を置くための作業場が必要であったと考えられる。しかし、窯周囲からそのような遺構は確認されず、おそらく流失しているのではないかと考えられた。

**炭窯13** 丘陵斜面を長楕円形に掘り込んで平坦地を造り、築かれた中型の炭窯である。

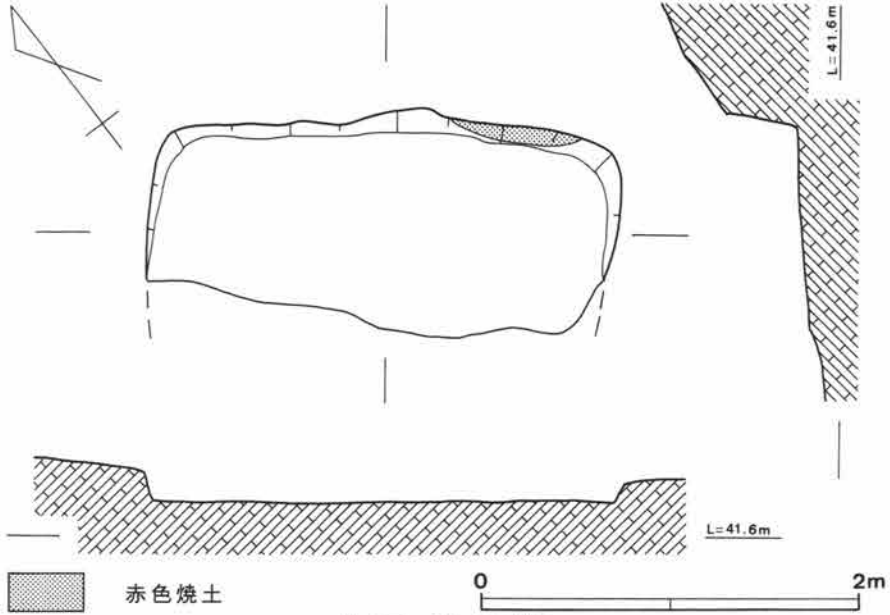


第8図 炭窯13実測図

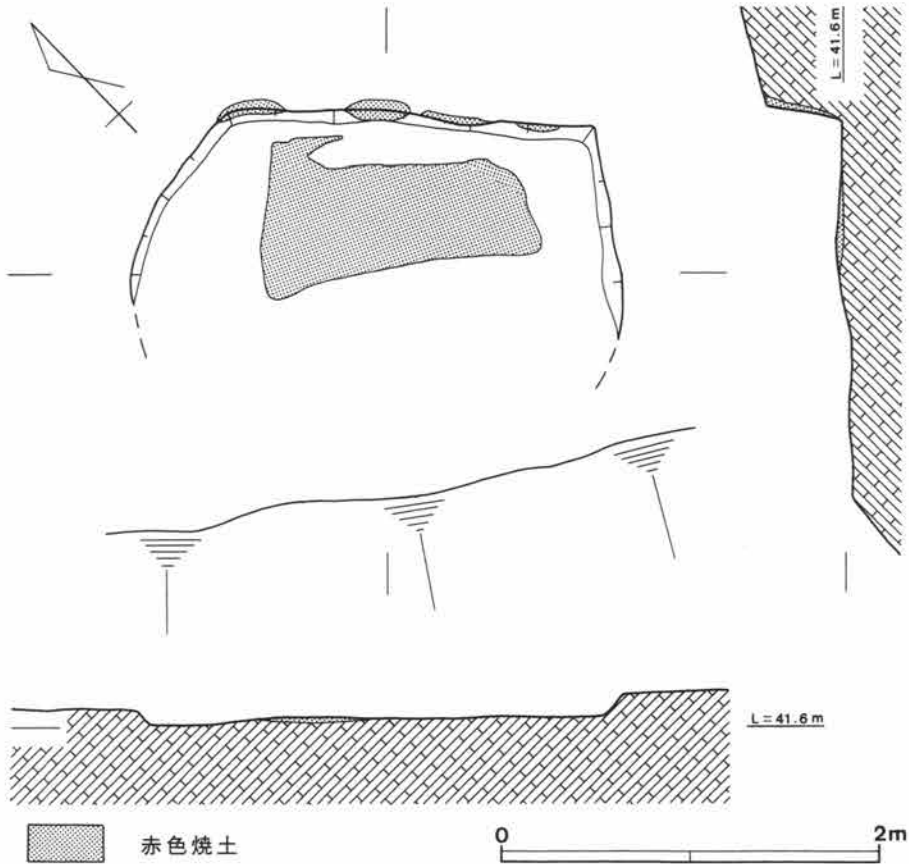
炭の堆積状況やわずかな床面傾斜から、平坦地の北西側に焚き口をもつ窯と考えられる。焼成部にあたる床面からはあまり焼土を確認することができず、この付近の壁面がわずかに焼けていた。窯の主軸ラインより崖側の残りが悪く、この付近も床面は焼けていたと思われるが、雨などによる自然の流失によって、遺構は失われていた。

**炭窯29** 丘陵中腹のゆるやかな地形を利用して構築された炭窯である。丘陵斜面を掘削した範囲は、長辺約2.5m、検出した短辺約1mを測る。壁面の一部に焼土を確認したにすぎず、窯の焚き口部、焼成部、煙道部の位置については不明である。この付近の丘陵斜面からは、多くの柱穴を検出しているが、窯に伴う柱穴の検出にはいたらなかった。また、この窯は炭窯30と隣接して構築されており、堆積状況などからほぼ同時期に操業していたと思われた。その際に薪などを保管しておくための仮施設がこの付近にあったと思われる。その時の柱穴が周辺の柱穴群の一部になるものと考えられる。両炭窯間には、わずかな平坦地があり、共通の作業場であったと思われた。このように、炭窯29と炭窯30の位置関係と同時期に操業していたことを考えると、炭窯29は平坦地の南東側が焚き口部に、また炭窯30は平坦地の北西側が焚き口部になると考えられる。

**炭窯30** 炭窯29の東側に隣接して構築された中型の炭窯である。丘陵斜面のゆるやかな部分を掘削して平坦地を造り、窯を構築していた。平坦地の規模は、長辺約2.5m、確認した短辺約2.1mを測る。平坦地中央部は、約1.5m×50cmの範囲が焼けており、この付



第9図 炭窯29実測図

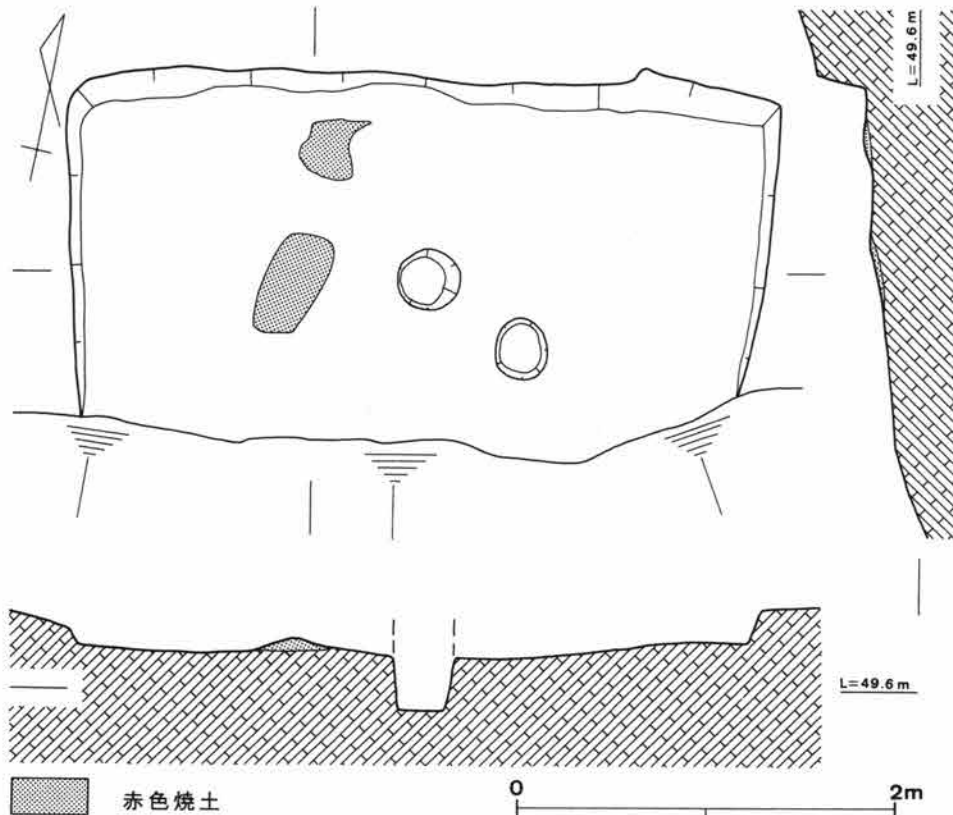


第10図 炭窯30実測図

近の壁面も部分的に赤色に焼けていた。なかでも、平坦地中央部の焼土の範囲のうち、山手側と谷側の長さ約1.5m×幅約10cmの範囲が特に焼けており、検出した時はその部分のみ黒色になっていた。おそらく、特に焼けていた部分の間と壁までの幅約20cmのところに、木を寝かせてその上に薪を積んでいたようである。床面傾斜や焼土の焼け具合などから、平坦地の北西端が焚き口部になると考えられる。窯の中軸ラインより崖側は、わずかに自然の削平を受けており、炭や焼土などは検出されなかった。しかし、今回検出した中型の炭窯のうち、平坦地の範囲は最も残りがよい。

**炭窯15** 丘陵高所に築かれた炭窯である。丘陵斜面の緩傾斜地に、長辺約3.7m、確認した短辺約2mの範囲を「L」字状に掘削して平坦地を造り、窯を築いている。非常に残りは悪く、部分的に焼土を床面で確認したにすぎない。焚き口部や窯の方向については不明である。平坦地で検出した柱穴は、掘形が窯の埋土から切り込んでいることからすれば、窯操業後のもので窯に伴うものではなかったようである。

これら中型の炭窯は、A拡張区のほぼ全面から検出しており、その窯間に小型炭窯が点在する状況で検出した。中型の炭窯は、すべて等高線に平行しており、その向きは一定で



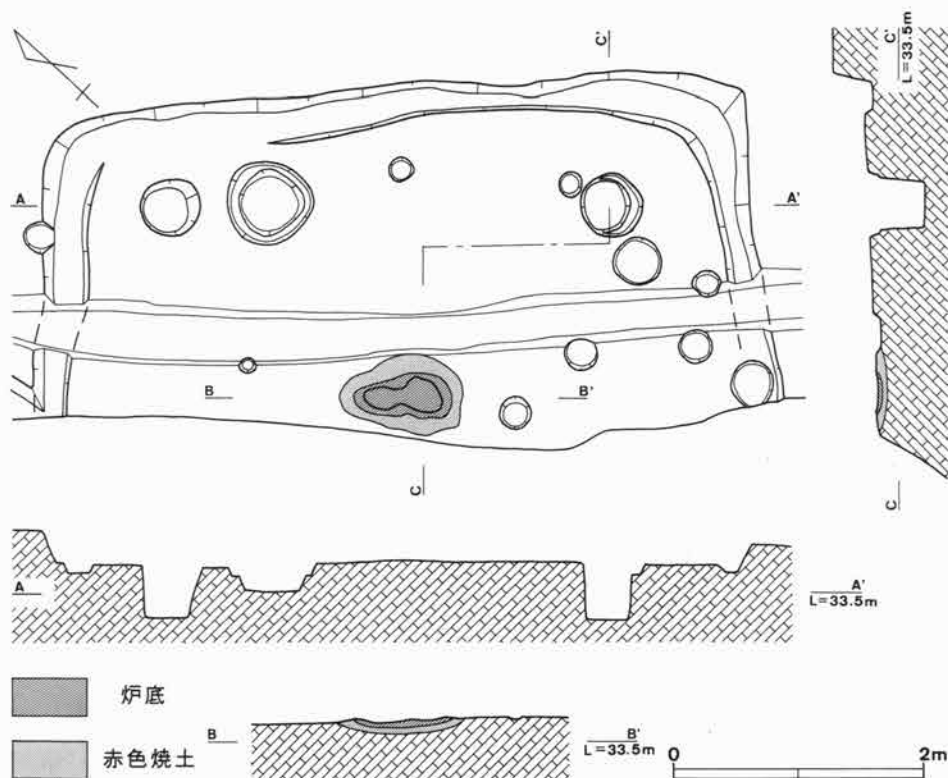
第11図 炭窯15実測図



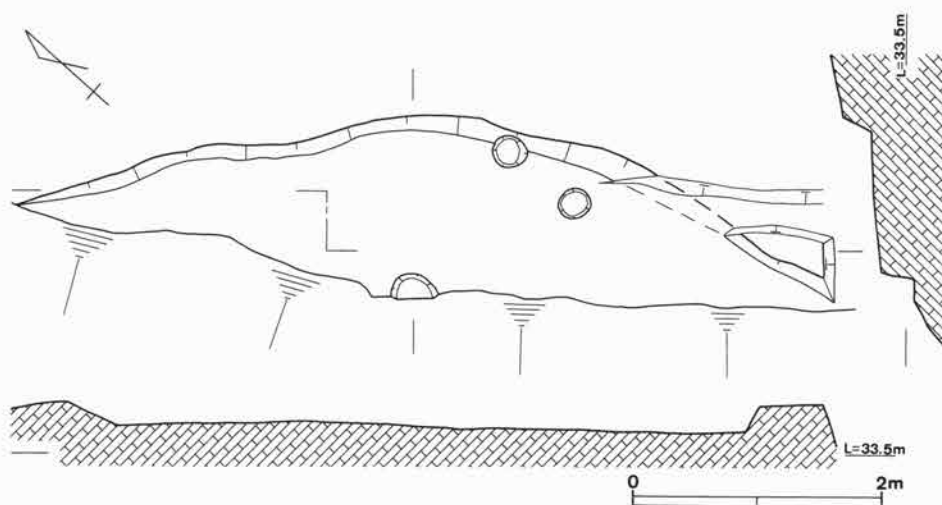
はなく、また個々の炭窯を見ても焚き口部は一定でなかった。これは、小型炭窯と同様に薪を粘土で覆って蒸し焼き状態にして炭を作るため、あえて風向きを考慮する必要はなく、地形などに応じて焚き口を設けたものと考えられる。

**住居跡** A拡張区で検出した住居跡は8基であり、すべて谷側が後世の削平を受けたり、自然に流失していたことから、その全体は不明である。その大半は、炭窯と同様に丘陵斜面を掘削して平坦地を造り、その土を住居前面に盛ることによって生活空間を広げたものと考えられるが、盛り土部はすでに流失しており、全容は不明であった。このため、確認した住居跡をみると竪穴式住居に近いが、おそらく地形に応じてこのような形態の住居になったと考えられ、ここでは単に住居跡として取り上げることにする。

**住居跡9** A拡張区の丘陵裾部の平坦地で検出した。この平坦地は、調査前には畑として利用されており、平坦地近くの丘陵斜面が急傾斜であったことから、後世にかなり削平を受けているものと思われた。このような平坦地端で住居跡9を検出した。住居跡の規模は、長辺約5.7m、確認した短辺の長さは約3mであった。壁に沿って幅20~30cmの、床面よりわずかに深い排水溝がめぐっていた。この建物跡に伴う柱穴は、2か所で確認して



第12図 住居跡9実測図

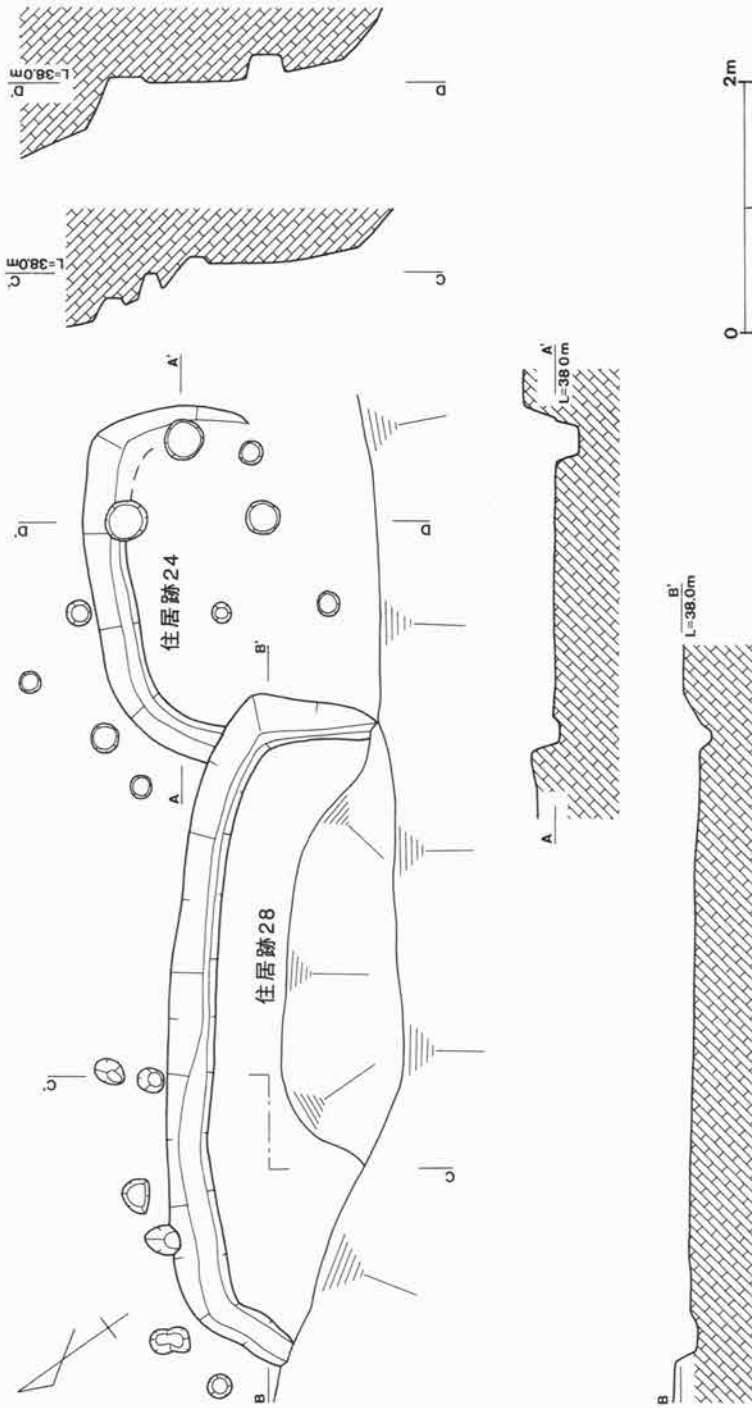


第13図 住居跡11実測図

おり、柱穴間は約3.6mを測った。その他の柱穴は、後世の削平によってわからなくなっている。この住居跡のほぼ中央部から、長辺約90cm・短辺約60cmの卵形をした範囲で焼土を確認した。焼土の中央部にあたる、径約30cmの範囲がわずかに窪んでおり、この部分はガラス質の鉄が付着していた。また、その周辺は特に堅く焼け締まっていた。このような検出状況からみる限り鍛冶炉と考えられるが、現在その付近の土を分析中である。住居跡内のその他の柱穴は、住居跡9が埋まってからの柱穴で、周辺で確認している柱穴に伴うものと思われる。住居跡9が廃絶後、この平坦地に掘立柱建物が存在していたと考えられるが、その規模などについては不明である。

**住居跡11** 住居跡9に隣接する遺構で、後世の削平によってその大半はなく、今回検出したのはごく一部であった。床面は、平坦地より約20cm下がったところであるが、排水溝はめぐっておらず、ここで検出した柱穴も住居跡11が埋まってからのものである。このような状況からでは、住居跡と捉えることはできない。しかし、B拡張区では、階段状地形に存在する住居跡の周り、特に山手側を二段に掘り下げた住居跡例も確認できた。住居跡11から住居跡9にかけての崖が旧地形のなごりとすれば、段より谷側に住居跡があった可能性もあり、ここでは住居跡としておく。住居跡11は、住居跡9とわずかに切り合っていたが、その部分には畑の開墾時に溝が掘られたため、時期差については不明であった。

**住居跡24** 丘陵斜面から住居跡28と切り合った状態で検出した。住居跡24は、長辺約2.9m、短辺の確認長約2.2mであった。山手側を約40cm掘削して平坦地を造っており、一部で周壁溝を確認した。溝は、幅約20cmを測り、深さはわずかであった。住居跡に伴う柱穴の検出にはいたらなかった。また、焼土もなかった。



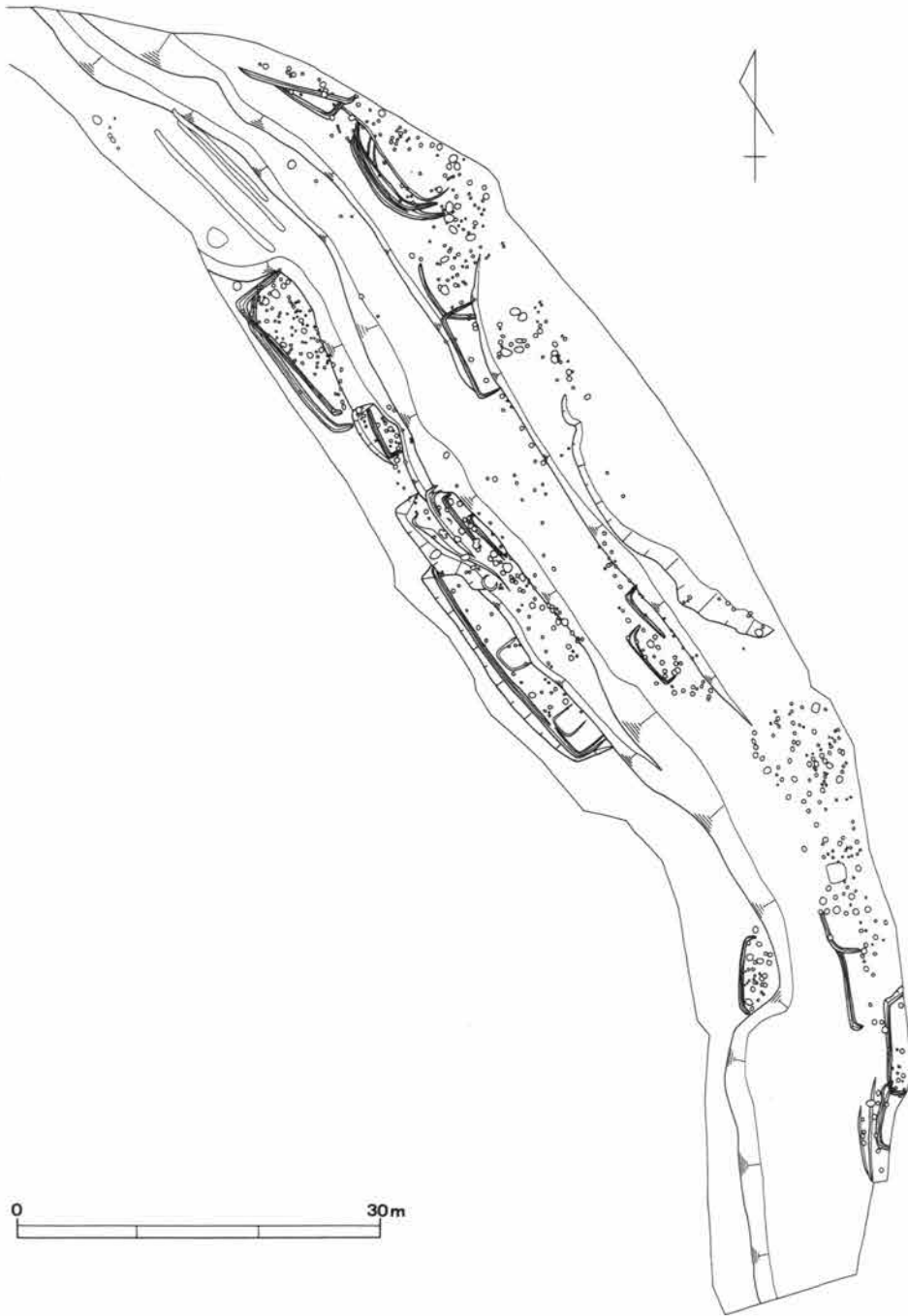
第14図 住居跡28・24実測図

**住居跡28** 住居跡28は、長辺約5.4m、短辺の確認長約1.7mであった。山手側を掘削して平坦地を造っており、幅約30cmの周壁溝がめぐっていた。溝の深さは、床面より約10cmを測る。住居跡の大半は、後世の削平を受けて流失しており、住居に伴う柱穴や焼土の検出にはいたらなかった。両遺構の切り合い関係からみて、住居跡24の後に住居跡28が構築されていた。

これら住居跡は、長辺が3m前後のものや5～6mのものがあり、丘陵斜面や裾部の平坦地に構築されていたものと、さまざまであった。しかし、その位置は、A拡張区の南側、谷の口部付近に集中しており、谷奥にはなかった。住居跡は、大半が流失しており、不明な点が多いものの、鍛冶炉と思われる遺構を検出した住居跡9に対して、丘陵斜面に構築されていた。住居跡群の性格は、検出状況ならびに立地状況などから、その性格は異なるものと思われる。今回報告した住居跡24・28と同様に、住居跡1・3・26・27についても、周壁溝は簡単なもので、長期にわたって利用していたと考えるにはむずかしいようなところに構築されていた。調査を行っている時も、雨天になると遺構が土砂で埋まってしまう状況であった。このようなことから、この丘陵斜面に構築された住居跡群は、木を伐採し薪を作ったり、炭窯を操業するにあたっての、作業小屋的な仮設の施設であったものと類推する。住居跡9については、現在整理中であり、来年度に報告する製鉄炉と関連する遺構と考えられるため、製鉄炉とあわせて報告する。

#### 4. B拡張区

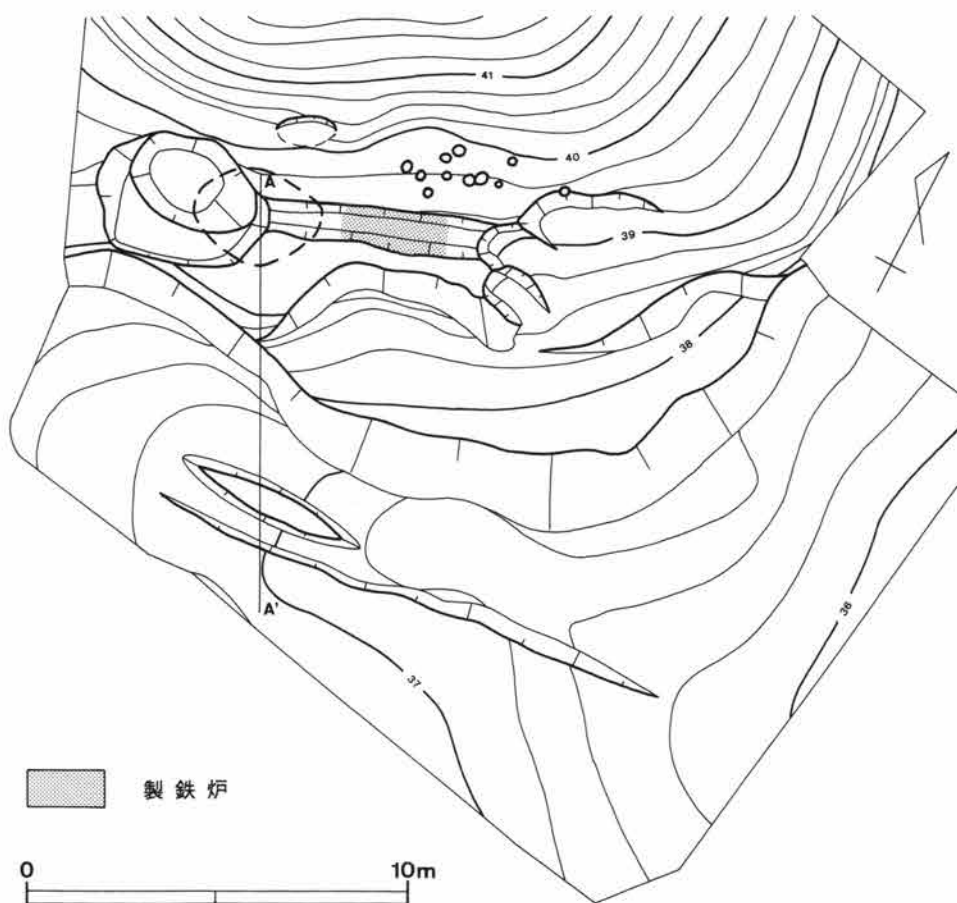
「丹後あじわいの郷」造成予定地の北東端の丘陵裾部の階段状地形、約2,600㎡が対象地である。拡張区前面の田畑部の中央には、鳥取川が流れており、周辺の田畑には土器片が散布していたことから、このか所の試掘調査に至ったものである。重機による試掘調査を実施したところ、階段状地形のいたるところで柱穴を確認し、土器片が出土したことから、B拡張区として全面調査に変更した。調査の結果、住居跡21基と多数の柱穴を確認することができた。住居跡は、A拡張区の住居跡と同様で、丘陵斜面を「L」字状に掘削して平坦にし、壁沿いに溝をめぐらせて構築されたものであった。拡張区山手側では、表土下はすぐに遺構面となったが、裾の方では包含層がかなり厚く、階段状地形は拡張区沿いの農道を越えた畑地にまで及んでいるものと思われた。農道より下は、調査地外となるため、その全容については不明である。農道沿いの住居跡からは、A拡張区で検出した鍛冶炉と同じ焼土痕を2か所で確認し、B拡張区においても鍛冶工程を行っていたものと思われた。この地区の詳細については、次年度に報告する。



第15図 B拡張区測量図

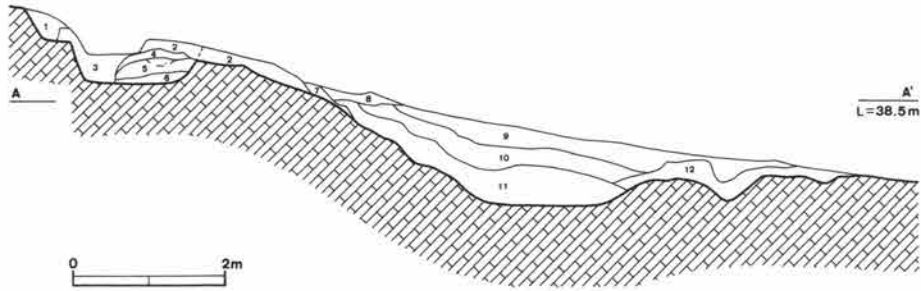
### 5. 1号製鉄炉

A 拡張区から南西約200mの丘陵裾部の舌状に張り出した平坦部に存在する。平坦地のほぼ中央におよそ東西方向の製鉄炉を築き、炉西側は約5m×3mの長楕円形の土坑(排滓坑)を掘り、炉東側は「U」字状に掘り込んで谷筋に流れ込むように溝(排滓溝)が築かれていた。炉の規模は、全長約2.5m・幅約1m・深さ約50cmを測る。炉構築時は、調査前の地形とは大きく異なり、炉が築かれている平坦地より急傾斜で落ち込んで、標高差約2mで谷底となる。このような地形を排滓場として利用したようで、製鉄炉から鉄滓を掻き出しており、谷底では約1mの鉄滓の堆積が見られた。これほど鉄滓が厚く堆積していた製鉄炉は、隣接する遠所遺跡群にもみられず、排滓場に設定した畦の断面を観察したところ、鉄滓の堆積層がかるうじて分層できたことから、数回にわたっての操業が考えられた。調査を続けるにしたがって、炉西側の排滓坑が一度掘り直されていることもわかり、少なくとも2回以上の操業が行われていたことがわかった。また、1号製鉄炉操業後に炉



第16図 1号製鉄炉地形測量図





第17図 排滓場堆積断面図

- |                   |                   |                    |
|-------------------|-------------------|--------------------|
| 1. 淡赤褐色土          | 2. 暗灰褐色土          | 3. 炭・焼土・鉄滓混じり暗灰褐色土 |
| 4. 黄褐色砂礫土         | 5. 赤褐色砂土          | 6. 鉄滓混じり暗灰褐色土      |
| 7. 黄褐色土           | 8. 灰褐色砂質土         | 9. 赤褐色砂礫土          |
| 10. 灰褐色砂礫混じり鉄滓堆積層 | 11. 赤褐色砂礫混じり鉄滓堆積層 |                    |
| 12. 暗灰褐色砂質土       |                   |                    |

から北西約2mの丘陵斜面に小型の炭窯が築かれた。この炭窯は、1号製鉄炉に炭を供給していた窯ではなく、それ以降のもので、炭窯付近から10世紀前半と思われる土器が出土した。また、ここからの混入と考えられる土器が、製鉄炉付近からもみつがっている。このことから、1号製鉄炉は、炭窯が操業されたと考えられる10世紀前半以前に、構築され操業されたものと思われる。土砂の堆積状況ならびに1号製鉄炉操業以前に谷筋に埋まった土器片をみる限り、8世紀にまでさかのぼる製鉄炉とは考えがたい。

1号製鉄炉については、現在整理中であり、来年度にも他の製鉄炉を調査する予定であり、これと合わせて来年度に詳細を報告する。

## 6. 2号製鉄炉

A拡張区から南方約100mの狭小な谷部の傾斜地に築かれていた。検出した時は、炉の両側から排滓した1号製鉄炉とは異なり、炉の一方にのみ排滓した痕跡が認められた。調査を進めるにしたがって、丘陵斜面をゆるやかにして炉を構築し、炉から排滓溝が等高線に直交するように、谷筋に向かって設けられていた。炉の規模は、一辺ないし径が70～80cm程度と、1号製鉄炉の平面形態とは大きく異なり、小規模であった。炉は、数回にわたって築き直されており、最初に築かれた炉の操業後、その炉床を次回の炉の基礎として再利用し、若干山手側にずらして2回目の炉を構築していた。2号製鉄炉では、このような工程を数回に及んで繰り返しており、炉の全容が判明した時点では、階段状の炉床を5面確認した。このように、検出状況から最低5回の操業が行われたことがわかり、5面の炉床をまとめて2号製鉄炉とした。このような平面形態の製鉄炉は、6世紀後半と8世紀

後半に操業していた遠所遺跡群にもみつかっていない。遠所遺跡群で確認されている製鉄炉は、今回の1号製鉄炉と同じ形態をしており、1号製鉄炉操業時期まで同じ形態の炉で操業されてきたと考え、2号製鉄炉のような形態は、1号製鉄炉のような形態の炉に続くものと考えられる。これについては、今後の科学的な分析結果を待って次年度に報告する。

## 7. まとめ

今年度は、A・B拡張区と1・2号製鉄炉の調査と試掘調査を行った。この内、今回は、A拡張区の調査概要とB拡張区・1・2号製鉄炉の概略を報告した。その結果、遠所遺跡群と同様に製鉄遺跡であることがわかった。遠所遺跡群で確認されている製鉄炉と同じ形態の1号製鉄炉と、現時点で1号製鉄炉に続くと考えられる2号製鉄炉の発見によって、6世紀後半と8世紀後半に製鉄を行った遠所遺跡群の衰退期及びそれ以降にニゴレ遺跡で製鉄を行ったと考えるにいたった。A・B拡張区からの住居内鍛冶炉の発見は、遠所遺跡群と同様に製鉄段階から鍛冶段階までの、一連の製鉄工程を行っていた可能性が高い。また、遠所遺跡群の調査時に5世紀末に操業していたと考えられる炭窯が発見されており、製鉄炉の発見にはいたっていないが、この炭を用いて製鉄をしていたと考えられ、日本最古級の製鉄遺跡とされてきた。このように考えると、両遺跡では5世紀末から9世紀まで連続と製鉄を行ってきた、丹後地域の古代における一大製鉄所であったと考えられる。今回の調査では、これに伴う作業場と思われる住居跡を確認することができた。また、試掘調査で新たな製鉄炉も発見しており、今後さらに製鉄遺跡の範囲が拡大すると思われる。

KIRI TANI  
(2) 桐谷古墳群

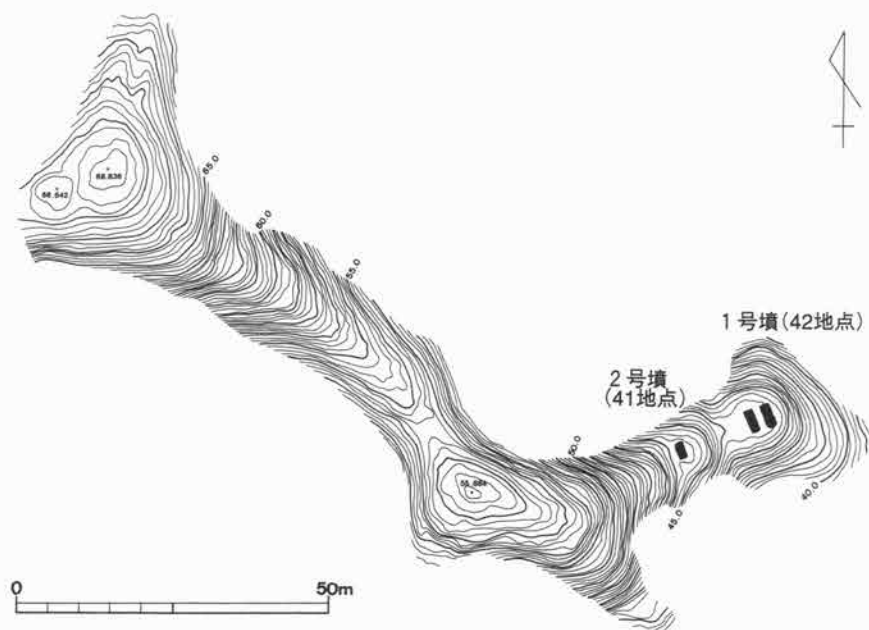
## 1. はじめに

この古墳群は、「丹後あじわいの郷」造成予定地北側に位置する鳥取古墳群の南側の丘陵尾根筋上に位置する古墳群である。昨年度、17地点の内、13地点の試掘調査を行った。その結果、2地点(41・42地点)についてのみ古墳であることがわかった。丘陵先端に位置する42地点を桐谷1号墳、隣接する41地点を桐谷2号墳とした。

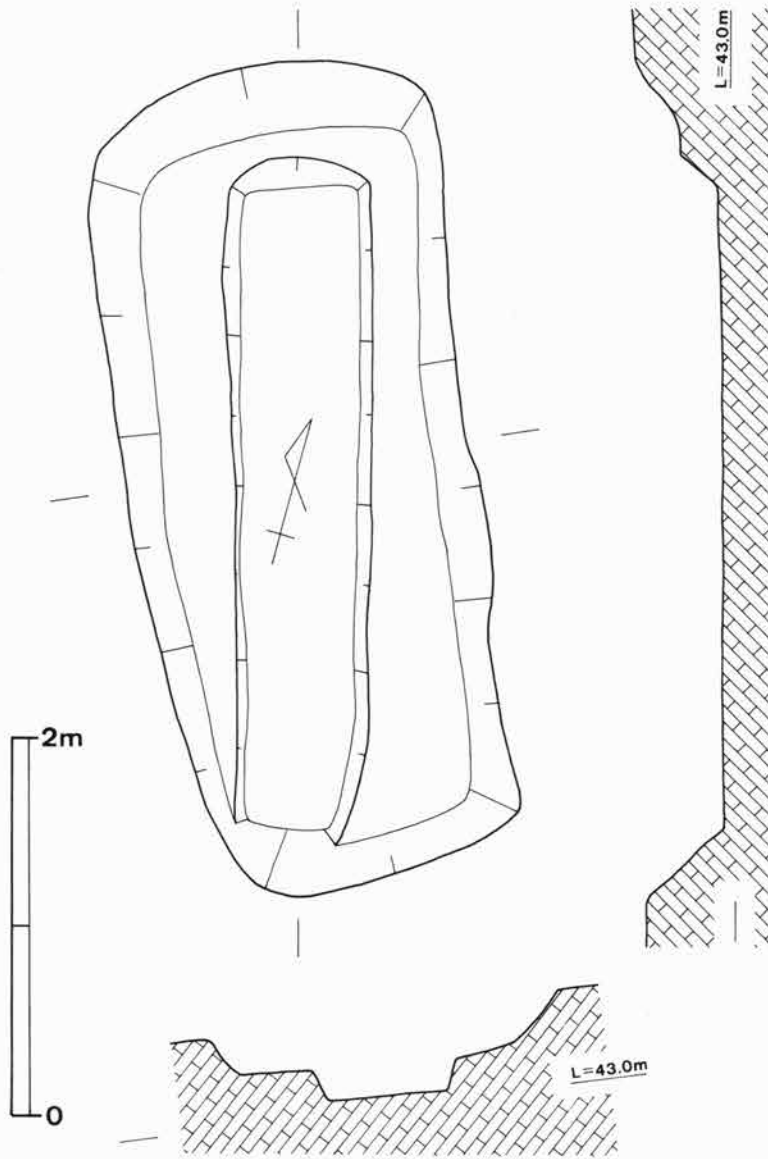
## 2. 桐谷1号墳

**墳丘** A拡張区南側の丘陵先端に位置する。『京都府遺跡地図』や平成4年度に実施した分布調査によると方墳とされていたが、調査を進めるにしたがって、径約15mの円墳で高さは約2mを測った。墳丘ほぼ中央から南北方向の主体部2基を検出した。

**第1主体部** 墳丘中央部から検出した。二段墓壙で、上段の規模は長辺約4.2m・短辺約1.8m、下段の規模は長辺約3.6m・短辺約0.7mを測り、木棺直葬であった。主体部内からの出土遺物はなく、時期については不明である。

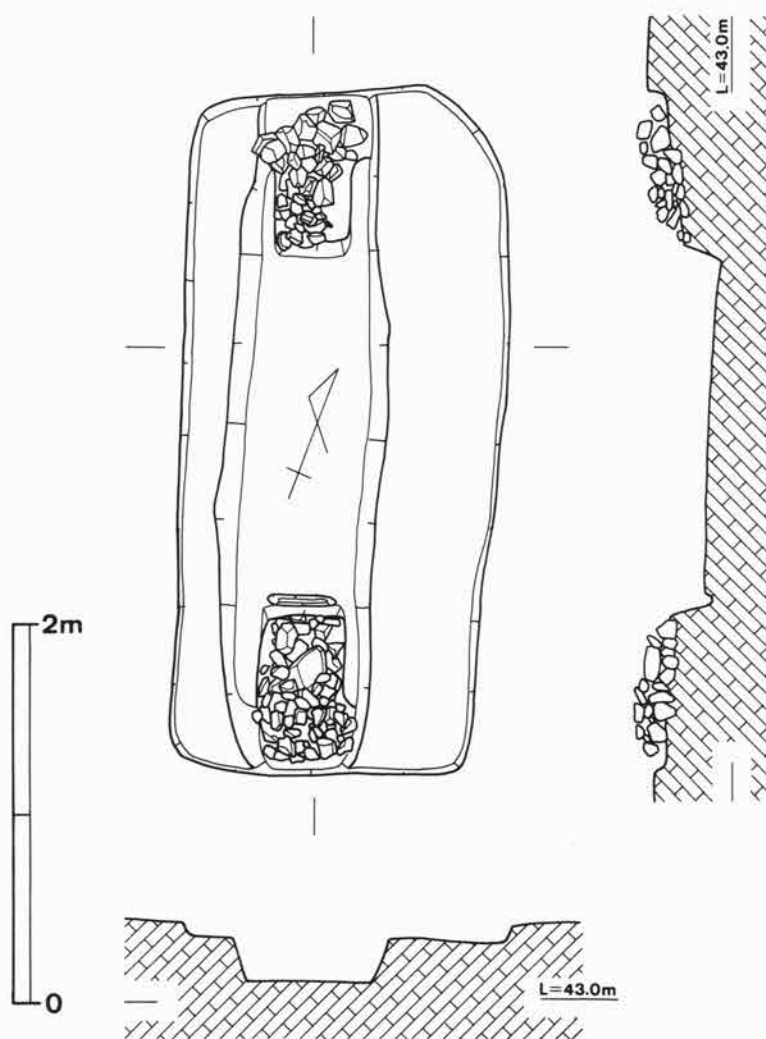


第18図 桐谷古墳群地形測量図



第19図 1号墳第1主体部実測図

**第2主体部** この主体部は、第1主体部の東隣りに平行して築かれていた。小口部で拳大の石を用いて棺板を支える組合式木棺を主体とするものであった。第2主体部の規模は、上段で長辺約3.5m・短辺約1.7mで、下段で長辺約3.4m・短辺約0.8mを測る。主体部からの出土遺物はなく、時期は不明であるが、層位から第1主体部の後に築かれたものであったことがわかる。

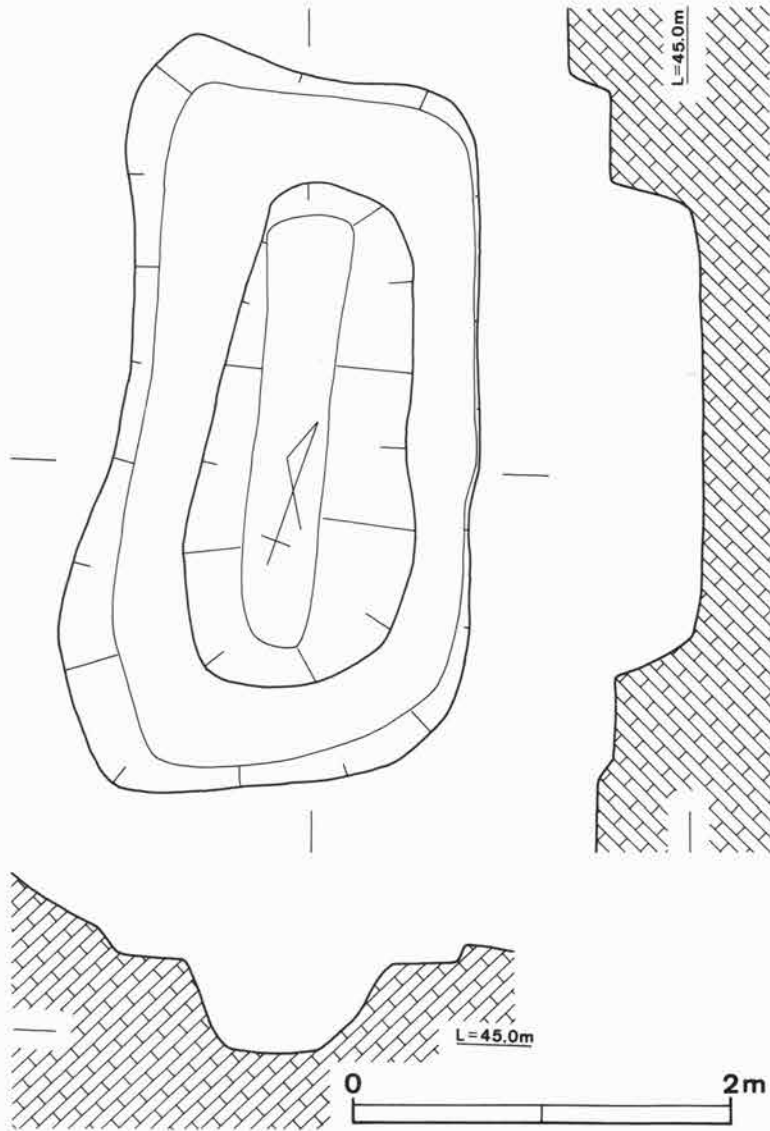


第20図 1号墳第2主体部実測図

### 3. 桐谷2号墳

**墳丘** 桐谷1号墳に隣接する古墳である。『京都府遺跡地図』には、方墳として記載されていたが、発掘調査を行ったところ、径約10m・高さ約2mを測る円墳であった。墳丘ほぼ中央部から、南北方向の主体部1基を検出した。

**主体部** 主体部は、基本的には二段掘りと思われたが、上段は非常に浅く、素掘りの墓壙に近い状態であった。掘形は不定形で、その規模は長辺約3.7m・短辺約1.9mを測る。表土下より奈良時代中頃の土器が出土したが、主体部からの出土遺物はなく、時期については不明である。奈良時代中頃の土器は、この時期に古墳周辺で何らかの活動があって、そのときに流れ込んだ遺物と考えられる。

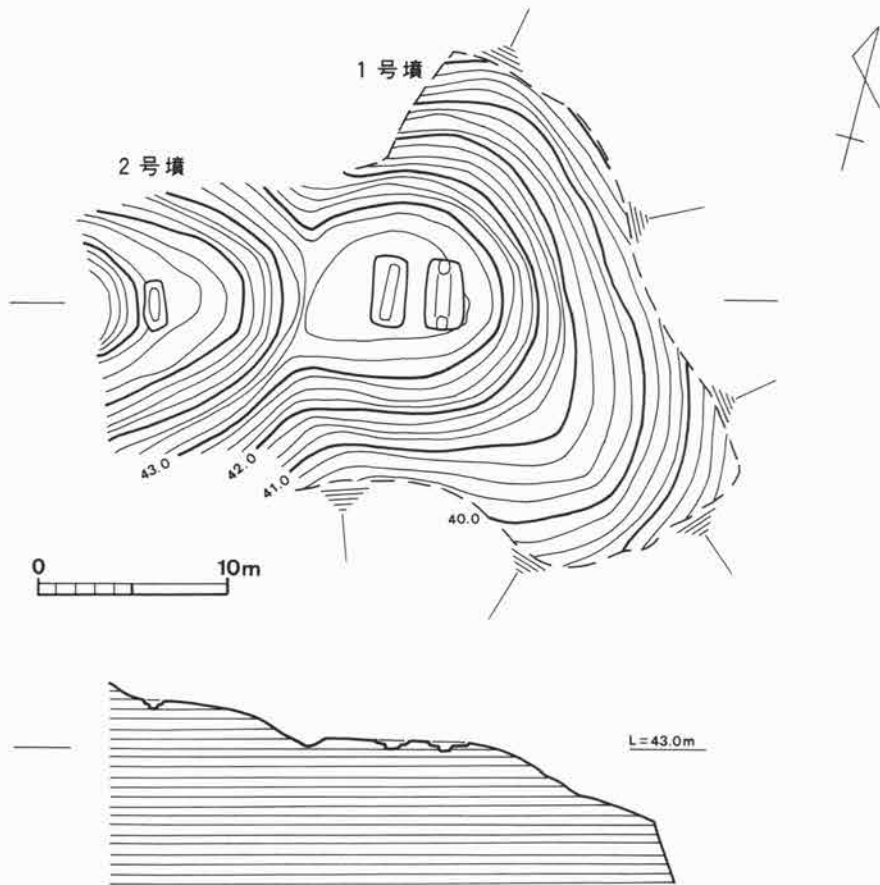


第21図 2号墳主体部実測図

#### 4. まとめ

「丹後あじわいの郷」造成予定地内には、鳥取古墳群・桐谷古墳群・行者山古墳群など多くの古墳が存在すると、分布調査によって考えられていた。桐谷1・2号墳については平成4年度に調査を行ったが、5年度には数地点の古墳と思われるか所の試掘調査も行ってきた。その結果、桐谷1・2号墳を含めて4基の古墳を確認するにいたったが、調査を行った古墳はこの内の2基である。ここからの出土遺物はなく、また、周辺にはまだまだ多くの古墳あるいは古墳状隆起が存在する。このような状況で古墳の時期や位置付けを行





第22図 桐谷1・2号墳測量図

うには困難なところがあり、今後の調査に委ねたい。

(岡崎研一)

注1 調査に参加していただいた方々は、以下のとおりである。

伊佐山勝則・石川 貴・市川清彦・岡崎貴文・塩見正太・城下祐二・新保和恵・周藤光代・土田昌人・西 智宏・橋本 尚・針宮大志・水野聡哉・茂木麻子・山本香織・吉岡孝泰・吉岡学・有田美恵子・伊熊佐知子・上田奈智子・大島紀子・金久真弓・川戸良一・田中文美・田中美恵子・田中ゆかり・正田季美枝・松村和美・丸谷はま子・溝井麗子・山本稔明・安達久子・安達睦枝・石井 清・石嶋文恵・石田寿子・今西茂満・岩佐正一・上田忠志・植野斉志・小國喜市郎・尾崎二三代・河戸久夫・熊谷千代子・城下則行・高原与作・谷口勝江・坪倉愛子・久江志津恵・菱川 實・平林秀夫・平林直美・藤原あみ子・藤原多津子・藤原敏子・藤原ヒサエ・藤原義夫・堀江登喜雄・松村 仁・村上五月・森 秀雄・森野美智代・山城金作・山副信之・山副武志・山副まつ江・由良里枝・由良美津子・吉岡正子・吉村 保・米田武志

- 注2 「丹後あじわいの郷」造成予定地内において、平成5年度に弥栄町教育委員会が実施した調査内容については、同教育委員会の横島勝則氏にご教示を賜った。
- 注3 増田孝彦・三好博喜他「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注4 藤原敏見・高野陽子「オテジ谷遺跡・オテジ谷古墳発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告書』第6集 弥栄町教育委員会) 1991
- 注5 西谷真治・置田雅昭「ニゴレ古墳」(『弥栄町文化財発掘調査報告書』第5集 弥栄町教育委員会) 1988
- 注6 増田孝彦「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和62・63、平成3年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第50冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注7 増田孝彦「丹後の古代鉄生産」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 増田孝彦「遠所遺跡群の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第39号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 岡崎研一「遠所遺跡群」(『京都府埋蔵文化財情報』第44号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 土橋 誠「遠所遺跡出土木簡」(『京都府埋蔵文化財情報』第47号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注5に同じ。

2. 奈具岡遺跡第5次調査地点試掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、府道網野岩滝線の建設工事にさきがけて、京都府土木建築部の依頼をうけて実施したものである。周知の遺跡である奈具岡遺跡範囲内に道路が建設されることになったことから、路線内の遺構・遺物の分布状況を把握し、今後の調査に備える目的で実施した試掘調査である。

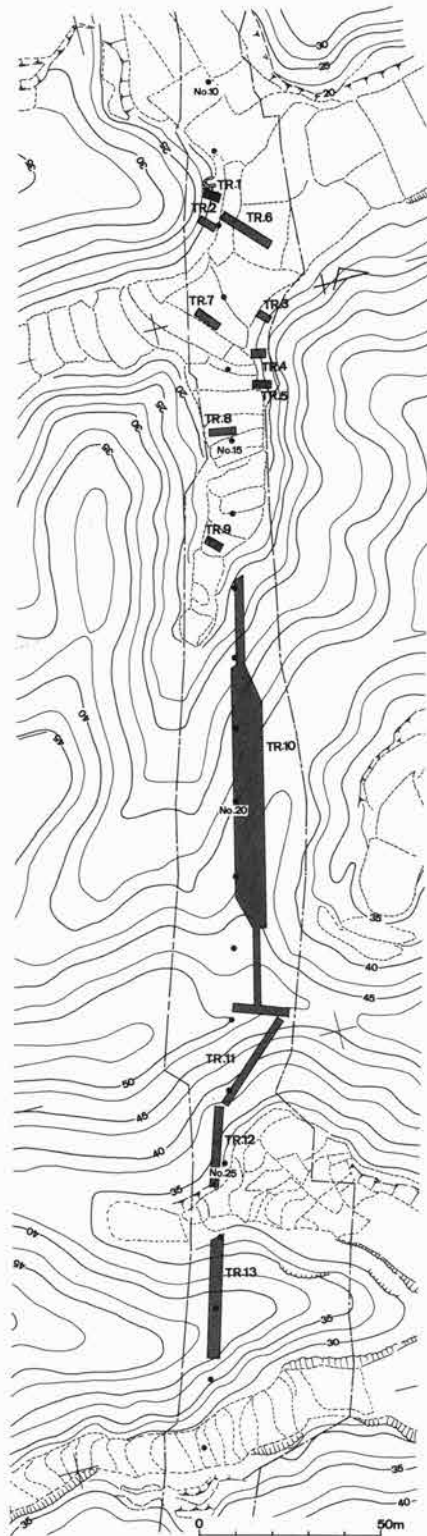
調査は、平成5年12月1日から平成6年1月21日にかけて実施した。

なお、調査に係る経費は、京都府土木建築部が負担した。



第23図 調査地と周辺の遺跡

- |           |                 |           |              |
|-----------|-----------------|-----------|--------------|
| 1. 奈具岡遺跡  | 2. 奈具岡遺跡第4次調査地点 | 3. 奈具谷遺跡  | 4. 奈具遺跡      |
| 5. 奈具古墳群  | 6. 奈具岡北古墳群      | 7. 奈具岡古墳群 | 8. 奈具谷古墳群    |
| 9. 奈具岡西古墳 | 10. 新宮古墳群       | 11. 福西古墳群 | 12. 奈具神社裏古墳群 |
| 13. 小墓古墳群 | 14. 奈具岡南古墳群     |           |              |



第6～9トレンチ；  
流路跡  
木器多数出土  
調査を要する

第1～5・10～13；遺構・遺物なし

第24図 試掘トレンチ配置図

## 2. 調査地の位置

奈良岡遺跡は、弥栄町溝谷に所在する。奈良岡遺跡は、竹野川右岸の丘陵に立地する弥生時代前期以降、奈良・平安時代にかけて断続的に営まれた集落遺跡である。その範囲内には、弥生時代の墳墓(奈良岡遺跡第3次調査地点)や古墳も数多く分布する。遺跡の周辺には、弥生時代の集落遺跡として名高い奈良岡遺跡や奈良谷遺跡などの集落遺跡をはじめ、古墳群など数多くの遺跡が分布している。

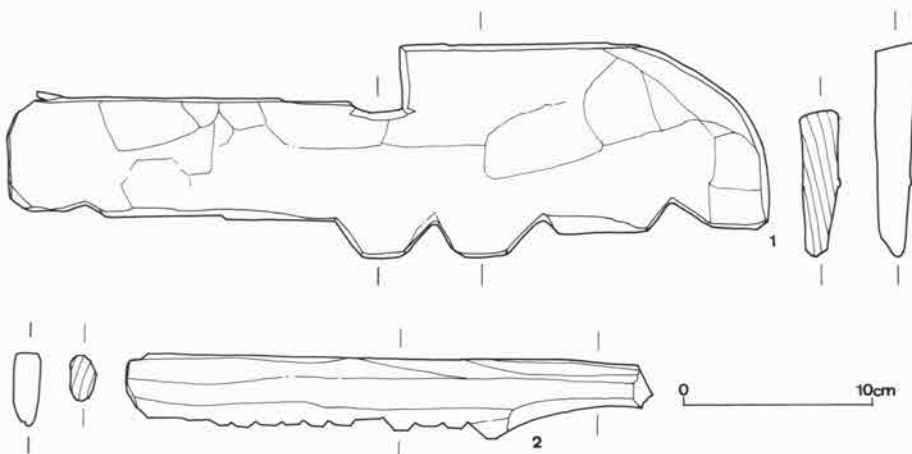
今回の調査地点は、第2・3次調査地点の東側にある沖積地と丘陵である。

## 3. 調査の経過と概要

調査にあたっては、まず立木伐採を行った。その後、路線内の各所にトレンチを設け、土層の堆積状況、遺物の包含状況などを観察し、遺構の有無を確認した。

路線は、沖積地と丘陵部を横断している。路線中心杭No.10からNo.17付近が沖積部であり、現状が水田である。No.17以降は丘陵部である。沖積部では流路や水田跡関連の遺構・遺物の存在が推定されたため、トレンチを9本設定した(TR.1～9)。丘陵斜面には古墳・集落関連遺構を確認する目的で4本のトレンチ(TR.10～13)を設定して調査を行った。

調査の結果、TR.6～9において流路跡の一角とみられる落ち込みを検出した。遺構の性格・規模は明らかでないが、溝底は地表面から約2.5mと深く、規模の大きな流路が予想される。この溝には杭や建築部材と思われる板材が多量に含まれており、TR.6では溝の斜面に杭が打たれていた。この溝は、灌漑水路などとして積極的に利用されたようである。溝からは古墳時代後期の須恵器、土師器などが出土している。流路の継続年代の一



第25図 試掘トレンチ出土遺物(第9トレンチ)

点を示すものと考えられる。

TR. 1～5・10～13では表土直下で地山が現れ、遺物の包含・遺構は認められなかった。

#### 4. 出土遺物

TR. 6～9からは、建築部材とみられる板材、杭などが数多く出土しており、図示したような成品も出土している。1は、えぶりである。2は、鋸のような刻みを一辺に施す不明木製品である。これらの帰属時期は明らかでないが、古墳時代後期の須恵器と土師器が少量共伴しており、古墳時代のものである可能性が高い。

#### 3. おわりに

試掘調査の結果、TR. 6～9において木製品を多量に含む古墳時代の流路を検出した。奈具岡遺跡では、この時期の遺構は断片的に確認されているのみであり、古墳時代の木製品は初出資料である。今回の調査は、奈具岡遺跡の全体像を把握するうえで重要な情報を提供するものである。今後、流路を含めた周辺を面的に調査する必要がある。

(田代 弘)



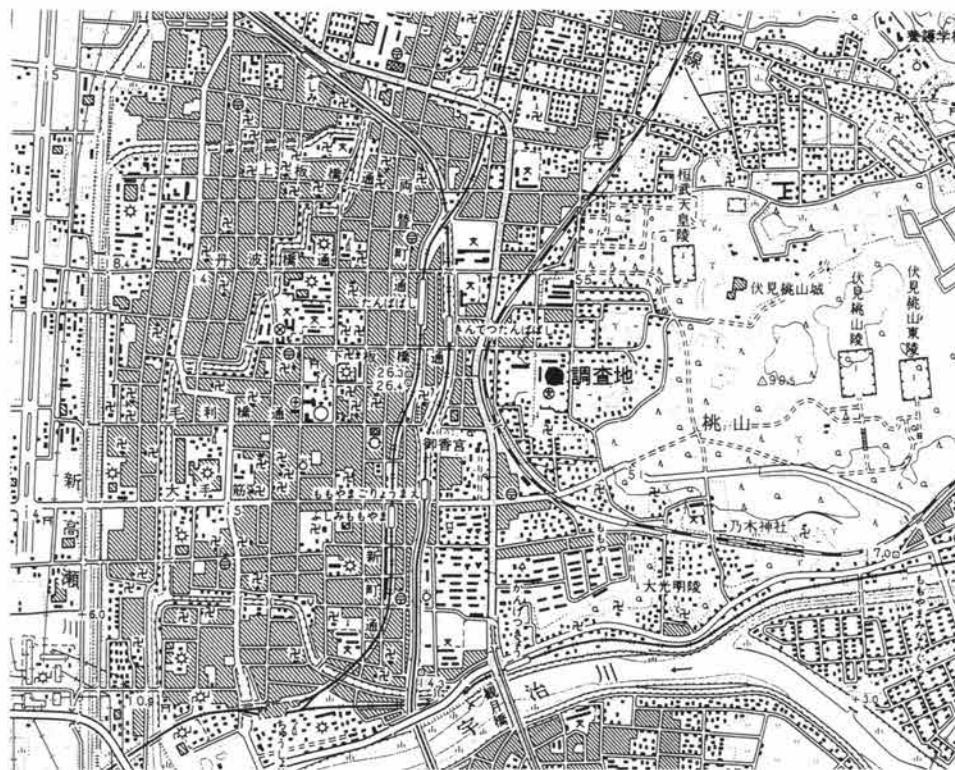
FU SHI MI

## 3. 伏見城跡平成5年度発掘調査概要

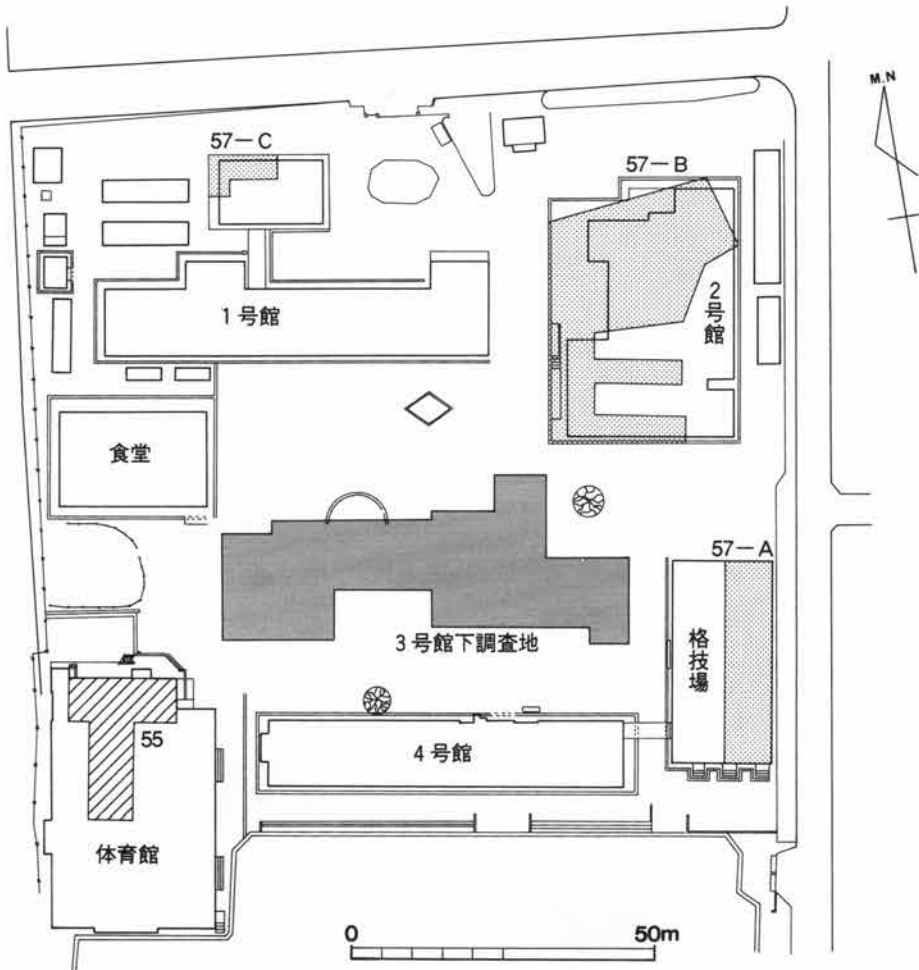
## 1. はじめに

今回の伏見城跡の発掘調査は、京都府立桃山高校の校舎改築に伴って、京都府教育委員会管理課の依頼を受けて実施した。桃山高校は、京都市伏見区桃山毛利長門東町8に所在し、古地図によると毛利安芸守屋敷地に位置しており、しかも現住所が桃山毛利長門東町とあることから、伏見城の頃は毛利氏の大名屋敷であったことが想定される。しかし、これらの伝承地名や古地図が、伏見城の時代のことをそのまま伝えている確証はなく、絶対視されるものではない。とは言っても、桃山高校敷地の一帯は過去の発掘調査や文献史料などから、少なくとも、大名屋敷が建ち並ぶ街区の一面を占めていたことは間違いない。

桃山高校敷地内の発掘調査は今回で三回目に当たり(第27図)、体育館下では瓦溜まり<sup>(注1)</sup>、2号館下では井戸跡、格技場下では南北方向の道路側溝<sup>(注2)</sup>などを確認している。しかし、こ



第26図 調査地位置図(1/25,000)



第27図 桃山高校内発掘調査地(数字は昭和調査年度、トレンチ名)

これらの調査地は、大名屋敷地の縁辺部に位置しているらしく、建物跡などの顕著な遺構は確認されていない。今回の調査地は、3号館の改築に伴うもので、桃山高校敷地(グラウンドを除く)のほぼ中央にあたり、高校敷地が古地図に示された屋敷地を踏襲しているとすると、中心施設の検出が期待された。

調査は、調査第2課課長補佐兼調査第4係長平良泰久と調査員岩松 保が担当し、現地調査は平成5年10月4日から平成6年2月3日までを要した。<sup>(注4)</sup> 調査面積は、校舎改築予定地のほぼ全域に当たる約1,220㎡である。調査に係る経費は、京都府教育委員会が負担した。

「2. 伏見城略史」は、保坂 亨が執筆し、その他は岩松が分担した。

## 2. 伏見城略史

戦国の世に終止符を打った豊臣秀吉が、その生涯の最期に築き上げたのが伏見城である。

伏見城は1592年(文禄元年)の普請開始から1625年(寛永2年)の破却終了までの、わずか三十数年あまりの短命の城であったが、その歴史上の存在意義は大きい。

1591年(天正19年)に関白職を甥の豊臣秀次に譲った秀吉は、翌1592年に伏見指月丘(現在の桃山町泰長老一帯)に自らの隠居屋敷の普請を計画する。8月に始まった工事はおよそ1年をかけて完成し、1593年(文禄2年)閏9月に秀吉は完成間もない隠居屋敷に入った。屋敷の四方に石垣を築くなど、この隠居屋敷は外観は城構えの様相を呈していたようだが、城下の整備事業などは行われていない。この時点では、あくまで秀吉の隠居城として建設されたのが、指月の隠居屋敷であった。

ところが、この完成間もない隠居屋敷を本格的城郭に造り直す計画が持ち上がる。1594年(文禄3年)1月に普請奉行の任命、諸大名への普請割りが行われ、3月に普請が開始される。工事は急ピッチで進められ、秋頃には秀吉は新装なった城への移徙を行った。城郭の普請はその後も継続して行われ、1595年(文禄4年)には秀吉を自害させて主のなくなった聚楽第の建物を移築するなど、指月丘の伏見城は大坂城にも劣らぬ大城郭となった。

城下の整備も、1594年から始まった。城下にかかる範囲にある村落や社寺を強制的に移転させ、市街の整備を行った。また各地へ向かう街道の整備、榎島堤・小倉堤・淀堤などの築堤事業、伏見湊の建設などの諸事業が実施され、伏見城下町は水陸交通の要衝として位置付けられるようになった。全国の諸大名は城下に屋敷を構え、また城下への町人の移住が奨励されて城下町の育成が行われるなど、天下人の居城にふさわしい城下町が形成された。「城下町・伏見」は、こうしてわずか4年あまりで大坂、京都と並ぶ一大政治都市としての地位を確立する。

ところが、1596年(慶長元年)7月の、近畿一円を襲った慶長大地震により指月の伏見城はほぼ全壊し、城下の市街も大きな打撃を受ける。しかし、秀吉は地震の翌日に早くも木幡山(伏見山)に普請縄張りを命じ、伏見城の再建にかかる。同年10月には本丸普請が完成、その他の諸施設もつぎつぎと普請が行われ、木幡山の伏見城は地震倒壊前以上に壮麗な城郭となった。秀吉は1598年(慶長3年)、この伏見城で生涯を閉じる。

秀吉没後、1599年(慶長4年)には、伏見城は徳川氏の管理するところとなり、翌1600年(慶長5年)の関ヶ原の役の際には石田三成率いる西軍に攻められて落城、炎上する。西軍を破った徳川家康は、畿内における政治的拠点として、また大坂城の豊臣氏に対抗するための拠点として伏見城を再建する。1603年(慶長8年)、家康は伏見城で將軍宣下を受け幕府を開くが、秀忠、家光の3代將軍までが伏見城で將軍宣下を受けており、初期徳川幕府にとって伏見城は重要な存在であった。しかし、徳川幕府の本拠はあくまで関東であり、関ヶ原の役の後、伏見城の城下の大名屋敷は一部の西国大名などを除いて次第に屋敷を引

き上げていった。

1614年(慶長19年)の大坂冬の陣、次いで1615年(元和元年)の大坂夏の陣により豊臣氏が滅亡、また徳川氏の京都の屋敷として二条城が使われるようになるなど、伏見城はその存在意義を失っていく。1619年(元和5年)には伏見城の廃城が決定し、翌年から各施設の破却、各地への移築が進められる。1623年(元和9年)の家光の將軍宣下を最後に伏見城はその役割を終え、1625年に破却終了、伏見城は伏見の地から姿を消した。大名屋敷は、一部の西国大名が参勤交代の際に立ち寄るために残したものを除いてほぼなくなり、また町人も大坂への移転を奨励され、伏見城下町は「城下町」としての姿を失った。しかし、秀吉時代の水陸交通の整備をはじめ、1608年(慶長13年)の高瀬川開通によって京都への玄関口としての役割を果たしたこともあり、伏見は城下町時代の都市的機能を発展的に継承する形で、幕府の直轄都市として反映を続けた。

従来の伏見城及び伏見城下町については、加藤<sup>(注5)</sup>次郎、中島<sup>(注6)</sup> 至、野田<sup>(注7)</sup>只夫、桜井<sup>(注8)</sup>成広、足利<sup>(注9)</sup>健亮などの研究がある。これまでの研究では、伏見城築城の理由を、朝鮮出兵の明との講和のための舞台として築かれたとするのが通説化している。しかし、その面が強調されすぎて、「太閤」秀吉の政治的拠点としての側面が弱く感じられるきらいがある。また、明との講和を行うのは、大坂城ではいけなかったのかという疑問も残されるのではないか。対外的な側面や国内の諸大名の勢力削減政策としての側面だけではなく、大坂城や聚楽第の存在に対してなぜ伏見城が必要であったのかを考える必要があるのではないか。

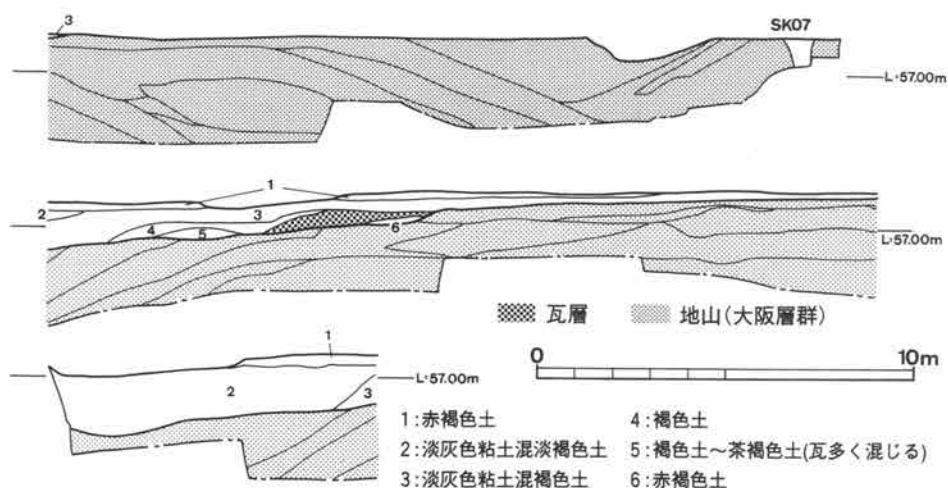
(保坂 亨)

### 3. 調査の概要

今回の調査地約1,220㎡のうち、1/2弱の540㎡が3号館の基礎坑のために攪乱を受けており、遺構面は削平されていた。そのため、約680㎡にわたってのみ遺構を検出し、うち西側約385㎡では下層の遺構面を確認した(第29図)。

基本的な層序は、表土(校舍解体に伴う廃棄物を含む)30~40cm—赤褐色粘質土20~30cmで上層遺構面に達する。この遺構面は、東端と西端で20~30cmの高低差は認められるものの、基本的にはフラットな面であった。下層遺構面は、調査地の西半分において認められた。この下層遺構面と上層遺構面との間は、瓦を多量に廃棄した瓦層を含む盛り土層で、調査地中央部分から西に向かって徐々に厚くなり、トレンチ西辺部では約2mにわたって整地している(第28図)。

以下、各遺構面毎に検出した遺構を概述する。



第28図 調査地中央部東西土層図(S B01、S A04などの柱穴は省略)

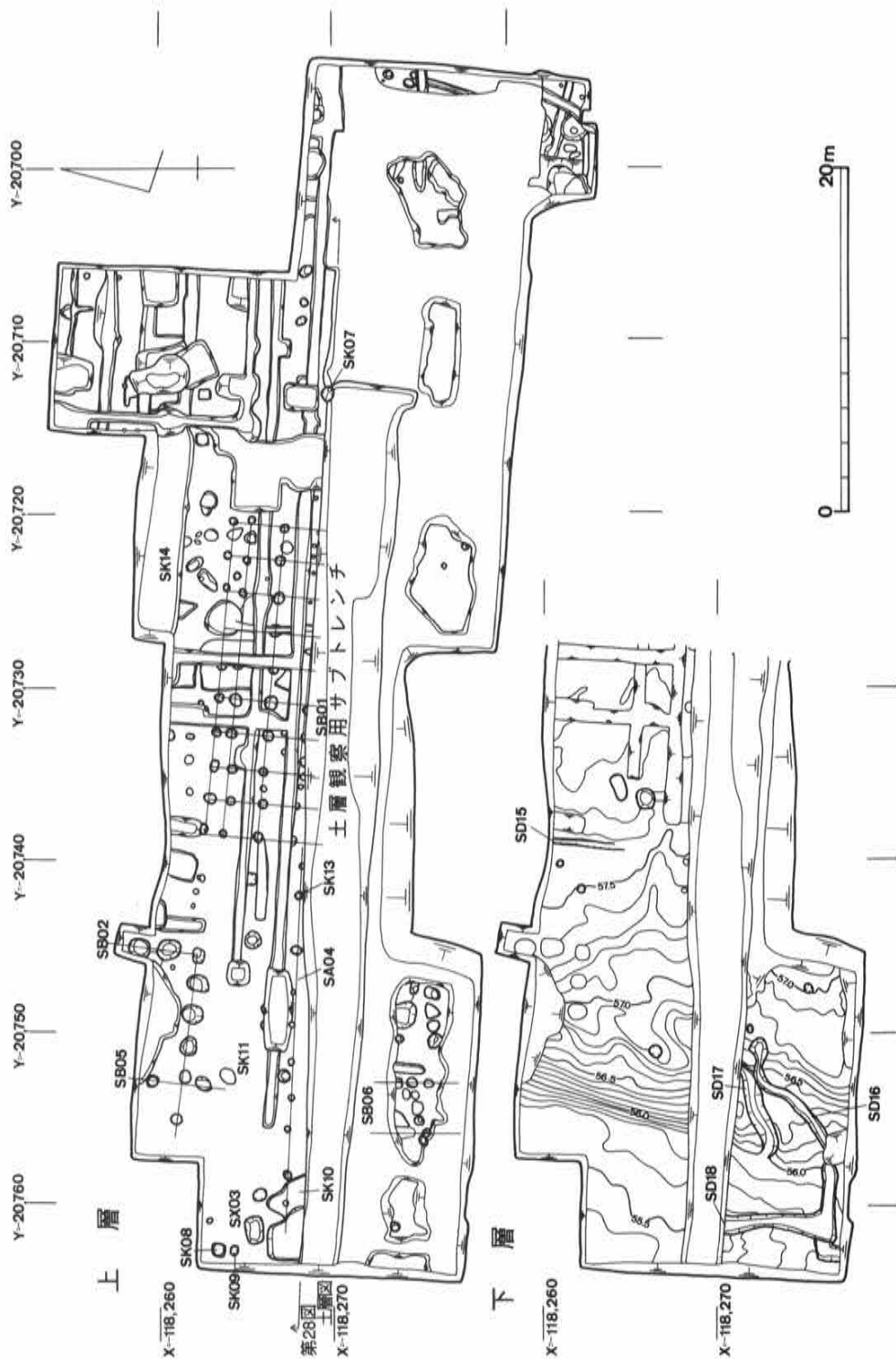
## (1) 上層遺構面の調査

上層遺構面では桃山時代から近・現代にかけての柱跡や溝、土坑を検出している。近・現代のものは旧制桃山中～桃山高校の旧校舎の基礎、配管などで、調査地全域で検出したが、特に中央から東側～北東部に集中して確認し、ここでみつかったものはすべて近・現代のものといっても過言ではない。

伏見城関連の遺構では、建物跡4棟、柵列跡1列、土塋1基、その他柱穴跡、溝跡、土坑などがある。ここでは、伏見城関連の遺構のうち、主要な遺構に関してのみ報告する。

S B01(第30・31図、図版第14、16-1・2) 調査地中央で検出した東西9間・南北2間以上の建物跡で、南側は3号館の基礎坑による攪乱のため確認できなかった。柱間寸法は2mである。この建物跡の柱跡は直径60～80cm、検出した深さ20cm程度で、断面形が半円状を呈している。埋土は粘土と砂質土を2～3重に「巻いて」おり、固くたたき締めてある。後述の西側で検出したS B02の柱穴が検出高80cm程度と深いため、この遺構面自体が削平を受けていたとしても数十cm程度と大幅な削平は受けていないものと推定される。そのため、S B01の柱穴は当初のものに復原したとしても、深さ50cm以上は考えにくく、掘立柱建物跡の柱穴とは復原しにくい。そのため、この柱穴内を埋めている固く叩き締められた粘土と砂質土を礎石の下の下部施設と推定し、S B01を礎石建物跡と考えたい。座標北より約5°5′東に振れている。

S B02(第32図、図版第15・17) 調査地西側で検出した礎石建物跡で、南北2間分・東西5間を確認し、調査地北側にのびていく。東西辺については5間分を検出したが、ここで終わるのかどうかは確認できなかった。柱間寸法は1.8mである。検出した8基の柱



第29図 検出遺構平面図

穴の内、5基から礎石を検出したが、他の柱穴に礎石が据えられていたかどうかは、確認できなかった。しかし、下層遺構面への重機掘削に際して、同付近において礎石らしい石が見つかったので、検出面からの掘削が足りなかつただけで、本来は礎石があったものと復原できる。柱穴は径1m前後で、検出高は80cm程度を測る。坑内には上面を平らにして一辺60~80cmの石を据えている。この礎石の下は数cmで坑底になり、礎石下は、特別に版築などを行っていない。柱穴断面には柱の抜き取り痕は確認できなかった。礎石は砂岩系統で、桃山丘陵で産出するものである。座標北より約 $6^{\circ}40'$ 東に振れている。

S X 03(第33図、図版第18) 調査地西端で検出し、1.0m×1.3m、検出高40cmの土壇である。平面形はやや隅丸を呈している。内部の底面近くでは土師器皿2枚、塩壺、同蓋、鉄釘、炭化物などが出土した。埋土中の上層部分でも土師器皿や瓦の破片が出土している。大名屋敷内に墓を造るかどうかは検討しなければならないが、規模・内容的には墓と推測される。

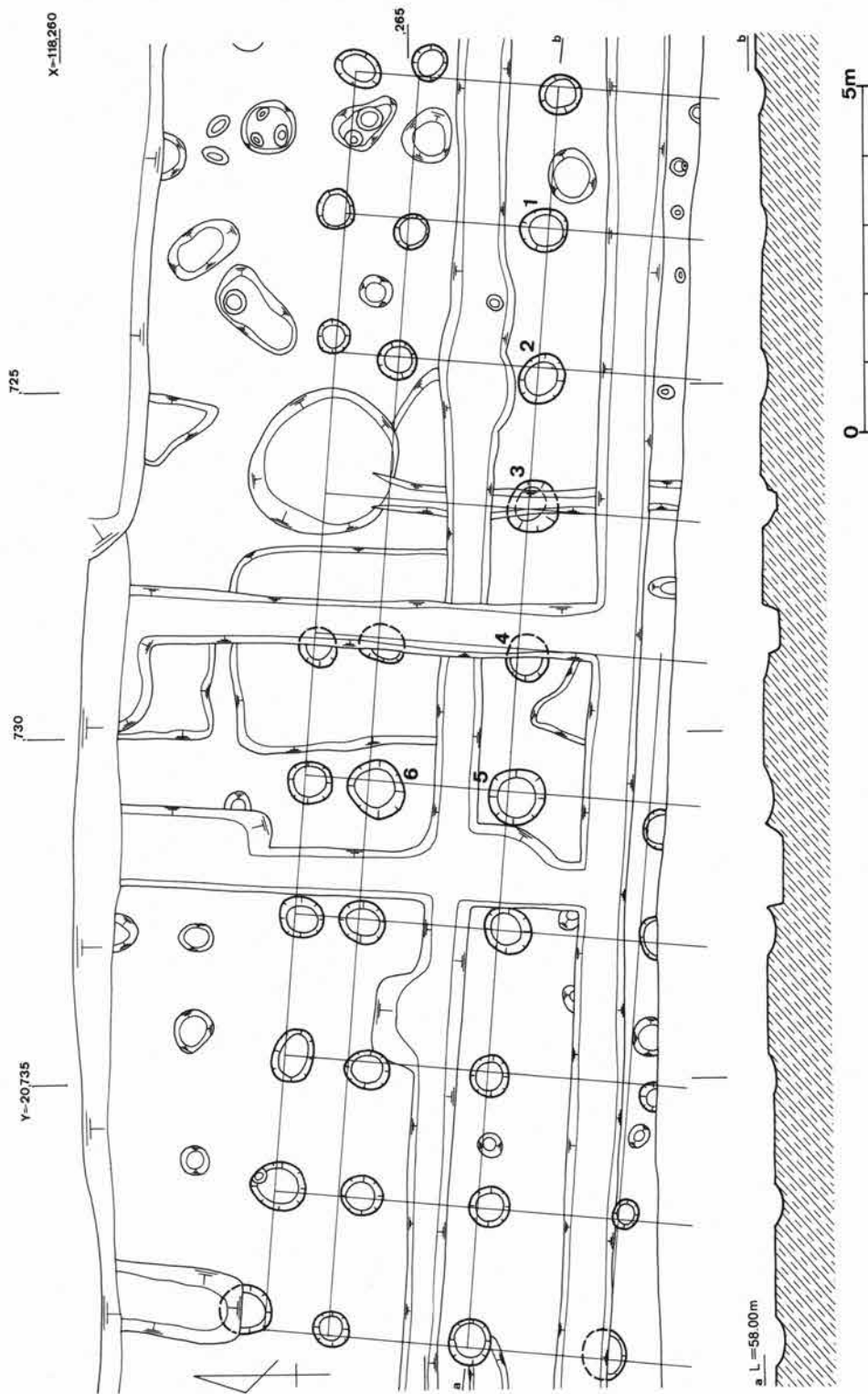
S A 04 穴に直接柱を立てる掘立柱で、東西方向に一列に検出できた。柱間寸法は2.1m(一部2.7m)で、検出高は30~50cmである。位置的にはS B 01に連なるものと考えられるが、南側を3号館の基礎攪乱によって削平されており、回廊状のものであったのかどうかは判断できない。一応、柵列と考える。座標北を基準に東で $3^{\circ}30'$ 南に振れている。この柵列を構成するS K 13からは、第34図24の土師器皿が出土している。

S B 05(第32図、図版第15、16-3・4) S B 02と位置的には重なる場所で検出した柱跡残欠の並びである。柱跡の残欠は2基検出しており、南北に並び、柱間寸法は3mである。柱跡の検出状況は、平面形がほぼ円形で、径0.8~1mの範囲に数~10cm程度の石礫が「密集」しているものであった。断面を残して掘り下げると、石礫が詰められており、検出面から5~10cmで坑底に達した。この現地での発掘調査の観察では、礎石を据えた柱坑の「根石」の残欠と判断されるものであった。もし、この判断が正しいとすると、その坑の規模から、大形の建物跡と推定され、S B 02とほぼ同じ方位を有するものと思われる。

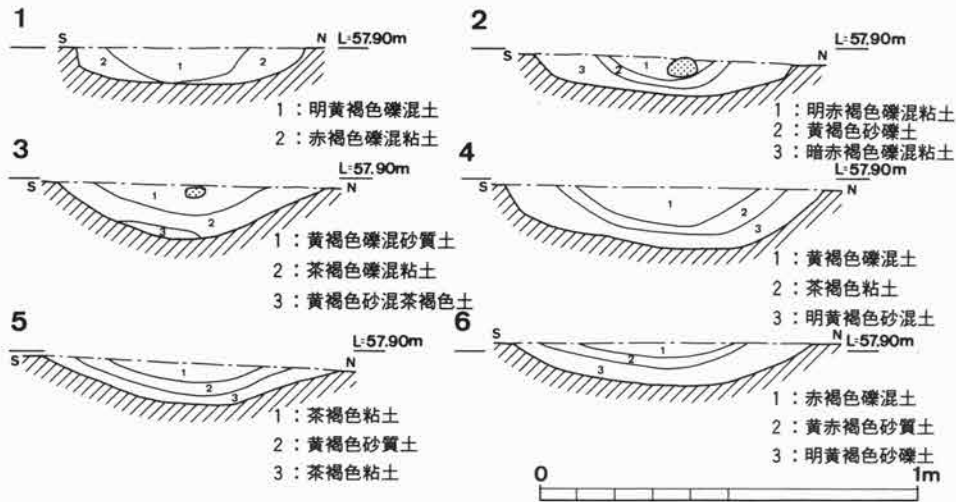
S B 06 調査地西南部で検出した4基の柱穴で、東側に南北方向の3基の柱列と西側に1基の柱跡を検出した。西側の北半部は攪乱を受けており、1基の柱穴を検出したのみである。これらの柱跡は、S B 01の柱跡と同じ構造をしており、平面は径約50cmの円形で、断面は検出高5~15cmで半円をなしており、そこに2~3重に粘土と砂質土が固く叩き締められている。このことから、S B 01と同じく、礎石建物跡と推定されるが、周囲が攪乱を受けており、その規模などは不明である。南北の柱間寸法が0.9m、東西の柱間寸法が3mである。

S K 07 調査地東側で検出した柱跡で、旧校舎の攪乱坑に引っかかっていた(第29図)。





第30図 S B01実測図(柱穴番号は第31図の柱穴土層番号に対応)



第31図 S B01柱穴土層断面図(番号は第30図に対応)

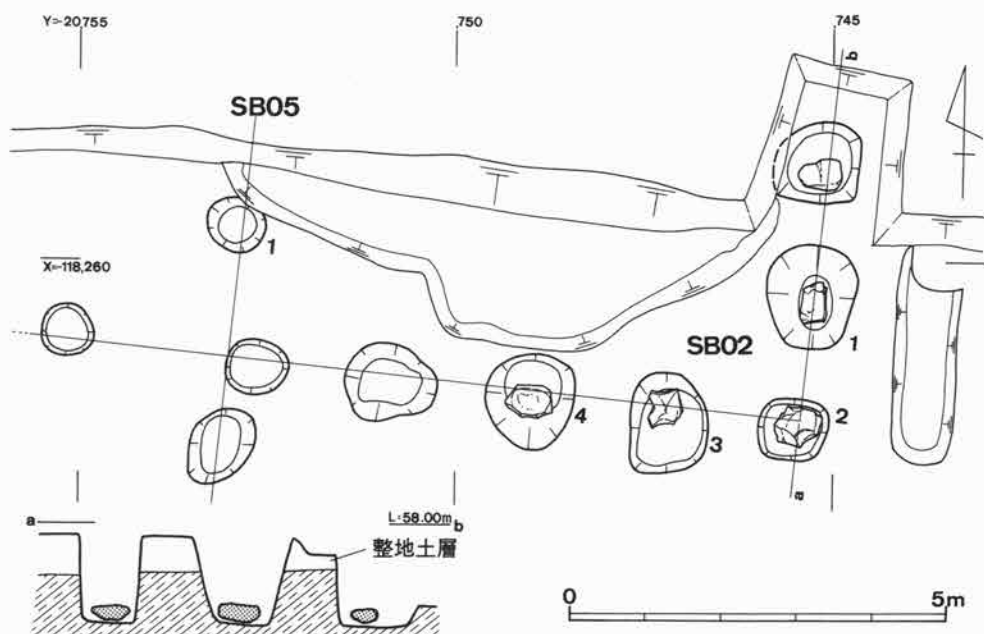
径80cm・検出高75cmで、埋土中に瓦が埋まっていた。根石などはなかった。検出高が比較的深いため、上層遺構面がそれほど後世の削平を受けていないという根拠の一つになる。周囲の精査を繰り返したが、この柱跡に対応する遺構は確認できなかった。詳細は分からないが、この南側に何らかの構築物があったことが推測される。第34図27の軒平瓦が出土している。

調査地の東側では、3号館の基礎坑の間に、鳥状に残った伏見城期の遺構面が確認でき、ここでは、溝や土坑を検出した(図版第19)。校舎の配管を埋めた溝など、明らかに現代のものもあるが、ほとんどが伏見城期と判断される瓦片を含むものであった。その他、伏見城に関連する時期の柱穴や土坑を検出しており、一部、出土遺物を報告しているが、その性格がよくわからないので、説明は省略したい。

## (2) 下層遺構面の調査

3号館基礎部分は、遺構面を打ち破って攪乱していたので、この部分を利用して東西の土層観察用のサブ・トレンチを設定した。その観察により、調査地中央部から西側一帯に旧地表面を整地した盛り土層が認められ、西に行くにつれて徐々に厚くなり、西端部では下層遺構面(=旧地表面)が上層遺構面の下約2mにあることが判明した(図版第20-2)。また、旧地表面と盛り土層の間には、瓦ばかりが廃棄された「瓦層」が確認されたため(図版第20-1)、下層遺構面にも多くの遺構—特に廃棄されている瓦を葺いた建物跡があるものと想定された。さらに、瓦層の下には茶褐色土～赤褐色土があり、この土層中にも瓦片が多く混じっていた。この下が地山になっている。

重機によって整地層を除去し調査を行ったところ、特にサブ・トレンチより南側でこの



第32図 SB02・05実測図(柱穴番号は図版第16-3・4、17に一致)

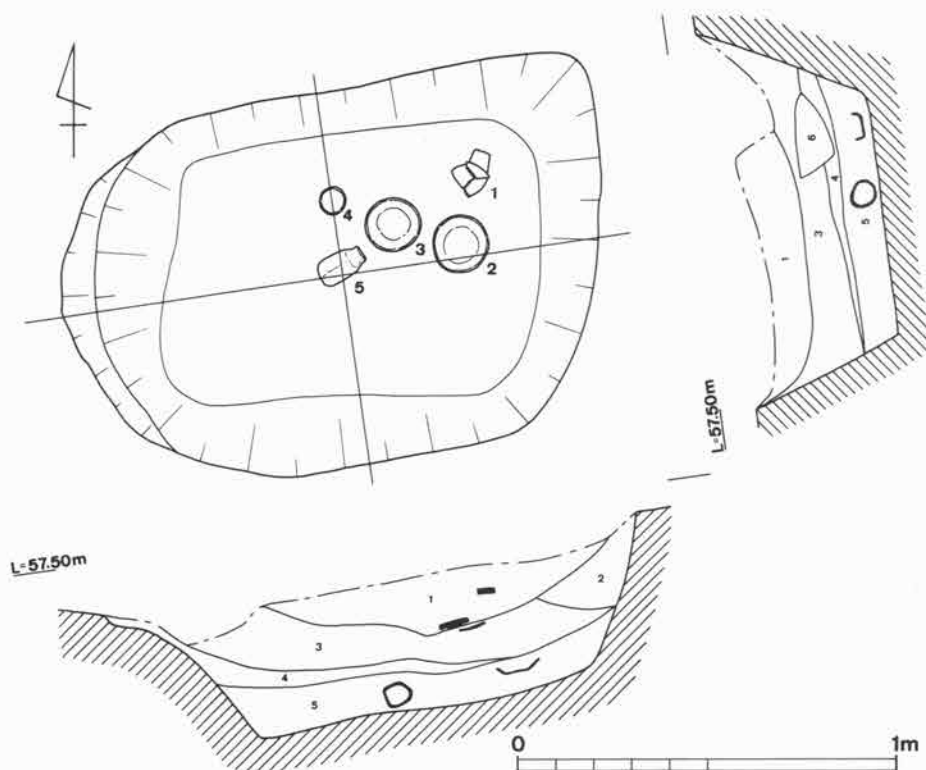
茶褐色土～赤褐色土層が50～70cmの厚さで堆積しており、そこには多量の瓦片が混じっていたが、瓦だけの堆積層は無かった。一方、サブ・トレンチより北側では瓦層は認められたが、茶褐色土～赤褐色土層の堆積は顕著ではなく、あまり瓦は出土しなかった。

下層遺構面では、土層観察による予想に反して、建物跡などの顕著な遺構は確認できず、溝、柱穴状の土坑、丘陵斜面を検出したにとどまった。検出した遺構の中には瓦片を伴ったものがあり、伏見城関連の時期と判断してよいものである。

SD15 幅約50cm、検出高は最大で5cmを測り、検出長約4.5mの溝である。埋土からの遺物の出土はない。座標北から約5°10′東に振れ、SB01とほぼ同じ方向である。この溝の西側で、柱穴状の土坑を検出しており、径35～50cm・深さ10～65cmである。これらは、建物跡には結びつかない。

SD16(図版第21-2) トレンチの南半で検出した溝で、斜面部分を北東から南西に掘削されており、内部には多数の瓦片が混じっていた。埋土は、この上の整地層である茶褐色土～赤褐色土で、整地の際に一気に埋められた状況であった。幅50cm・検出高20cm程度で、検出長は約9mである。この南端には攪乱があり、SD18との関連は不明である。

SD17 SD16に切られた溝状の遺構で、斜面に直交して検出した。内部には多くの瓦片が混じっていた。この西端は浅くなって終わる。検出幅は80cm程度で、検出長約5m、



第33図 SX03実測図(平面図の番号は、第34図に対応)

1. 黄褐色砂泥土(かたい)    2. 黄褐色砂土    3. 淡褐色砂土    4. 炭層  
5. 淡黄褐色砂    6. 黄褐色土

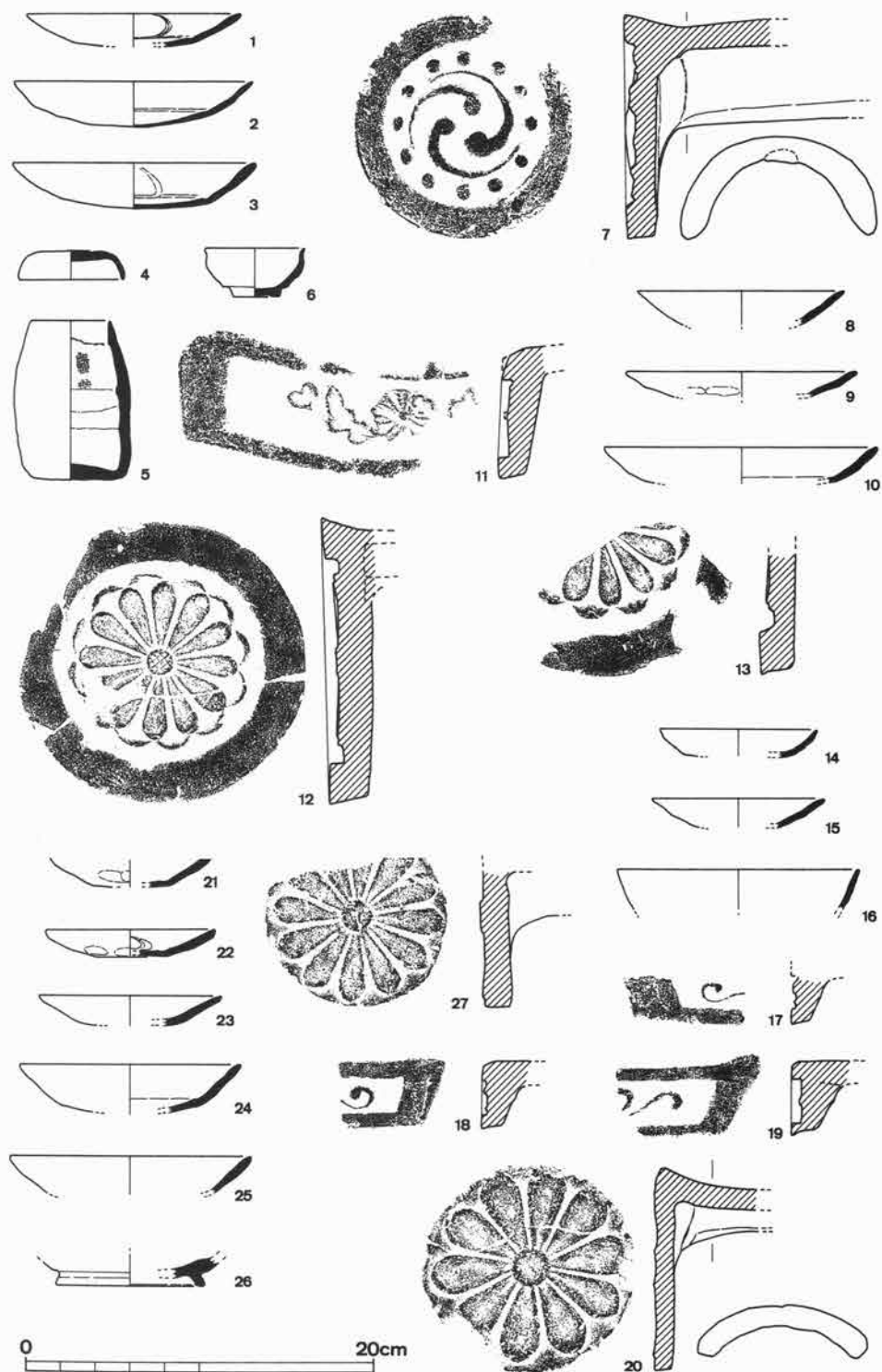
検出高は最大で25cmである。

SD18 SD16の南西端部の攪乱部分から北西に向けて検出した溝である。一部は斜面に直交し、平坦部では南北に検出した。平坦部の溝の掘形はしっかりとしておらず、若干の窪みを検出したといった程度である。規模は、SD16とほぼ同じであるが、埋土は淡赤褐色土で、遺物も全く含まないという点で異なっている。

丘陵斜面(図版第21-1) 先述のように、サブ・トレンチ内の土層から、トレンチ中央部から西に向けて徐々に下る地形を観察しており、平面掘削の結果、造成直前の地形を確認した。水平方向から垂直方向に向けて、約 $12^{\circ}$ の傾斜角度である。トレンチの西端は幅約5～8mの平坦面をなしていた。

#### 4. 出土遺物(図版第22)

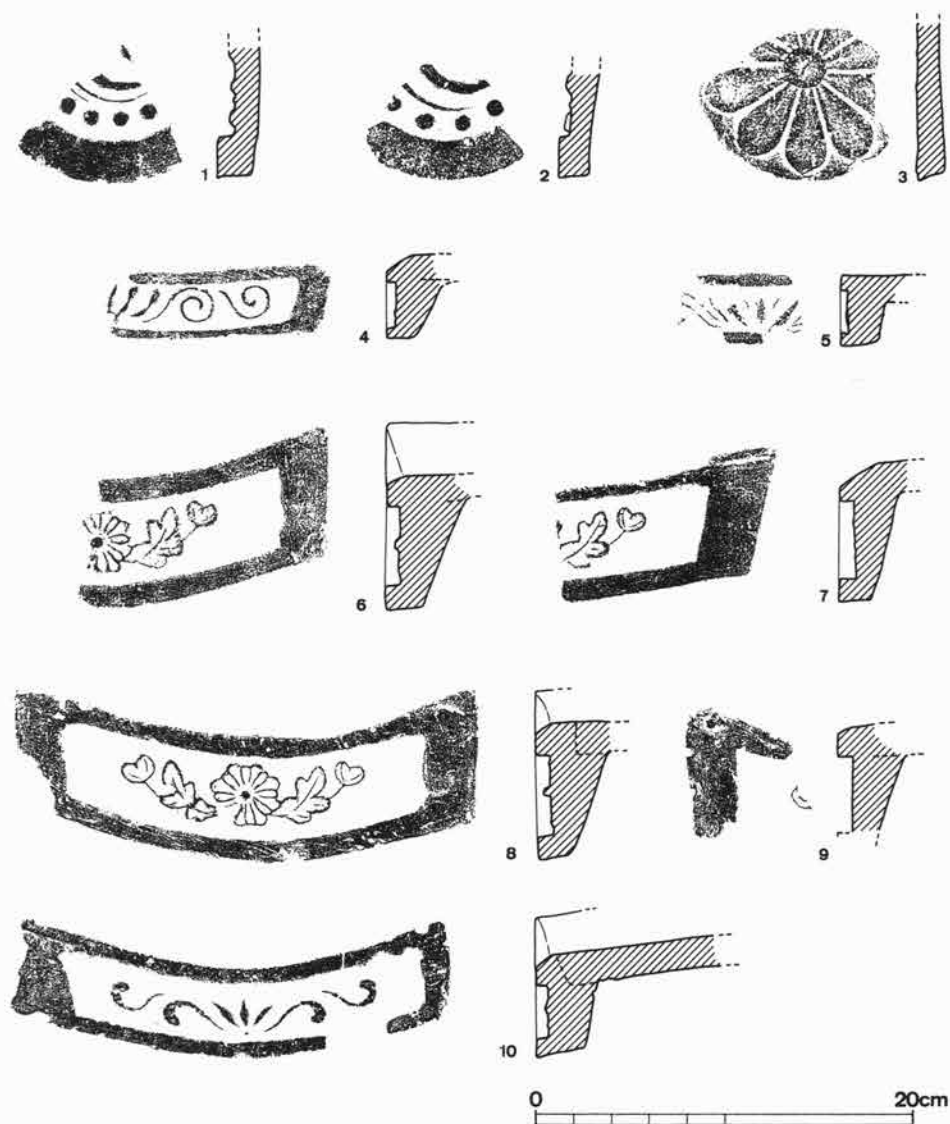
今回の調査では、整理用コンテナ約130箱分の遺物が出土した。これらの遺物の大部分が瓦で、土師器や陶器などの日常雑器類は数箱程度を数えるのみで、非常に少ない。これ



第34図 出土遺物実測図・拓影(1) 各遺構出土

は大名屋敷の中でも中心的な殿舎—いわば「はれ」の場であったためと推定され、今回の調査地が校舎部屋敷地の中心施設であったためであろう。また、出土した瓦のほとんどが、下層遺構面の直上の茶褐色土層と瓦層から出土している。これらの瓦は二次焼成を受けておらず、また、土層中に炭や焼土は混じっておらず、体育館下の調査時の瓦溜まりと著しい対比をもつ。<sup>(註10)</sup>

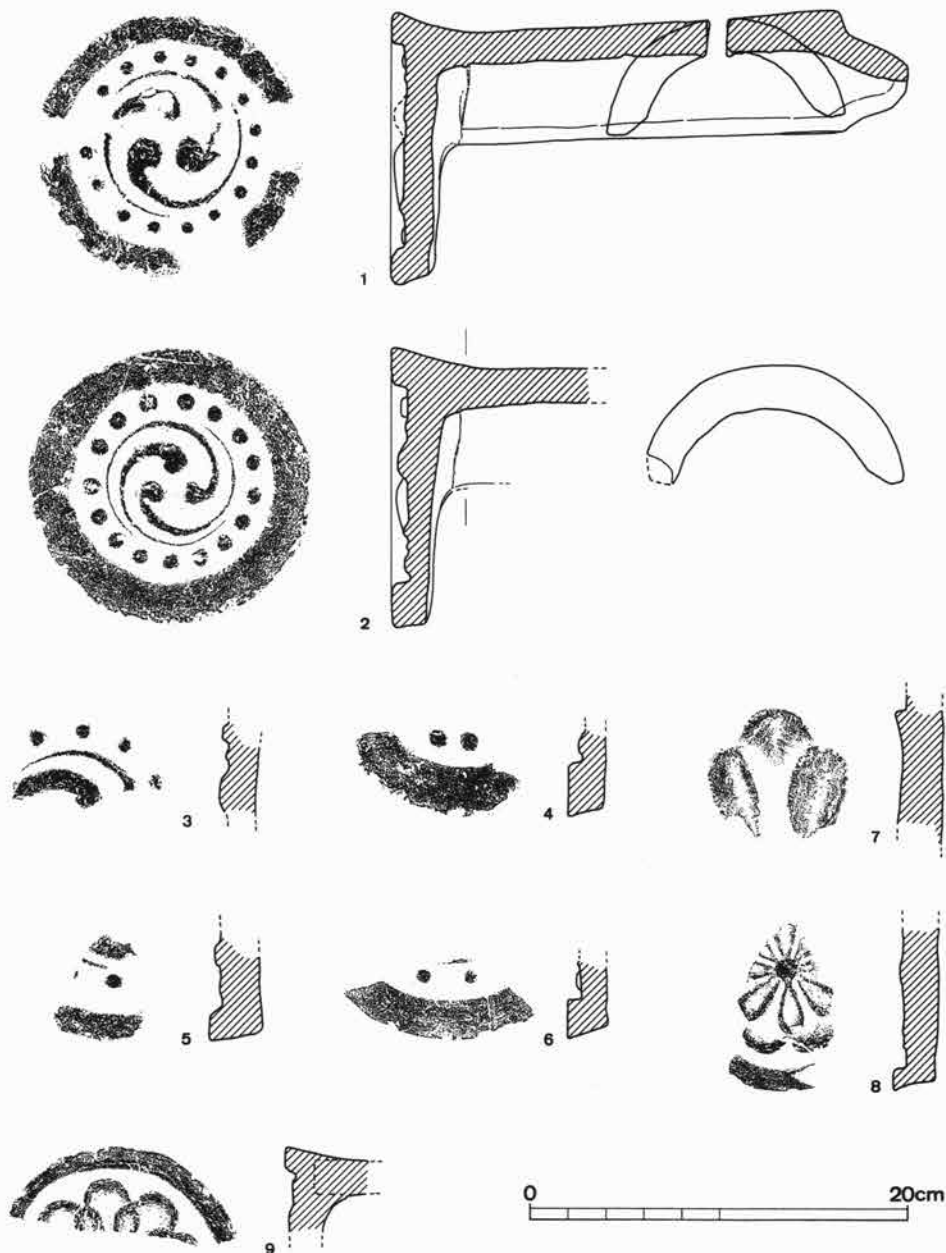
第34～36図は、今回の調査で出土した遺物の実測図と拓影であるが、攪乱内から出土したものや近・現代の土器片・瓦片を除外すると、図化し得るものはこれらでほぼすべてで



第35図 出土遺物実測図(2) 瓦層出土  
5・6. 金箔瓦

あり、軒瓦の出土が少ないことも、今回の調査の特色の一つに挙げられよう。金箔瓦は、軒瓦については実測図にすべて載せてあるが、この他に鬩斗瓦の小口に金箔を押しした瓦片が整理用コンテナバットに2箱程度、瓦層や茶褐色土層から出土している。

第34図は、各遺構から出土した土器の実測図と瓦の拓影である。1～7がS X03から出



第36図 出土遺物実測図・拓影(3) 茶褐色土層出土

3・5・6・8・9. 金箔瓦



土しており、1～5の番号は第33図のS X03の土器番号と一致している。1～3は、土師器皿で、内面の底部と体部の境界を強くナデている。1は、口径(復原)が12.2cm・器高2.05cmで、口縁端部にススが付着している。2・3の土師器皿は完形で、口径は13.7～13.9cmで、器高は2.65～2.7cmである。4・5は、土師器の塩壺と蓋で、4は口径6.0cm・器高1.65cmである。5の内面には粘土の継ぎ目がみられ、一部布目の圧痕がみられる。口径4.5cm・器高9.5cmである。6は、黒釉陶器(天目)で、口径5.7cm・器高2.8cmである。8～13がS K10から出土している。8は口径11.8cm(復原)・残存高2.05cm、9は口径(復原)13.1cm・残存高1.5cm、10は口径(復原)15.6cm・残存高2.1cmである。14～16は、S K11から出土している。14・15は土師器皿で、14は口径(復原)9.0cm・残存高1.6cm、15は口径(復原)9.8cm・残存高1.7cmである。16は須恵器杯片で、口径(復原)が13.8cmである。17～20の瓦は、S K12から出土した。21は、S K08から出土し、口径(復原)9.4cm・器高2.05cmである。22の土師器皿は、S K09から出土し、口径9.9cm(復原)・器高1.65cmである。21・22ともに、体部の底部近くに指頭圧痕が見られる。23は、口径(復原)5.5cm・器高1.8cmで、S K14から出土している。24は、口径(復原)12.6cm・器高2.8cmで、S K13から出土しており、25の土師皿は、瓦層から出土し、口径13.8cm・残存器高2.15cmである。26の須恵器杯底部は、瓦片に混じって、茶褐色～赤褐色土層から出土した。高台径(復原)8.2cm・残存高が1.3cmである。27の軒平瓦は、S K07から出土した。

16・26の須恵器は、おそらく、整地に伴った土の移動によって、他の場所からもたらされたものであろう。松平伊豫守の屋敷地にあたる地点の発掘調査では、古墳時代須恵器や埴輪が整地土に混じって出土しており、<sup>(注1)</sup> 桃山丘陵上の他の地点の調査でも伏見城以前の若干量の遺物の出土が報告されている。

第35図は、瓦層から出土した瓦の拓影と実測図である。このうち、5・6が金箔をおした瓦である。第36図は茶褐色土から出土した瓦の拓影と実測図である。1が唯一、完形に近い形で出土した軒丸瓦で、内面をコビキBの手法で仕上げている。3・5・6・8・9には金箔がおしてある。

## 5. ま と め

今回の調査の結果で明らかとなった項目を列举しておきたい。

1. 最大2mの整地層を確認し、その上下の面で伏見城期の遺構を検出した。
2. 上層遺構面では建物跡を検出しているが、下層遺構面では顕著な遺構はなく、丘陵斜面の一部が確認された。
3. これらの遺構は上下面とも、5～6°東に振れる方位を持ち、上下面で大きな違いは認め

られない。

4. 上層の建物跡は屋敷地の中の中心的なものと考えられるが、建物跡の重複から、少なくとも二小期に分けられる。
5. 整地層には多量の瓦が廃棄されており、これらは火を受けた痕跡はなく、また、軒平瓦や軒丸瓦の出土が少ない。
6. 調査地内において、日常雑器としての土器類の出土量が少ない。
7. 整地層には、下層遺構面調査地385m<sup>2</sup>で約250m<sup>2</sup>の盛り土がある。

以上が、今回の調査によって判明した事実である。これらから、どのような歴史が再構成できるかは、機会を改めて検討したい。

(岩松 保)

- 注1 この3回の調査のほかに、京都市埋蔵文化財研究所が防火水槽の調査を行った(磯部 勝「伏見城跡(1)」『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和57年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984)。
- 注2 村尾政人「伏見城跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980)』第1分冊 京都府教育委員会) 1980
- 注3 長谷川 達「伏見城跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第8冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注4 現地作業と整理事業には、京都教育大学学生保坂 亨と山本弥生の参加を得た。また、京都大学名誉教授中澤圭二、京都大学大学院人間・環境学研究科長足利健亮、通産省地質調査所寒川 旭、山城郷土資料館橋本清一、桃山高校教諭(地学)村山 保、伏見城研究会星野猷二の各氏には、現地にて有益なご教示を得た。ここに記して、感謝の意にかえます。
- 注5 加藤次郎『伏見桃山の文化史』 1953
- 注6 中島 至『伏見城とその城下町の変遷』 1963
- 注7 野田只夫「伏見城下町の一考察—築城前の伏見と城下町建設」『京都教育大学紀要』A(人文・社会)35 1969
- 注8 桜井成広『豊臣秀吉の居城』聚楽第／伏見城編 1971
- 注9 足利健亮『中近世都市の歴史地理』 人文書院 1984
- 注10 注2に同じ
- 注11 平方幸雄「伏見城跡」(『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和61年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1989

#### 参考文献

- 山本真嗣『伏見 くれたけの里』 京都経済研究所 1988  
『京都の歴史』4 京都市史編さん所 1969  
『京都府伏見町誌』 伏見町役場 1929 (復刻版 臨川書店 1984)

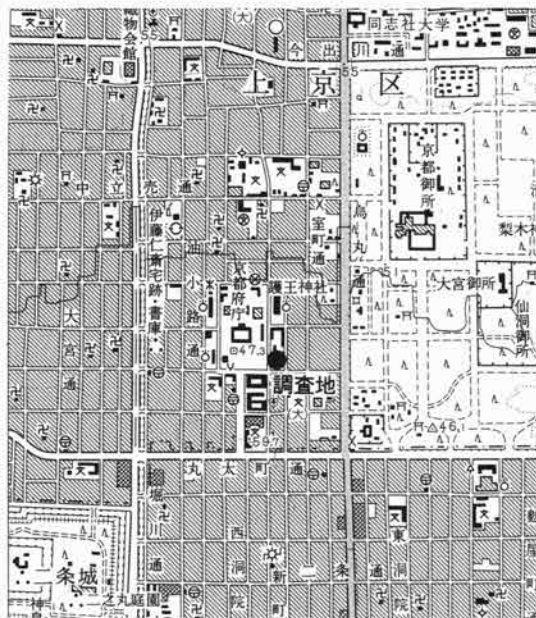
## 4. 平安京跡・旧二条城跡発掘調査概要

### 1. はじめに

平安京跡・旧二条城跡の調査は、京都府警察110番指令センター(仮称)新築工事に伴い、京都府警察本部の依頼を受けて行った。調査は、調査区を北地区と南地区に分け、平成4年度に北地区のすべての調査と南地区の第1面の調査を行い、平成5年度に南地区第2面の調査を行った。調査面積は約2,300m<sup>2</sup>である。調査期間は、平成4年度が平成4年6月22日から平成5年3月4日まで、平成5年度が平成5年4月7日から平成5年6月29日までである。なお、調査に要した費用は、全額京都府警察本部が負担した。

調査地は、平安京跡左京一条三坊六町のうち南西約六分の一の範囲で、平安京の修理職町の一角にあたる。付近で行われた地下鉄烏丸線建設に先立つ調査の成果から考えると、室町時代末には、織田信長が足利義昭の居館として築いた旧二条城の北西部分の一角に含まれている可能性があった。また、桃山時代には聚楽第城下町の範囲に含まれ、大名屋敷などが存在した可能性が考えられた。江戸時代には、「寛永十四年洛中絵図」からみて、町屋になったものと思われる。

当調査地では、1949年に京都市警察の庁舎が建設された際に、石垣が発見されたことを契機に、工事の合間を縫って古代学研究会京都支部による調査が行われた<sup>(注1)</sup>。報告によれば、工事途中のことで、遺物採集を主としたものにとどまらざるをえなかったようである。とはいえ、後述のように、検出遺構の性格付けや出土遺物の年代比定は、今日のみで見れば明らかな誤りがあるが、事実関係の記述は今回の調査で得られた知見と一致しており、困難な中で正確な調査が行われたことがうかがえる。



第37図 調査地位置図(1/25,000)

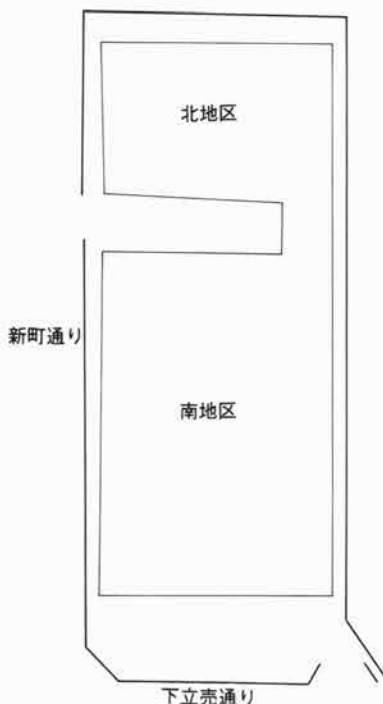
## 2. 調査概要

今回の調査では、前述のように、調査地を北地区と南地区に分けて調査を行った。ここでは、調査の順にしたがって、各遺構面の主な遺構について概説を行う。

### ①北地区第1面(江戸時代初期)の調査(第39図)

**溝50(第40図)** 北地区中央を南北に走る溝である。当初はDライン付近から調査区北端まで続く断面「U」字形のもの(溝50B)であったが、ほどなく、調査区全体を貫く浅い溝(溝50A)に改修されている。溝50Bは、広い部分で幅1.7m・深さ0.3mを測るが、南に向かって狭くなり、Dライン付近で明確に終わっている。底のレベルは南がやや低く、埋土の観察でも流水の痕跡が認められないことから、滞水した状態にあったものと思われる。溝50Bの西肩ラインは、調査区北半部分では桃山時代の堀Aの西肩ラインと一致している。このために、溝50Bは東肩が軟弱で、この部分には打ち込んだ杭の間に石と瓦を詰め込んで護岸工事を行っている。一方、溝50Aは、幅0.9m前後・深さ0.1~0.2mを測り、調査区全体を南北に貫き、南地区の溝10に続いている。埋土は、黄褐色の砂で、水は南に向かって流れていたと思われる。溝50Aも溝50Bと同じように、地盤の脆弱な北端付近では、杭と板材によって護岸工事を行っている。

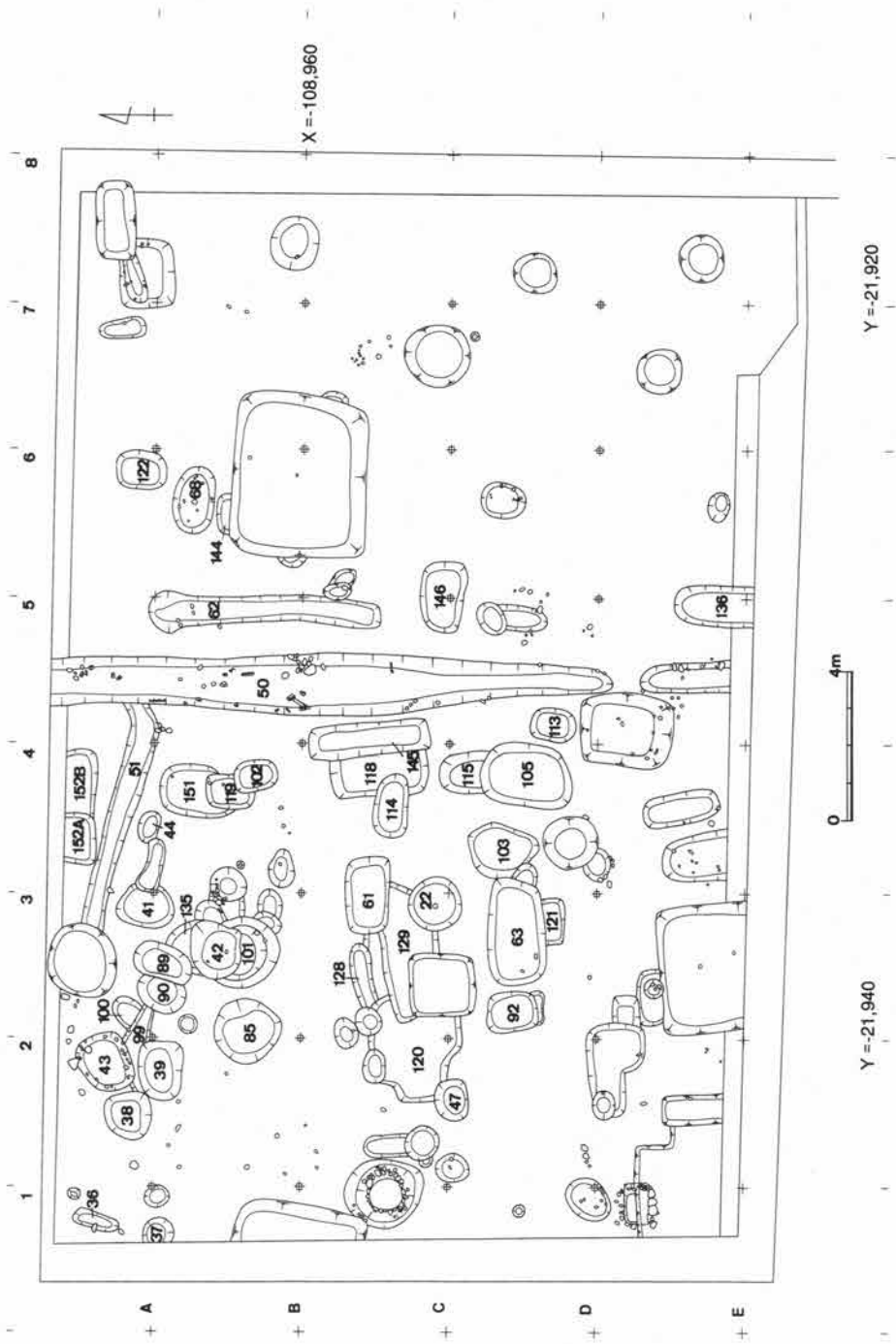
**土坑62** 溝50に平行する南北に細長い土坑である。長さ6.3m・幅約0.7mを測る。断面は「U」字形をなし、深さは約60cmを測る。土坑全体が拳大から人頭大の垂平礫と、瓦によって埋まっている。瓦は、桃山時代のもので、多量の金箔瓦が含まれている。



第38図 調査区位置図(1/1,000)

土坑39(第41図) 2B地区で検出した東西に長い楕円形土坑である。長径1.6m・短径約1.2m・深さ0.6mを測る。埋土は、3層に分かれ、最下層は板材とおが屑状の木質が薄く敷きつめられ、その上に暗灰色粘質土が堆積し、上層には炭と灰を多く含んだボソボソの灰黒色土が厚く堆積している。上層は、一気に埋没したものではなく、薄い層状に継続的に堆積した状況を示している。土師器皿、信楽焼すり鉢、鉄滓などが出土している。

**土坑43(第41図)** 2A地区で検出した東西に長い楕円形土坑である。長径1.6m・短径約



第39図 北地区第1面遺構平面図(1/200)



第40図 溝50A平面図・立面図・断面図(1/40)

1.3m・深さ約0.5mを測るが、土坑底は平坦ではなく北側が深い。埋土の状況は、土坑底に板材やおが屑の堆積物が認められないことを除けば、基本的に土坑39に類似し、炭と灰を多く含んだボソボソの灰黒色土(5層)が中層に厚く堆積している。

土坑61(第41図) 3C・4C地区で検出した東西に長い長方形土坑である。東西2.1m・南北1.2m・深さ0.6mを測る。砂混じりの粘質土と炭・灰を多く含むボソボソの灰黒色土が交互に堆積し、最上層には礫を含んだ粘質土が堆積している。土坑39・43などと共通の堆積状況を示している。

土坑42(第41図) 3B地区で検出した直径1.4~1.5mを測る不整形の土坑である。深さは約1.0mを測る。埋土は3層に分かれ、上層が瓦や礫を多く含んだ灰黄色土、中層が灰黒色粘質土、下層が泥炭状の黒色土である。土坑101を切っている。

土坑101(第41図) 3B地区で検出した直径2mの円形土坑である。深さは1.8mを測る。埋土は、南から北に向かって傾斜して堆積している。中層に暗茶褐色~黒色の炭や植物質を多く含んだ堆積物が見られる(3・5・7層)。この堆積物は、薄い層状に堆積しているところから、継続的に投棄されたことがわかる。

土坑63(第41図) 3D地区で検出した東西に長い楕円形土坑である。長径2.9m・短径約1.2m・深さ約0.7mを測る。埋土は大きく2層に分かれ、下層は茶褐色系の粘質土(7・8層)と灰色系の粘土(4~6層)が堆積し、上層には礫を多く含んだ灰色系の粘質土(1~3層)が堆積している。下層はあまり締まっていない。土坑底から板材と大形の花崗岩製の砥石が出土した。

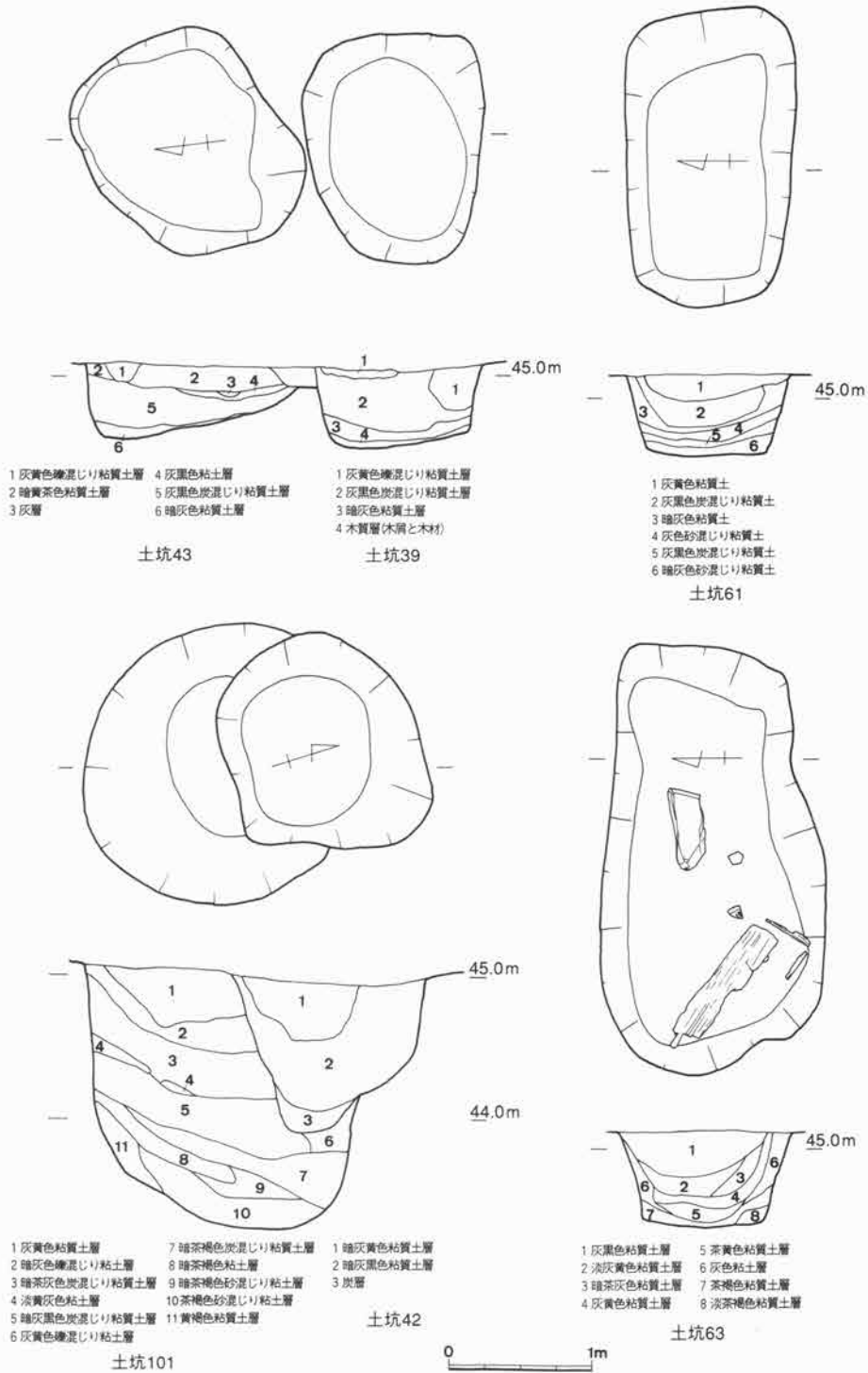
土坑89(第42図) 3B地区で検出した長径1.5m・短径0.9m・深さ0.5mを測る楕円形土坑である。埋土は大きく3層に分かれ、薄い炭層(4層)と炭混じりのボソボソの土(3層)をはさんで上下に礫を少し含んだ粘質土と粘土が堆積している。

土坑90(第42図) 3B地区で検出した直径1.2mほどの円形土坑である。断面形はフラスコ形を呈し、大きくオーバーハングしている部分があるため、下部の断面実測はできなかった。深さは1.7mを測る。

土坑114(第42図) 4C地区で検出した東西に長い楕円形土坑である。長径1.7m・短径0.9m・深さ0.4mを測る。埋土は3層に分かれる。

土坑136 5E地区で検出した南北に細長い土坑である。長径2.1m以上・短径1.2m・深さ0.4mを測る。埋土は大きく3層に分かれ、下層は直径2~5cmの亜円礫層、中層は粘土層で、上層は多量の木製品を含む粘質土層である。この層からは、多量の箸のほか、漆塗り用のヘラや、漆塗りの羽子板など漆職人の存在をうかがわせる遺物がまとまって出土した。



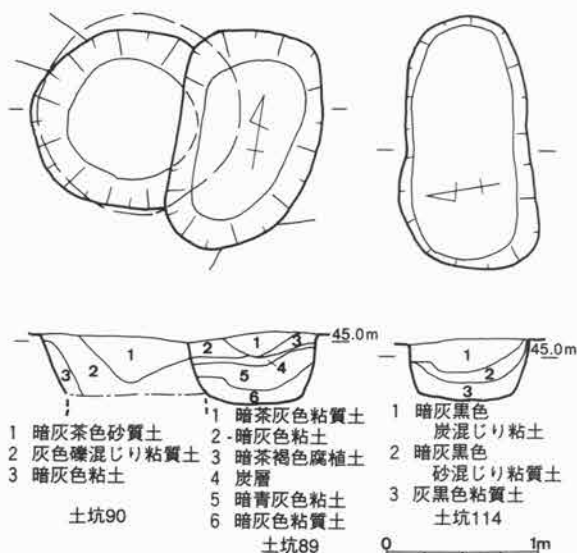


第41図 北地区第1面遺構平面図・断面図1(1/50)

②北地区第2面(桃山時代)の調査(第43図)

第2面では、時期差のある2本の素掘りの堀を検出した。

堀A(第44図) 調査区東半部で検出した堀Aは、堀Bが埋められた後に掘られている。途中でクランク状に屈曲し、南地区へ続いている。幅約6~7m・深さ約2.2mを測る。北地区北壁の断面観察によれば、埋土は肩が崩れた礫層、主に西から流れ込んだと見られる自然堆積層、人為的な埋土層、人為的な埋土の凹みに堆積した自然堆積層に分かれる。



第42図 北地区第1面遺構平面図・断面図2(1/50)

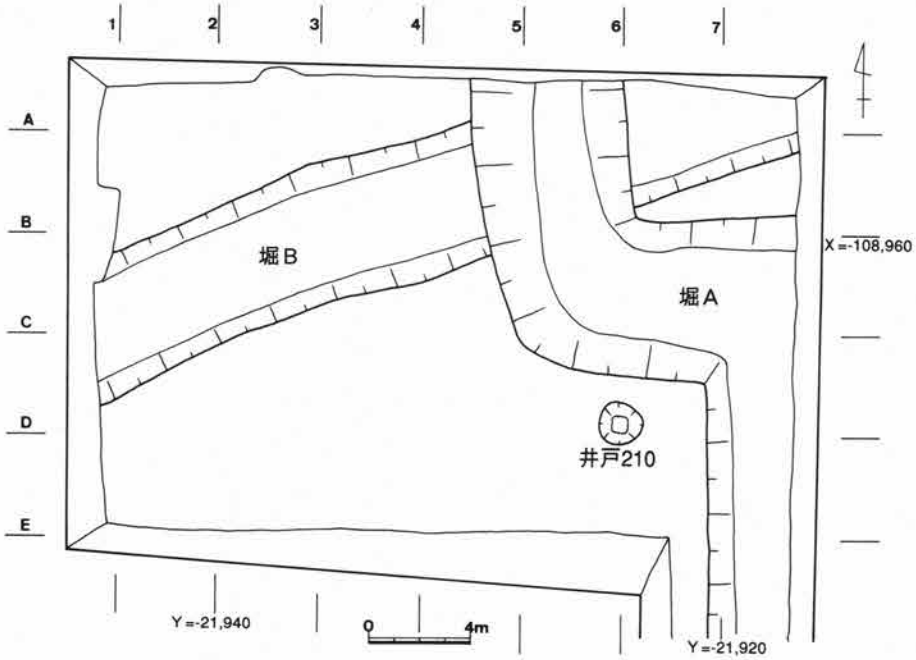
堀B(第45図) 堀Bは、北地区を西南西から東北東に斜めに横切るもので、幅は5.0m前後で、深さは約1.4mを測る。埋土が南側から斜めに堆積しているようすから、南側に土塁を伴っていたものと考えられ、町の構えの堀と思われる。また、堀底に水性堆積物が見られないことから、空堀であったものと思われる。堀Bの埋没時期は、16世紀中葉~後半と考えられる。

井戸210(第46図) 6D・7D地区で検出した石組の井戸である。石組は、上部が失われ、最大で1.5m程度残存する。石組の下は方形に二段に掘り下げ、板材を井戸枠としている。板材を固定する柱などは確認できなかった。出土遺物が乏しく、時期は不明である。

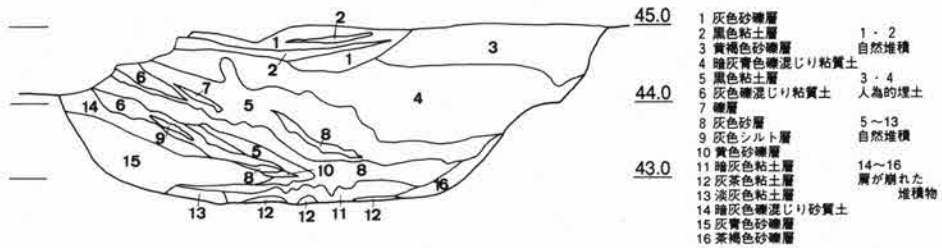
③南地区第1面(江戸時代初期)の調査(第49図)

建物跡1(第47図) 南地区南端で等間隔に並ぶ上面平坦な石を検出し、礎石建物跡と考えた。石は、一辺20cm足らずの小さなもので、ほぼ1.9m間隔で並んでいる。攪乱などで石の検出されていないところもあるが、東西4間・南北3間以上の建物が復原できる。建物跡の西辺に沿って、南北方向に長い土坑が互いに切り合いを持ちながら並んでおり、このラインになんらかの意味があるのかもしれない。

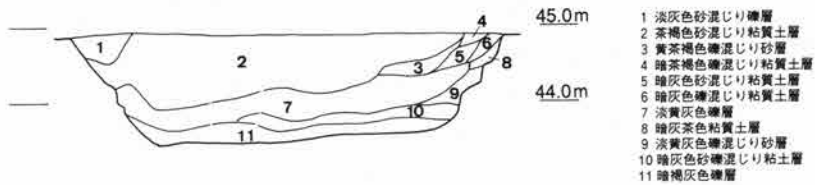
石組溝10(第50図) 南地区南東隅から北へ26mのび、西へ直角に屈曲して11mで再び北へ直角に屈曲する石組溝である。石組に用いられている石材は、すべて自然石で、長径



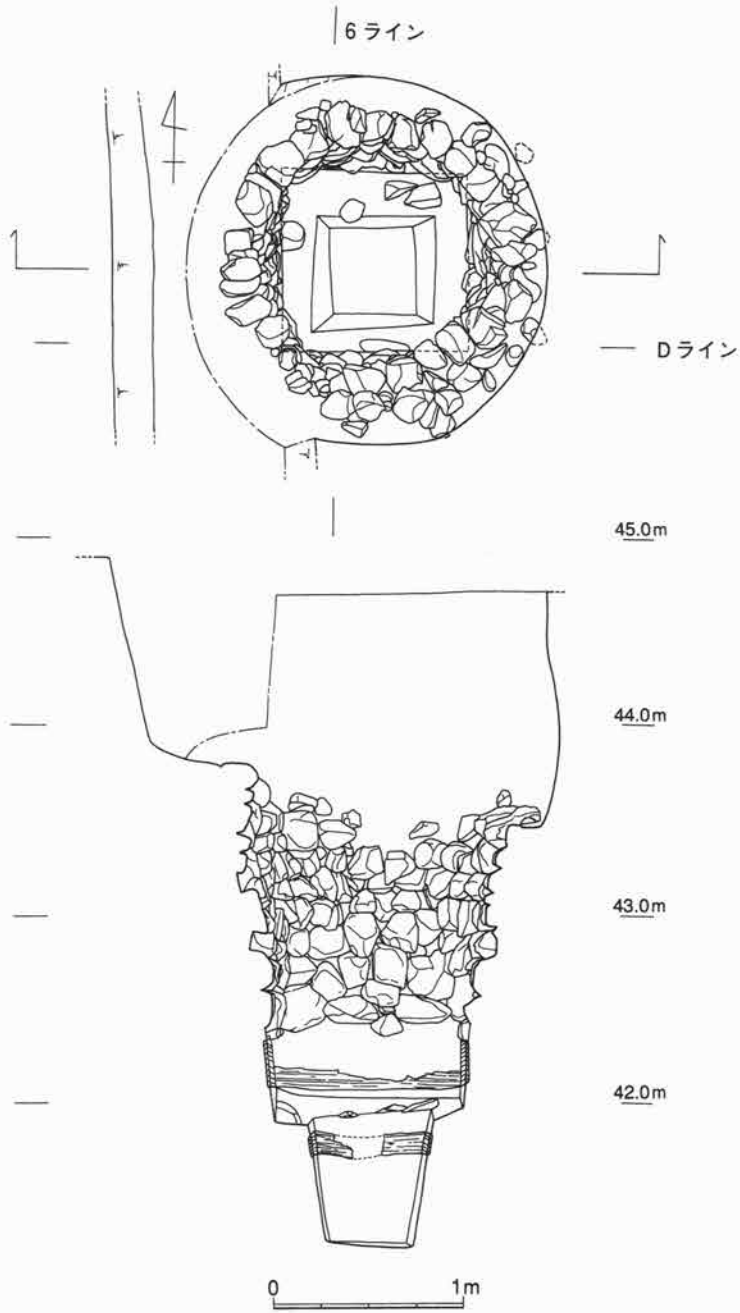
第43図 北地区第2面平面図(1/300)



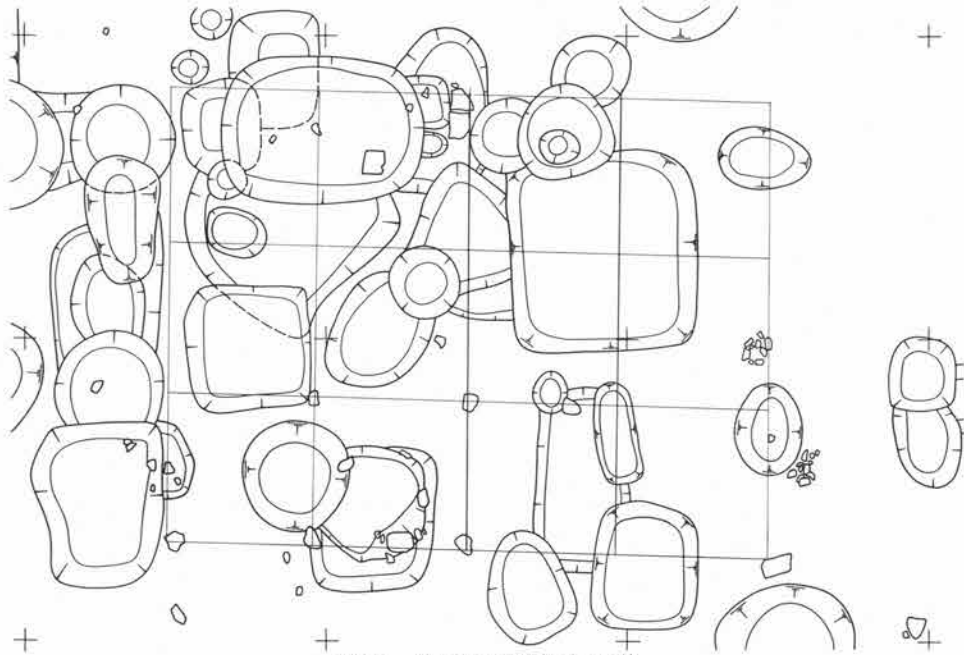
第44図 堀A断面図(北地区北壁)(1/100)



第45図 堀B断面図(2ライン)(1/100)

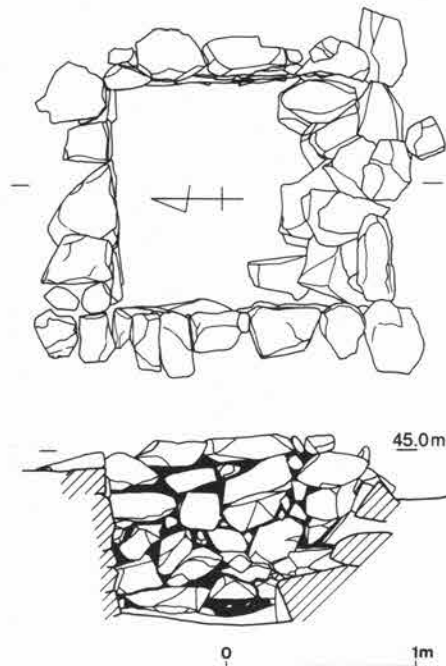


第46図 井戸210平面図・立面図(1/40)



第47図 建物跡1平面図(1/100)

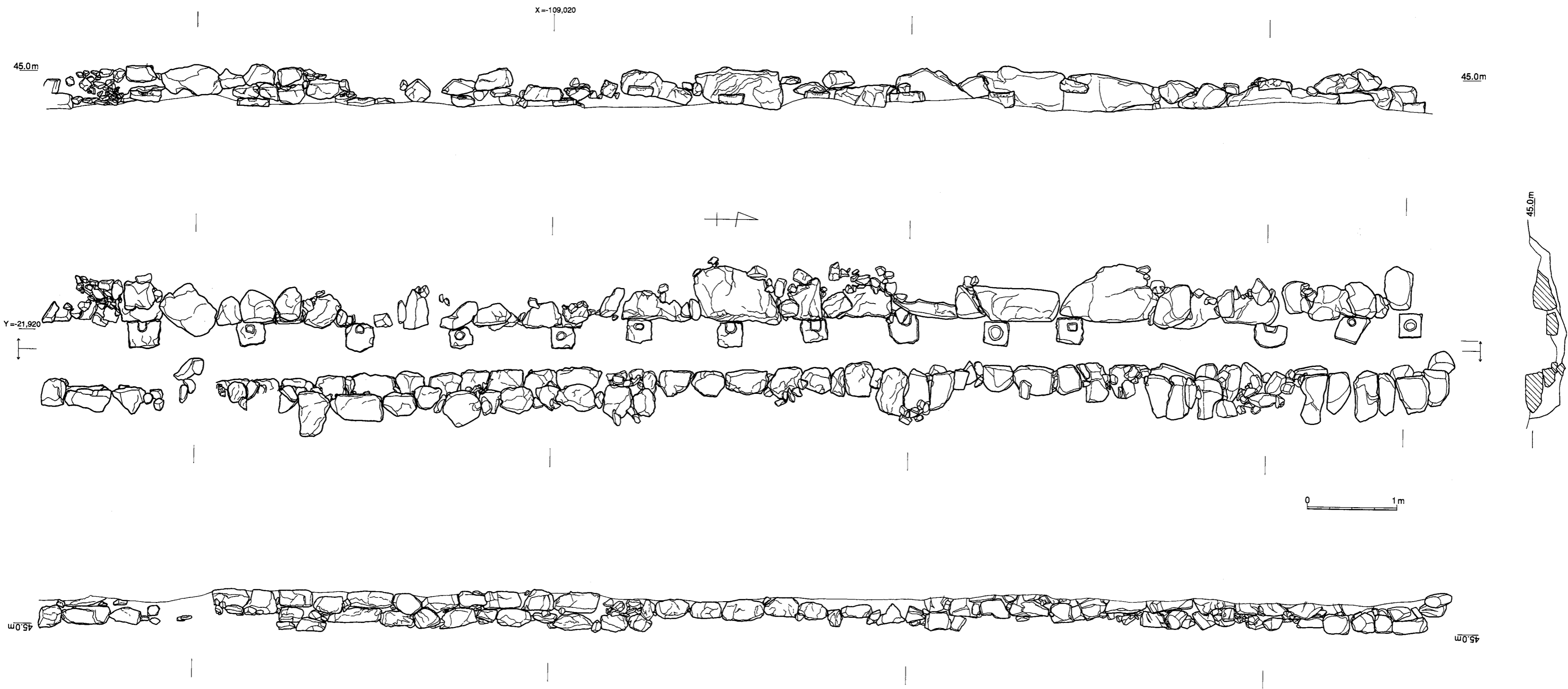
0.5m前後を測るものが多いが、西側には長径1.0mを越えるものも使われている。溝の内法幅は約0.5m・深さ約0.5mを測る。南地区東辺に沿った約26mの部分では、溝内の西側の石組に接して一辺25~30cmの方形に成形されたカコウ岩が約90cm間隔で置かれている。これらの石の上面には、直径約10cm・深さ約3cmのくぼみが穿たれており、ここに板塀などが建てられていたのではないかと考えられる。この溝の最下層の黄色砂層からは、江戸時代初期の遺物が出土し、この溝は、この時期に構築されたものと考えられ、北地区で検出した溝50Aに続くものと思われる。この溝は、Nライン以北では現在の常泉院町と両御霊町及び東立売町の境とほぼ完全に一致しており、町境の溝と考えられる。



第48図 石組土坑12平面図・立面図(1/40)

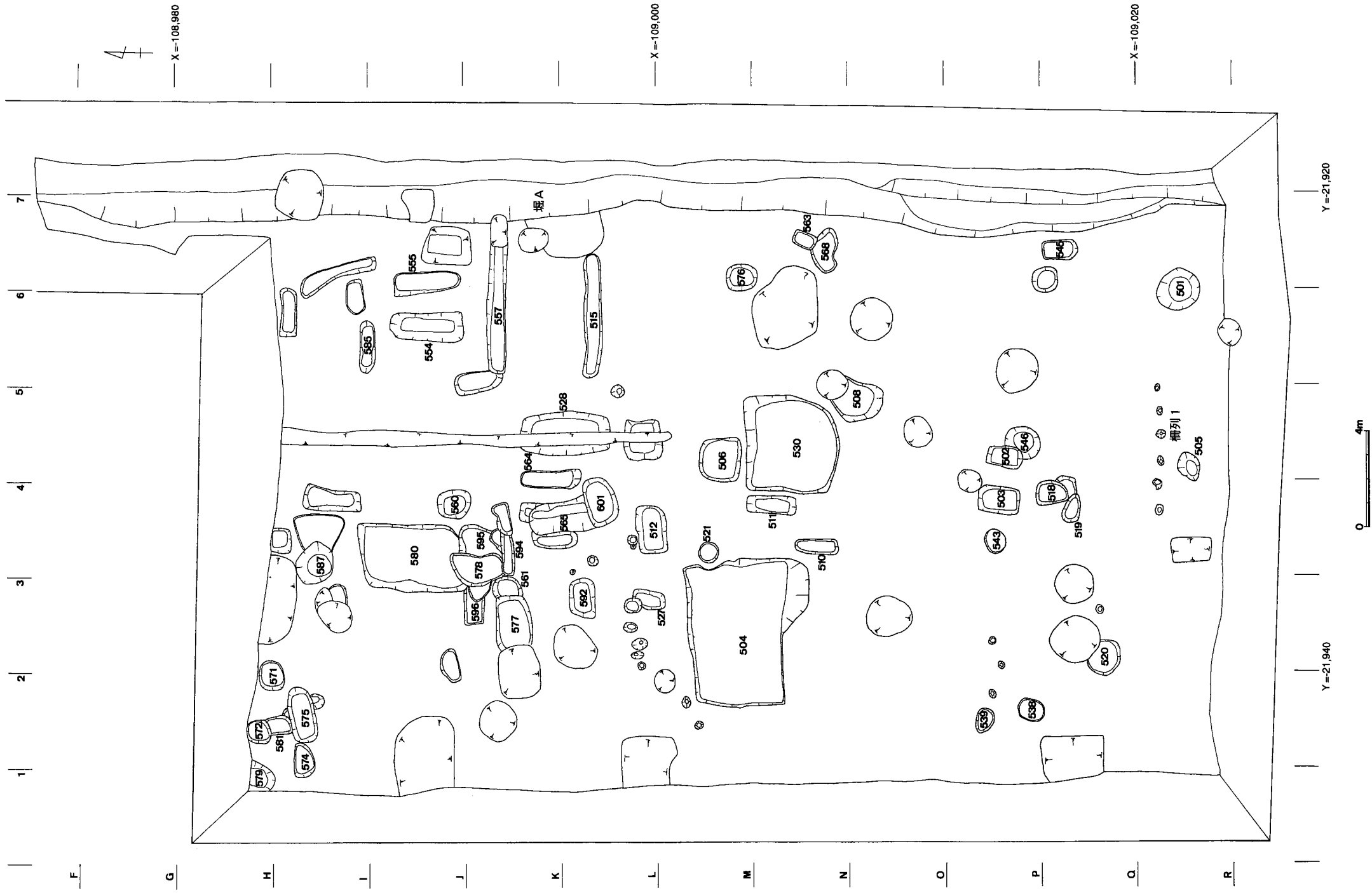


第49图 南地区第1面平面图(1/200)



第50図 石組溝10平面図・立面図・断面図(部分)(1/40)





第51图 南地区第2面平面图(1/200)

石組土坑12(第48図) 2Q地区で検出した方形の石組土坑である。内法は、南北1.3m・東西1.2mを測り、深さは約1mを測る。人頭大の亜角礫を用い、西・北・東の各面は垂直に積み上げるが、南面は乱れた階段状に積み上げており、出入口と思われる。小規模な地下収納施設と考えられる。遺物は出土しなかった。

石組土坑16 2K地区で検出した不整形の石組土坑である。内法は、南北1.1m・東西0.9m前後を測り、深さは約0.8mを測る。直径20cm前後の石を用いて各面を垂直に積み上げている。西辺は、やや弧状を描き、北西隅が広がっている。東辺は、土坑17に切られているため石組が乱れている。埋土中からは、織部焼向付、唐津焼椀・皿、大形の丸瓦などが出土した。

石組土坑28 2L地区で検出した方形の石組土坑である。内法は、南北0.6m・東西1.2m前後を測り、深さは約0.25mを測る。拳大程度の石を用いて長方形に組み上げている。

土坑310 4Q・5Q地区で検出した隅丸長方形の比較的大きな土坑である。東西2.7m・南北1.8m・深さ0.7mを測る。土坑内は、拳大前後の亜円礫でびっしりと充たされており、わずかに瓦も混ざっている。土坑が礫を集めて埋められていることは明らかであるが、その用途は不明である。同様の埋められ方をしている土坑には土坑303などがある。

#### ④南地区第2面(桃山時代)の調査(第51図)

井戸501(第52図) 6R・7R地区で検出した石組井戸である。石組の内法は、約1.1mを測る。約2mの深さまで掘削したが、底を確認することはできなかった。

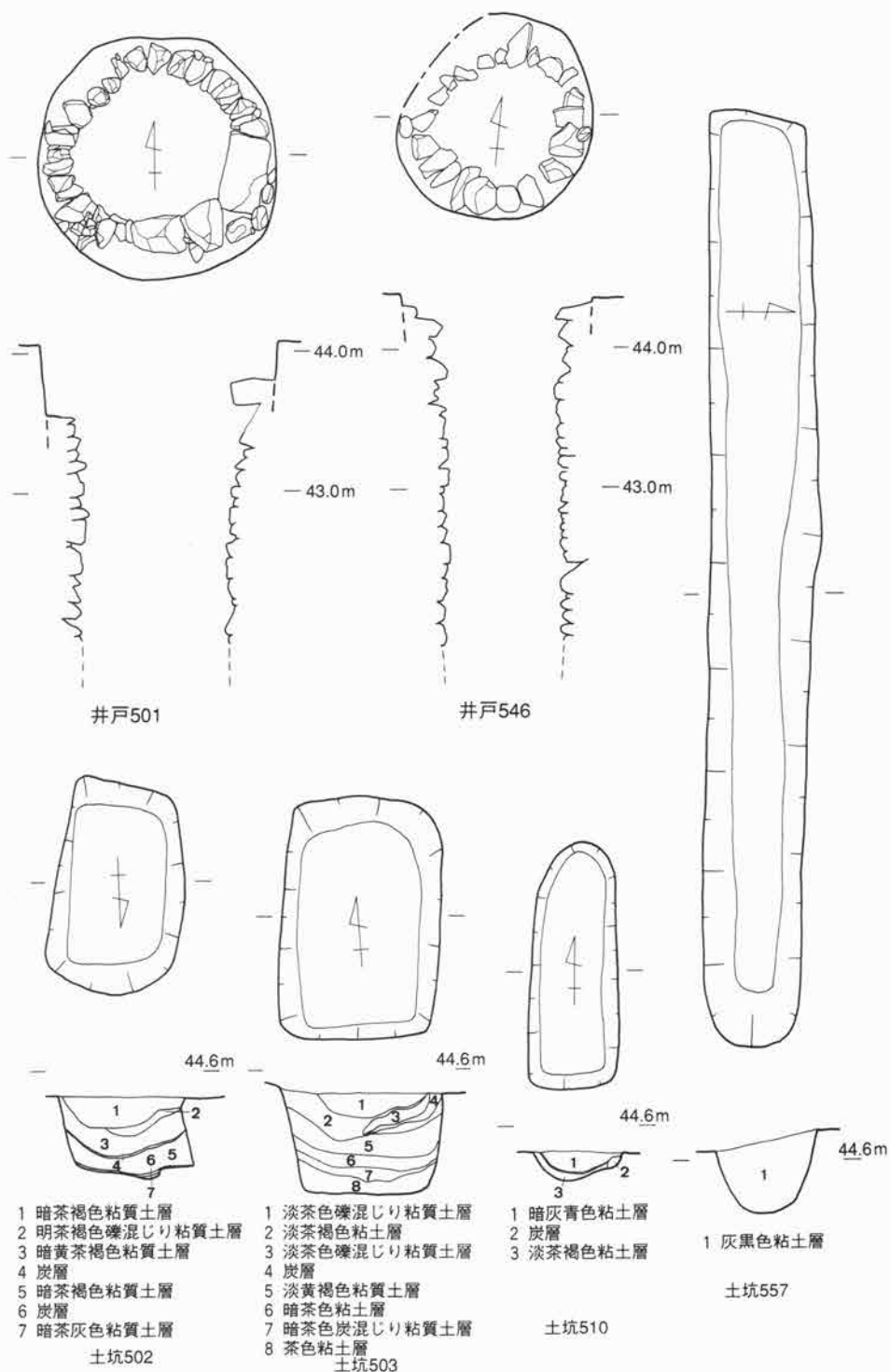
井戸546(第52図) 5P地区で検出した円形の石組井戸である。北西の一部を土坑502によって切られている。石組の内法は、約0.8mを測る。石材は、長径25cm内外と比較的小さいものを用いている。深さは、検出面から2.4mまでは確認したが、安全確保のためそれ以上の掘削はできなかった。

土坑502(第52図) 5P地区で検出した長方形の土坑である。南北1.5m・東西0.9m・深さ0.6mを測る。土坑底と中層に薄い炭層が堆積している。

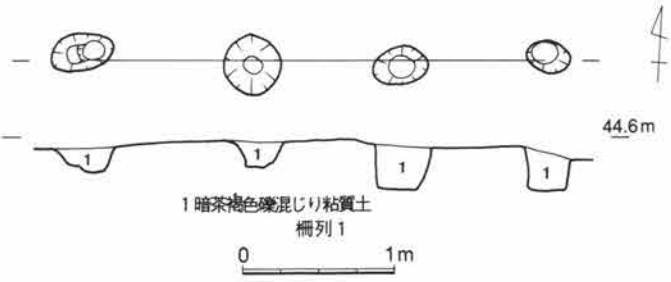
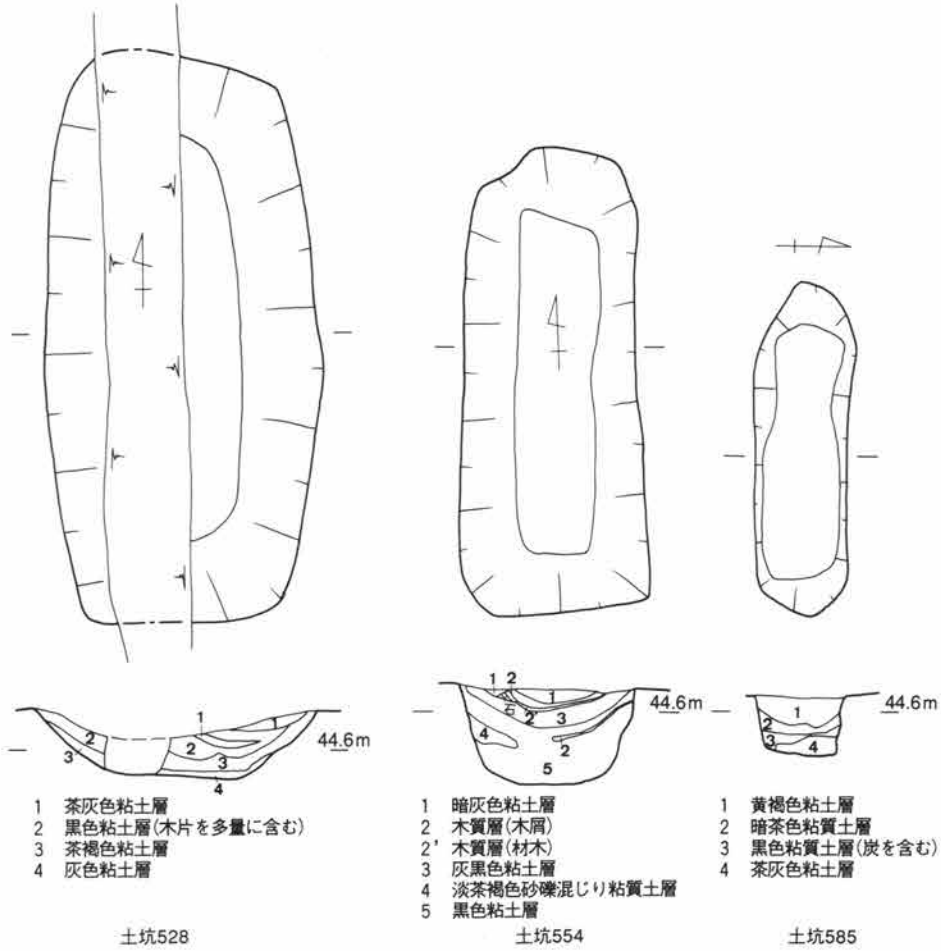
土坑503(第52図) 4P地区で検出した長方形の土坑である。南北1.7m・東西1.1m・深さ0.7mを測る。茶褐色系の粘土及び粘質の強い泥土が堆積しているが、すべての層に炭が混入している。

土坑510(第52図) 4N地区で検出した長楕円形の土坑である。埋土は、薄い炭層をはさんで上下2層に分かれる。上層は礫を含んだ暗灰青色粘土、下層は淡茶褐色粘土である。

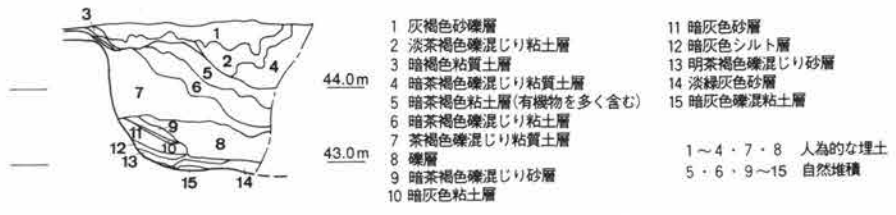
土坑528(第53図) 5K・5L地区で検出した楕円形の土坑である。長径3.8m・短径1.9m・深さ0.4mを測る。土坑中央部からやや西を溝50によって切られている。埋土は大



第52図 南地区第2面遺構平面図・断面図1 (1/50)



第53図 南地区第2面遺構平面図・断面図2 (1/50)



第54図 堀A断面図(Iライン)(1/100)

きく2層に分かれ、上層は木片を多く含んだ黒色粘質土(2層)、下層は茶褐色～灰色の粘土(3・4層)である。

土坑554(第53図) 6 J 地区で検出した長方形の土坑である。南北3.1m・東西1.2m・深さ0.6mを測る。上層の木質層から多量の木製品が出土した。

土坑557(第52図) 6 K・7 K 地区で検出した東西に細長い溝状の土坑である。長さ6.6m・幅0.8m・深さ0.6mを測る。多量の木製品が出土している。

土坑585(第53図) 6 I 地区で検出した長径2.2m・短径0.6mを測る長楕円形の土坑である。深さは0.4mを測る。暗茶色粘質土層と炭混じりの黒色粘質土層から多量の木片が出土した。

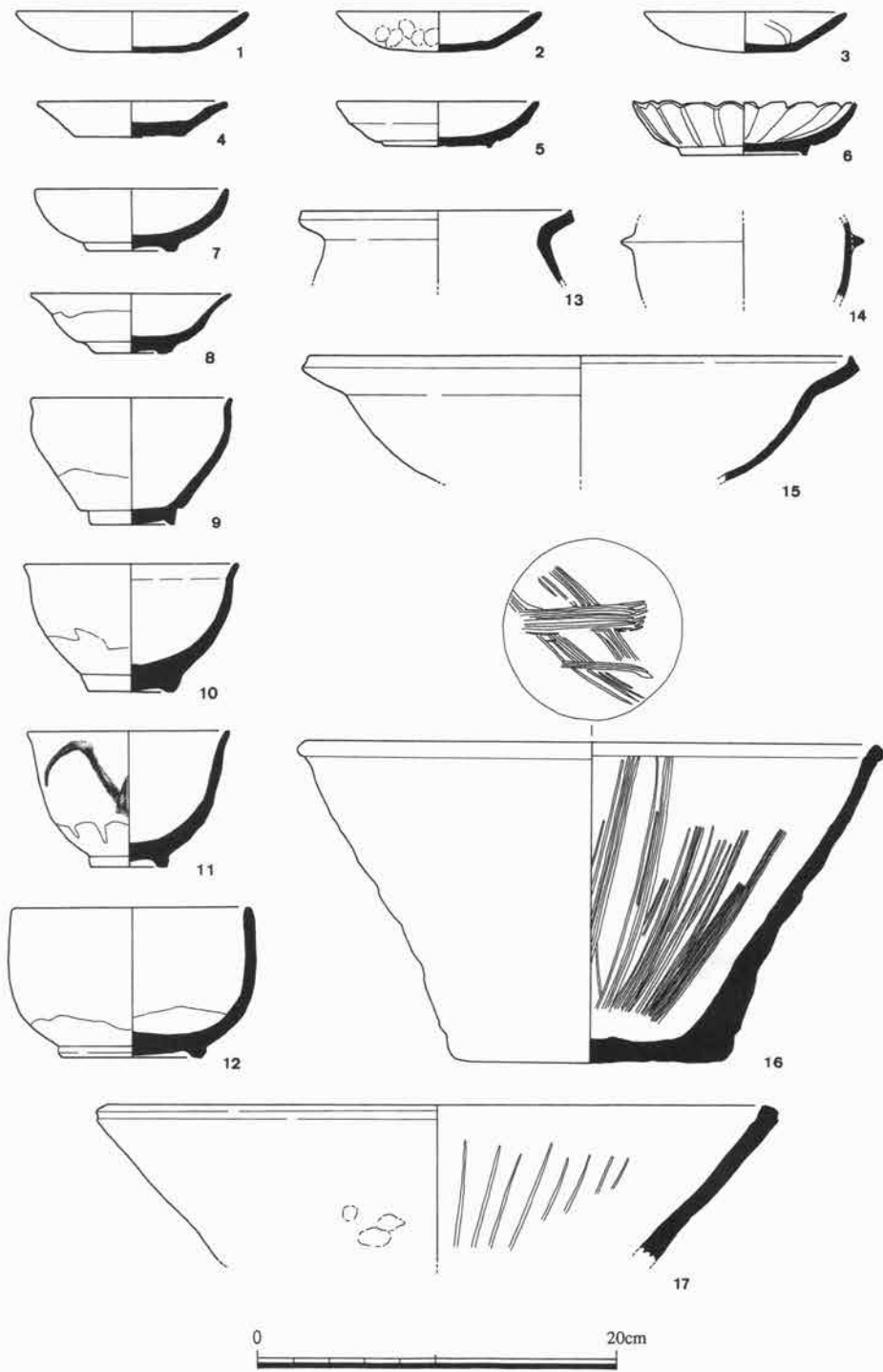
柵列1(第53図) 5 R 地区で東西方向に並んだ4基のピットを検出し、柵列と考えた。ピットの間隔にはややばらつきがあるものの、ほぼ1m間隔で並んでいる。ピットの深さは0.2～0.3mを測る。なお、これらの西に2基のピットを検出しているが、軸がややずれることなどから別の柵列などの一部と考えている。

### 3. 出土遺物

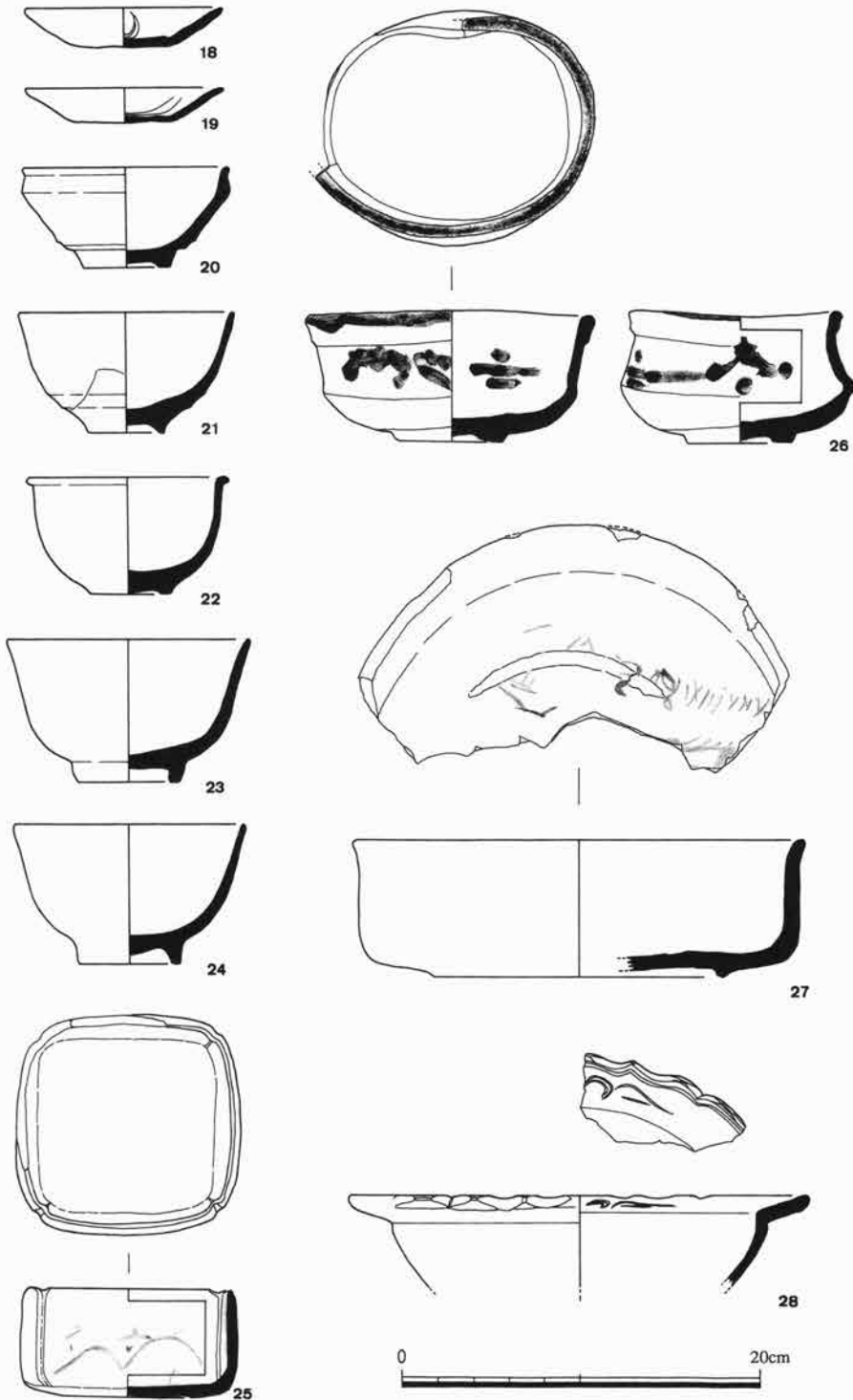
#### ①土器類

1～17は、溝50から出土した。1～3は、土師器皿である。いずれも完形品で、口径11.2～12.8cm・器高2.3cmを測る。1は、溝50Aから出土したもので、型的にも後出するものである。2・3の口縁部にはススが付着しており、燈明皿として使用されたことがわかる。4は、瀬戸焼皿である。口径10.2cm・器高2.0cmを測る。5・6は、志野焼皿である。5は、溝50Aから出土した。6は、21弁の菊花形に作られ、見込みには3か所のトチンの跡がある。7・8は、胎土目の唐津焼皿である。溝50Aから出土した。9は、美濃焼天目茶碗、10・11は、唐津焼碗である。10は、溝50Aから出土した。12は、陶器鉢である。口縁部内外面に黒褐色の釉が掛けられているが、口縁端部と腰部以下は露胎である。13・14は、大和産の土師器羽釜である。同一個体と思われる。15は、土師器鍋である。口縁端部は上につまみ上げている。16は、信楽焼である。6条単位の櫛描きによるすり目が密に施されている。17は、丹波焼の播り鉢である。ヘラ描きのすり目が施されている。

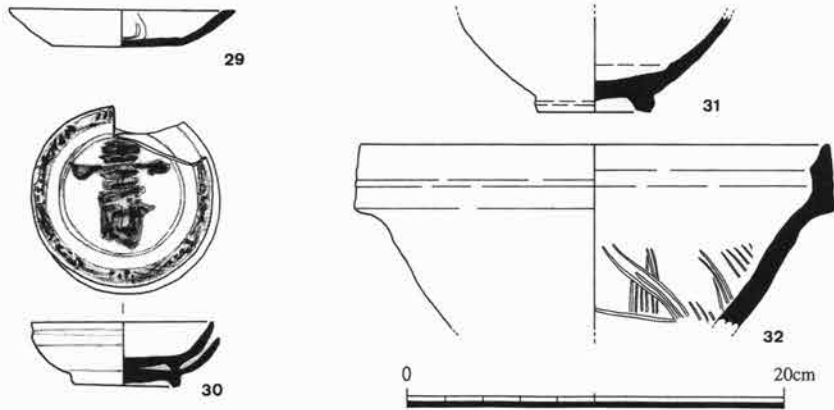
18～28は、石組溝10から出土した。18・19は、土師器皿である。20は、美濃焼天目茶碗である。大窯後半期の製品と見られる。21・22は、唐津焼碗である。21は濃緑色釉、22は灰色釉が掛けられている。23・24は、陶器碗である。乳白色の胎土に貫入の発達した釉が掛けられている。24の断面には漆継ぎをした痕跡が見られる。25は、志野焼向付である。茶褐色の絵付けは発色が悪い。26は、唐津焼沓茶碗である。灰緑色の釉に茶褐色の絵付け



第55図 溝50出土遺物実測図(1/4)



第56図 石組溝10出土遺物実測図(1/4)



第57図 堀A出土遺物実測図(1/4)

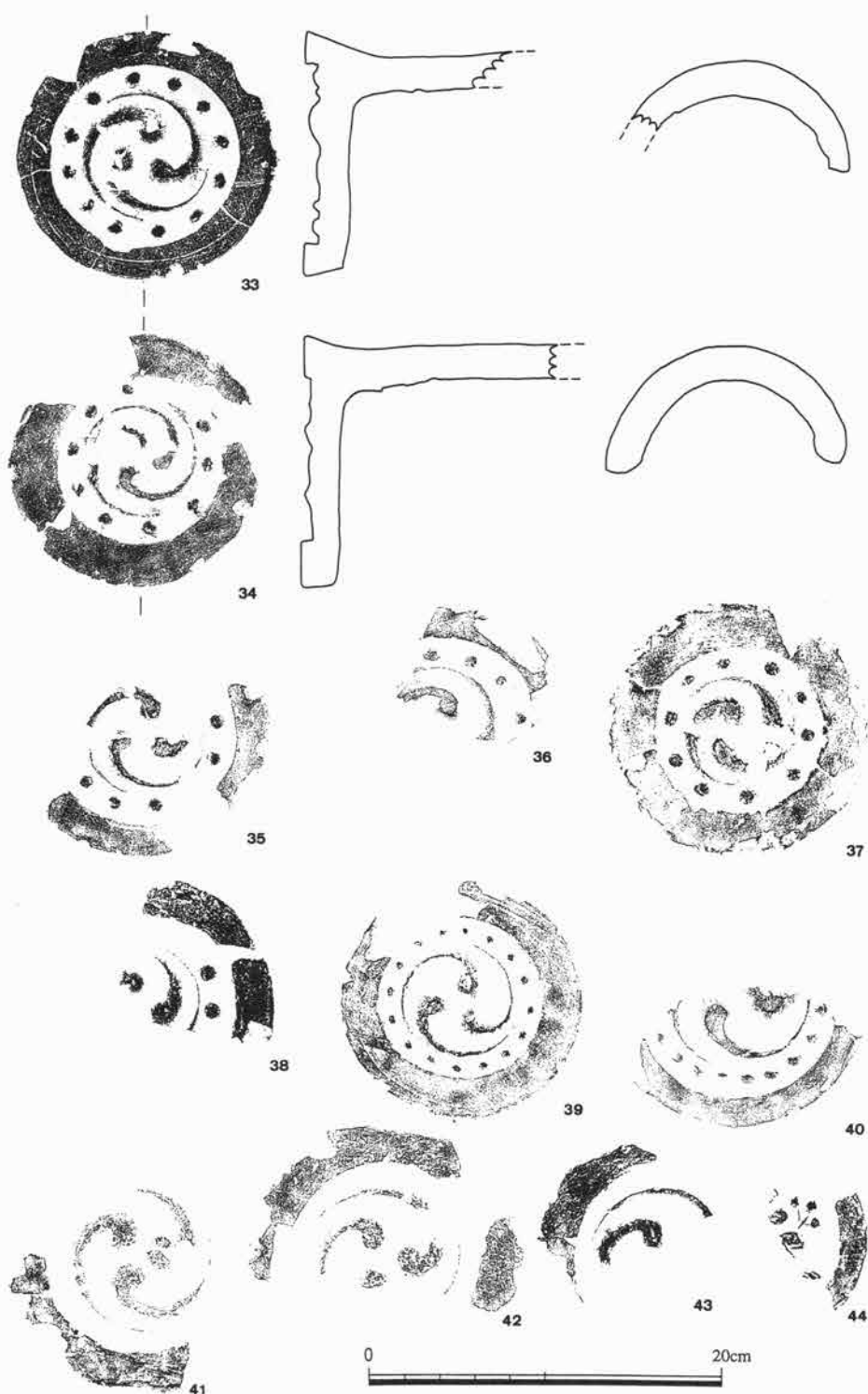
がされている。口縁端部にも茶褐色の圈線が廻らされている。27は、志野焼盤である。灰青色の絵付けに乳白色の志野釉が掛けられている。28は、華南三彩盤である。口縁部には稜花に沿った圈線と花文が陰刻されている。

29～32は、堀Aから出土した。29は、土師器皿である。口縁端部が肥厚した16世紀末のタイプである。30は、中国製染付皿である。焼成時に2枚の皿が釉着したもので、このままの状態で購入されたものである。上の皿は見込みに「壽」の字が書かれているが、下の皿は2条の圈線が廻らされているのみで、見込みは輪状に釉が削り取られて、直接重ね焼きで焼成されている。31は、白磁碗である。見込みに4か所の砂目痕があり、朝鮮王朝陶磁と思われる。目痕部分には付着した砂を研磨した痕跡が認められる。32は、備前焼播り鉢である。同一個体と思われる接合しない破片によれば、播り目の櫛描きは10条単位である。

## ②金箔瓦

33～52は、北地区第一遺構面の土坑62から出土した金箔瓦である。この土坑は瓦と磔で埋められており、出土した瓦も小さく割れたものが多い。33～43は、左巻きの巴文軒丸瓦である。33は、外縁部と巴文に金箔が貼られているが、珠文には貼られていない。金箔は、極めてよく残っている。丸瓦部内面の切り離し痕跡はコビキBである。丸瓦部外面にはタテ方向のヘラミガキが施されている。34は、33に比べて巴文が扁平で、珠文が10個と少ない。33と同様に外縁部と巴文に金箔が貼られている。丸瓦部内面の切り離し痕跡はコビキBである。丸瓦部外面にはタテ方向のヘラミガキが施されているが、33と比べて粗く、ヘラミガキが施されていない面積の方が大きい。35・36は33と、37・38は34とそれぞれ同範で、金箔を貼る部位、調整技法も共通している。39は、小さな珠文が16個配されている。外縁部と巴文に金箔が貼られている。珠文の一部に金箔が見られるが、意図的に貼られた



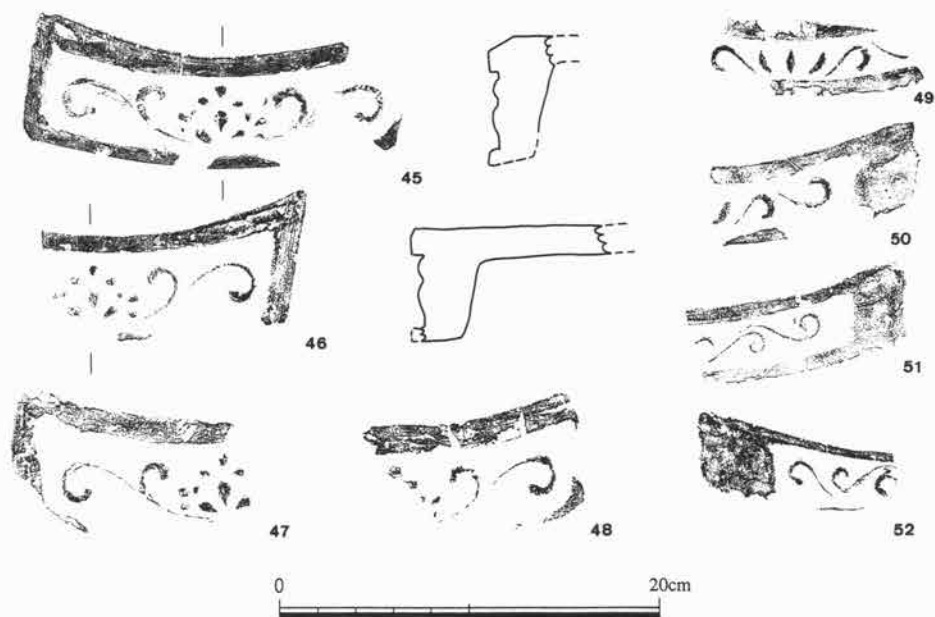


第58図 土坑62出土金箔瓦実測図・拓影 1 (1/4)

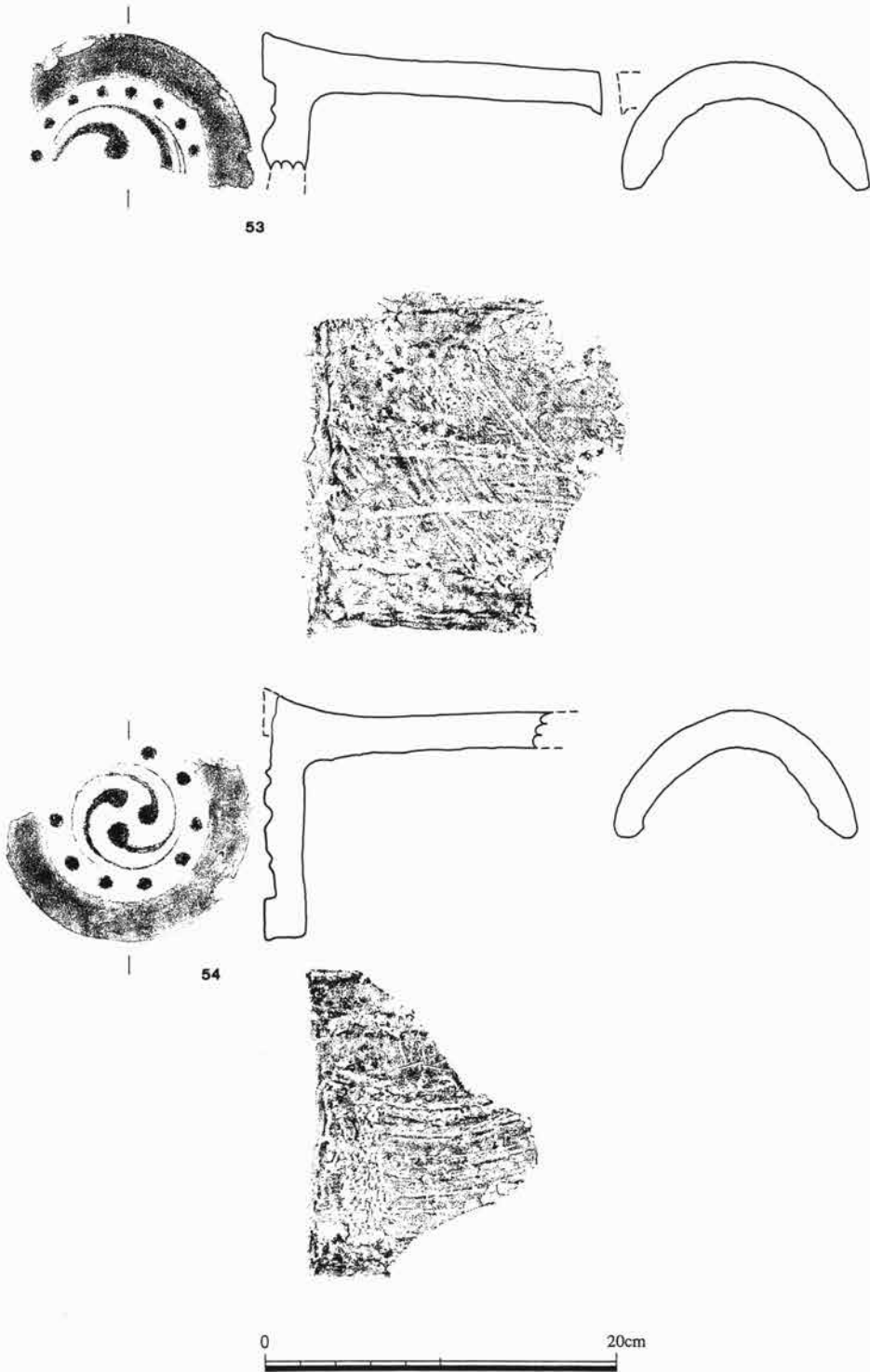
ものではなく、巴文に金箔を貼ったときに付着したものと思われる。40は、珠文が密に配されたもので、外縁部と巴文に金箔が貼られている。41～43は同範で、珠文帯を持たないものである。断面の器壁に近い部分のみが灰色で、中心部は黒色となる焼成状態も共通している。44は、五三桐文の軒丸瓦である。桐文は写実性を失っている。金箔の付着が認められず、あるいは金箔瓦でないかもしれない。

45～52は、軒平瓦である。45～48は、同範の軒平瓦で、桐花状の中心飾りに2反転する唐草の脇飾りを持つ。瓦当幅に対し顎が大きく、主要な建物に葺かれていたと考えられる。49・50は同範で、3葉を中心飾りとし2反転する唐草の脇飾りを持つ。51は、2反転する唐草を持ち、中心飾りは3葉と思われる。45～51は、いずれも外縁部の左右の上隅を除く凸部に金箔が貼られている。52は、3反転する唐草を持つ。脇区には金箔が貼られていない。

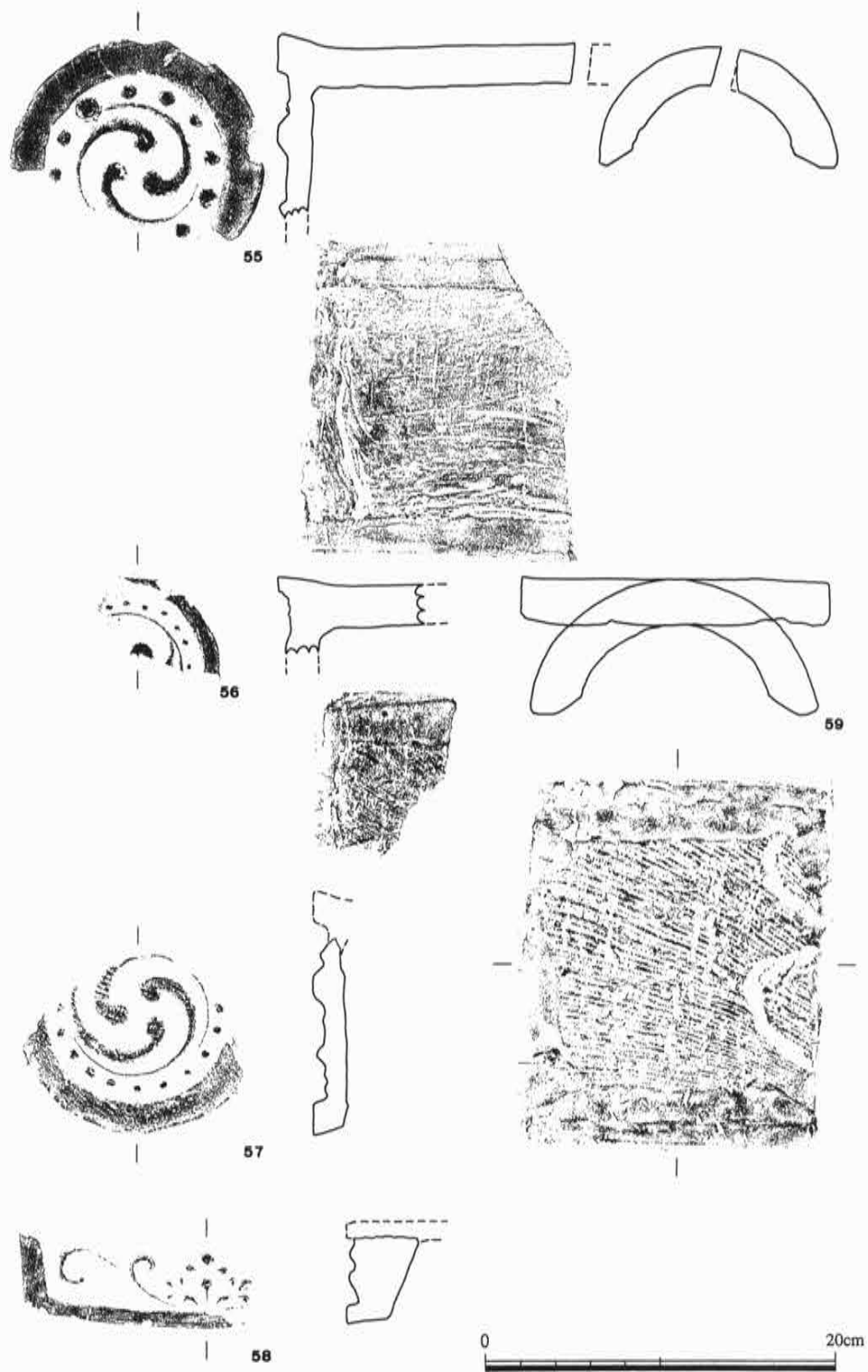
53～59は、北地区の黒色粘土層から出土した。大きな石などとともに溝50Bの肩部付近に放り込まれたような状況で出土したため、大きな破片が多い。53～56は、左巻きの巴文軒丸瓦である。外縁部、珠文、巴文に金箔が貼られている。53の丸瓦部内面に見られる切り離し痕跡はコビキAである。丸瓦部外面にはタテ方向のヘラミガキが密に施されている。54は、53に比べて範が浅く、巴文頂部は扁平である。珠文の金箔は省略され、丸瓦部の切り離し痕跡はコビキBである。これらは、いずれも53に比べて後出する要素である。55は、土坑62出土の33などと同範で、調整技法なども共通している。56は、小振りの軒丸瓦であ



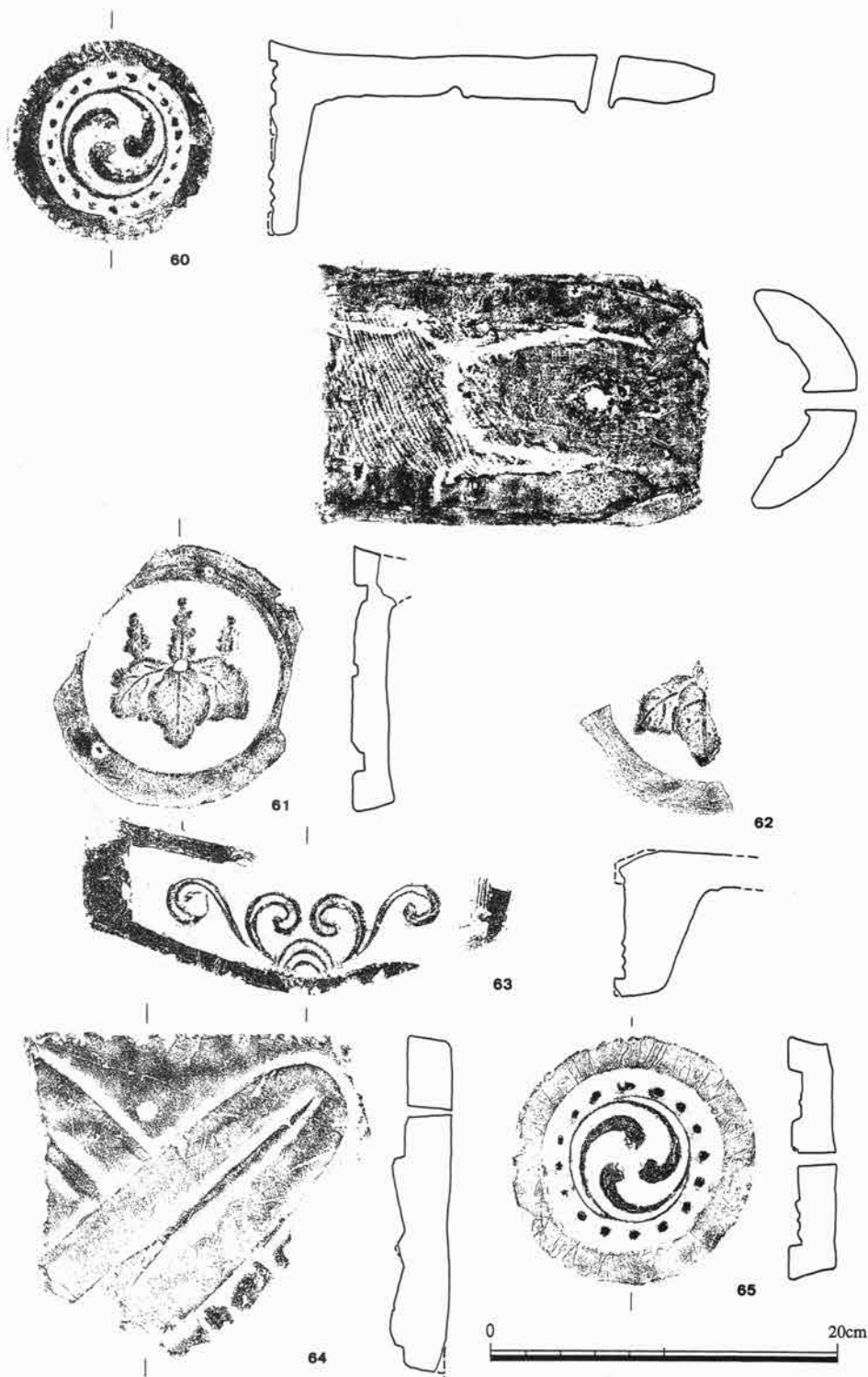
第59図 土坑62出土金箔瓦実測図・拓影2 (1/4)



第60図 黑色粘土層出土金箔瓦実測図・拓影 1 (1/4)



第61図 黑色粘土層出土金箔瓦実測図・拓影2(1/4)



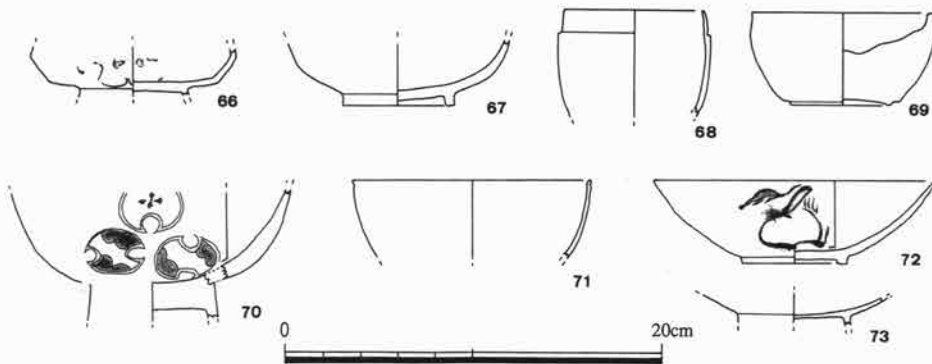
第62図 金箔瓦実測図・拓影(1/4)

る。外縁部と巴文に金箔が貼られている。丸瓦の切り離し痕跡はコビキAである。57は、右巻きの巴文軒丸瓦である。ここで出土した軒丸瓦では唯一の右巻きの巴文を持つものである。外縁部、珠文、巴文に金箔が貼られているが、珠文に四角い金箔を貼るなど、雑な貼り方をしている。58は、軒平瓦である。土坑62出土の45～48と同範である。59は、輪違い瓦である。図示した左側端面に金箔が貼られている。切り離し痕跡はコビキAである。このほか、金箔が貼られていない方の端がややすぼまった輪違い瓦も出土している。これは、注1文献に報告されているもの(P.4第2図8)と同形同大である。

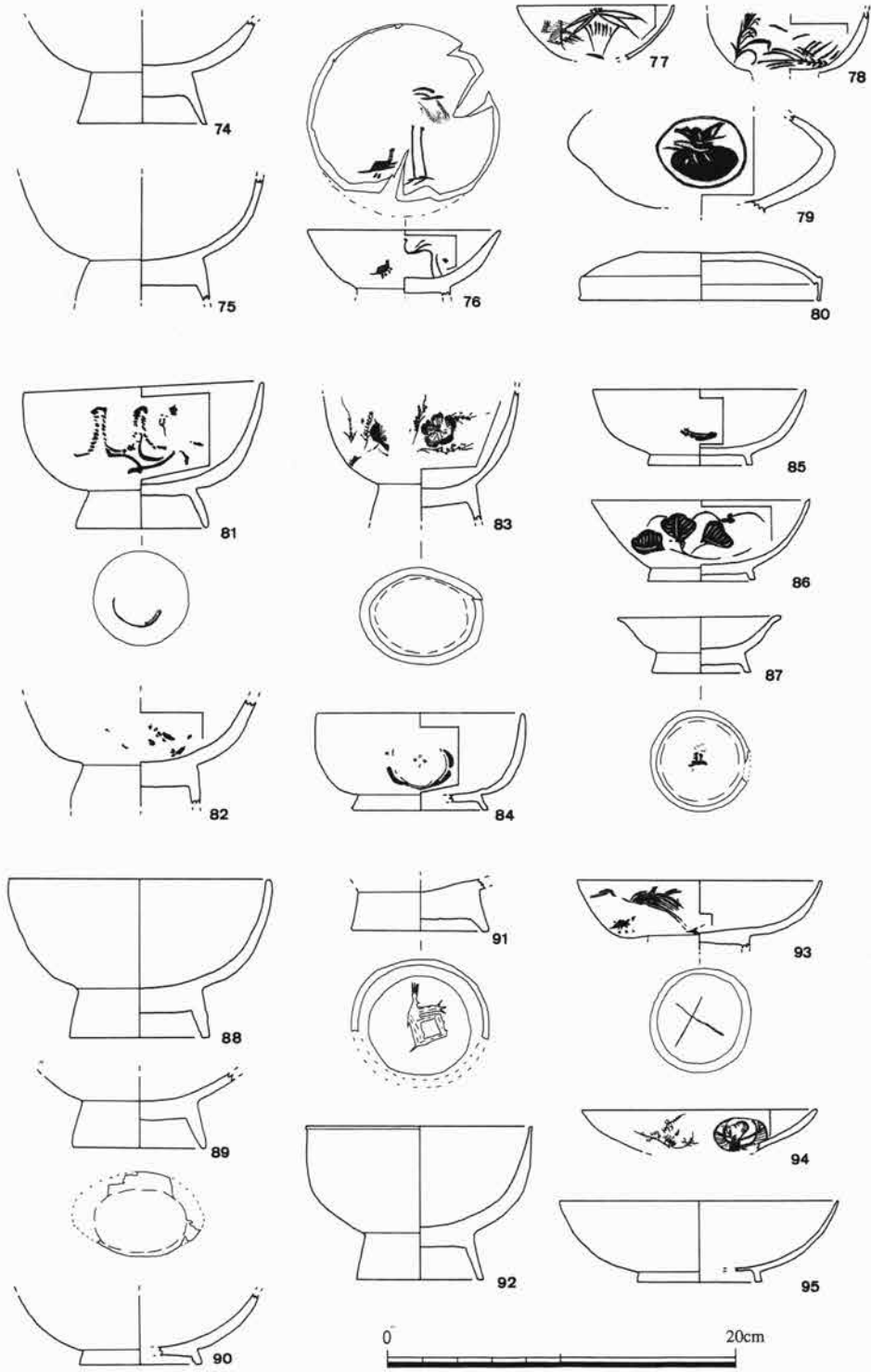
60～65は、その他の遺構などから出土した金箔瓦である。60は、完形で出土した小振りの軒丸瓦である。溝50から出土した。巴文の尾はつながって圏線状になっている。丸瓦内面に見られる切り離し痕跡はコビキAである。外縁部と巴文に金箔がわずかに残っている。61は五七桐文の軒丸瓦である。南地区土坑565から出土した。瓦当中心部に小さな円形の窪みがあるが貫通していない。62は、61と同文の軒丸瓦である。63は、三重半円形の中心飾りに2反転するレリーフ状の唐草の脇飾りを配した軒平瓦である。瓦当面の中央部の幅が両端よりも大きい。伏見城で類例が見られる。64は「違い鷹羽文」の飾り瓦である。石組溝10から出土した。四か所に釘穴が開けられている。金箔の痕跡は見られないが、金箔が貼られていた可能性も考えられる。65は、巴文の垂木先瓦である。中央に直径0.8cmの穴が開けられている。金箔は、外縁部・珠文・巴文に貼られている。裏面は特に調整を施さず、指押さえの凹凸が残る。南地区の第1面から第2面への掘り下げ中に出土した。

### ③漆器

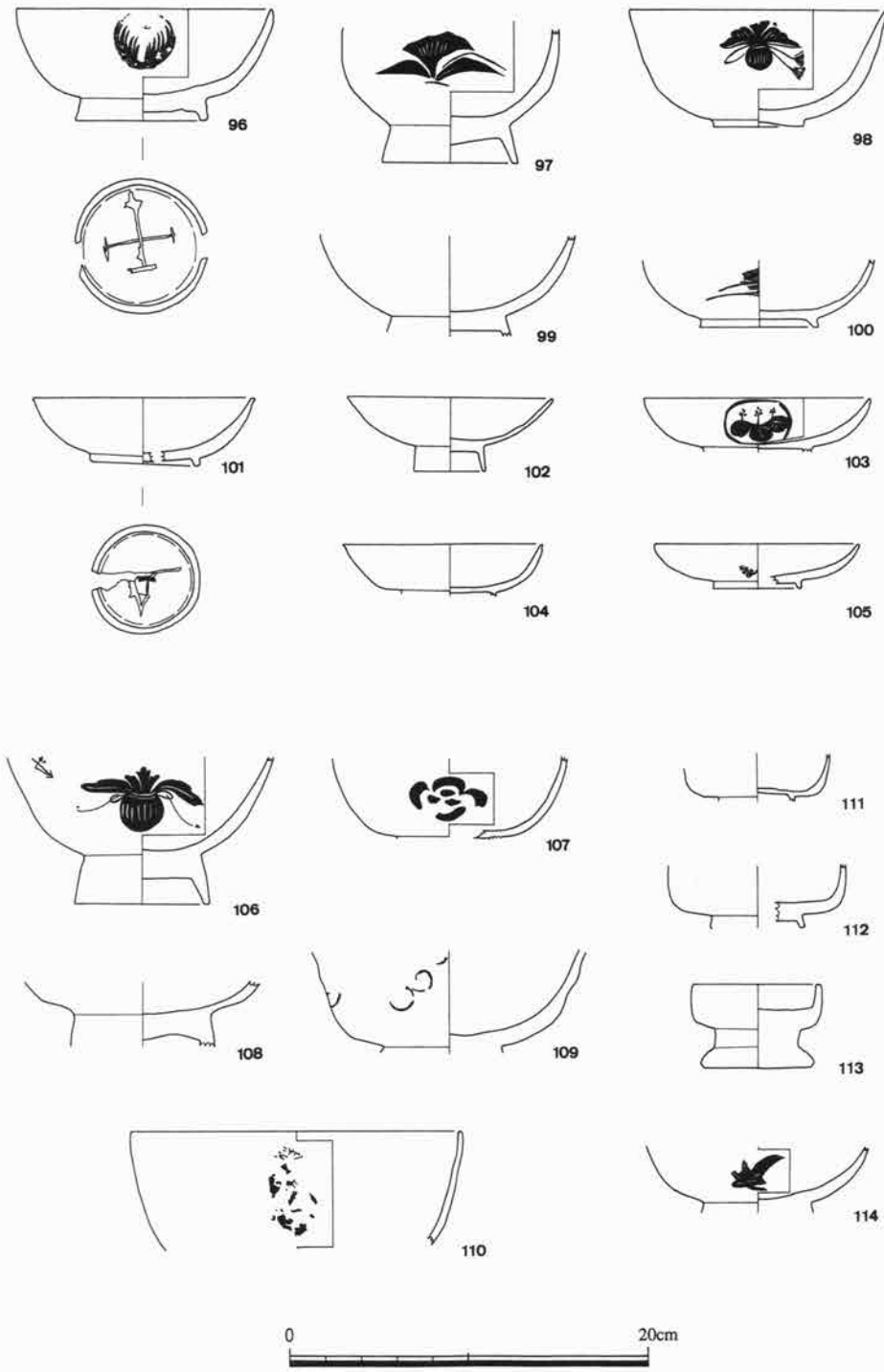
66～73は、第1面の遺構に伴う漆器である。66～69は、溝50から出土した。66は、内外面ともに朱漆が塗られた容器である。外面には文様が描かれているが、何が描かれている



第63図 漆器碗他実測図1 (1/4)

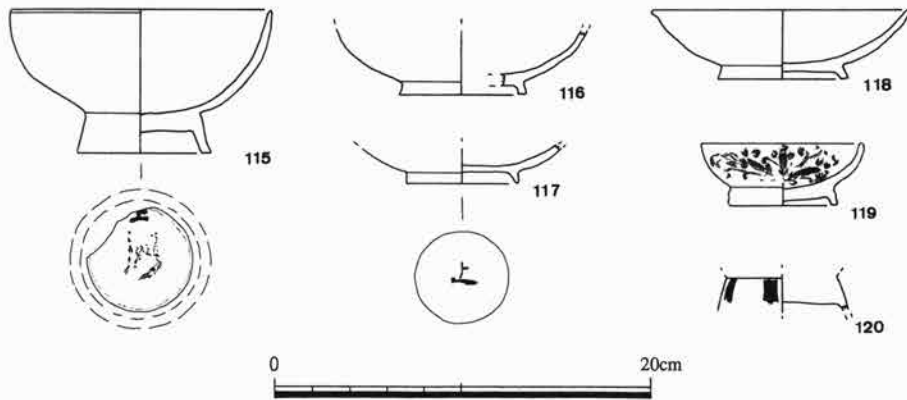


第64図 漆器碗他実測図2 (1/4)



第65図 漆器碗他実測図3 (1/4)





第66図 漆器碗他実測図4 (1/4)

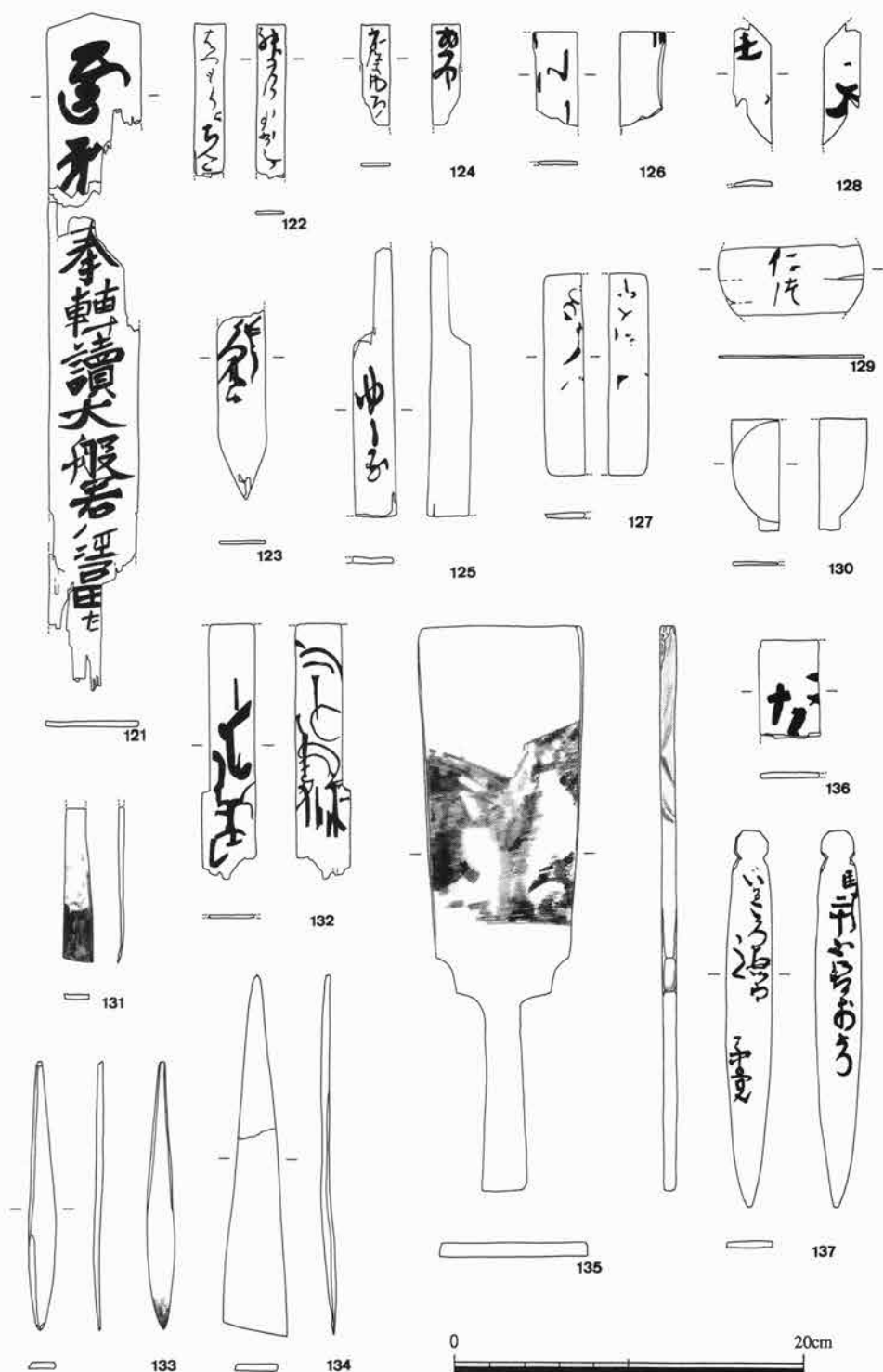
かは不明である。67は、無文の碗である。内面は朱漆、外面は黒漆が塗られている。68は、内外面に黒漆が塗られた容器である。口縁部外面に段を削り出し印籠蓋を被せるようになっている。全体に薄く削られ、繊細な作りである。69は、木地碗である。内面は、浅く削ったのみで底部が非常に分厚くなっている。外底面をわずかに削りだして低い高台を作っている。70は、文様が描かれた碗である。内外面ともに朱漆が塗られている。71は、内面に朱漆、外面に黒漆が塗られた碗である。72は、外面に文様が描かれた碗である。低い高台から大きく広がる体部を持つ。内面は朱漆、外面は黒漆である。土坑152から出土した。73は、内外面ともに朱漆が塗られた皿である。

74～94は、第2面の遺構に伴う漆器である。74～80は、土坑557から出土した。74・75は、無文の深碗である。74は内面が朱漆で、外面が黒漆、75は内外面ともに黒漆である。76は、鶴亀の文様が描かれた碗である。内外面とも黒漆。77・78は、草文が描かれた碗である。77は内外面ともに朱漆、78は内面が朱漆で外面は黒漆である。79は、口縁部と底部が欠損しているため全体の形状はわからないが、口のすぼまる容器である。胴部の3か所に巾着文様を描く。内外面とも黒漆を塗っている。80は、内外面ともに黒漆が塗られた蓋である。81～87は、土坑554から出土した。81・82・83は、高台を高く作った深碗である。83は、外面に梅文様が描かれた碗である。高台は楕円形を呈している。内外面とも黒漆が塗られている。84は、木瓜文が描かれた碗である。85も文様が不明確であるが木瓜文と思われる。86は、葵文様が描かれた浅い碗である。87は、無文の小碗である。底部は肉厚で、口縁部は外反する。底部に文字様のものが描かれているが判読できない。81・82・84・85・86は、内面が朱漆で外面は黒漆である。88～91は、土坑537から出土した。88は、内外面とも黒漆が塗られた無文の深碗である。89は、碗の底部である。高台は、楕円形を呈

する。内面は朱漆、外面は黒漆である。90は、低い輪高台を持った椀である。内面は朱漆、外面は黒漆が塗られている。91は、椀の底部である。高台の削り出しは浅く、底部が肉厚になっている。高台内に刻印がみられる。外面は黒漆が塗られている。内面は、漆膜が剝離している。92は、無文の深椀である。内外面ともに朱漆を塗っている。土坑598から出土した。93は、鶴亀の文様が描かれた皿である。高台内に「十」の刻印がある。内外面ともに黒漆が塗られている。土坑528から出土した。94は、鶴と松枝状の文様が描かれた皿もしくは蓋である。内外面ともに黒漆を塗っている。土坑564から出土した。95は、無文の浅い皿である。高台は低く削り出されている。内外面ともに朱漆を塗っている。

第65図に示した漆器は、すべて堀Aが人為的に埋められた後、湿地状になっていたところに堆積したと考えられる黒色粘土層から出土したものである。したがって、埋没の時期は16世紀末から17世紀初頭に限定される。96～100は、椀である。96は、内外面ともに黒漆を塗り、2か所に鳥が羽を翻したような文様が朱漆で描かれている。高台内には、十字架状の線刻が施されている。これはポテント十字といわれる十字架を意識して刻まれたものと見られる。同じ文様は、長崎市二十六聖人記念館所蔵の大傘に描かれた盾をはじめ、同時代のキリスト教関係の資料に多く描かれているもので、これもキリスト教の影響を示す遺物と考えられる。しかし、これが、所有者の信仰を表したものであるかどうかは断定できない。97・98・100は、内面に朱漆、外面に黒漆が塗られ、外面に朱漆で文様が描かれている。99は、内外面とも朱漆である。101～105は、皿である。101・102・104は、内外面ともに朱漆が塗られており、101の高台内には黒漆で「T」字状の文様が描かれている。103・105は、内面に朱漆、外面に黒漆が塗られているが、105の高台内は朱漆が塗られている。103には3か所に朱漆で桐の文様が描かれている。106～110は、椀である。106は内外面とも朱漆、107・109・110は内面に朱漆、外面に黒漆、108は内外面ともに黒漆が塗られている。106には、3か所に袋の文様が黒漆で描かれている。107には、木瓜文が黒漆で描かれている。111・112は、筒形の椀である。111の外面は朱漆が塗られているが、内面は漆が剝離している。112は、内外面とも茶褐色の漆が塗られている。113は、木地の仏飯器である。114は、皿である。内面に朱漆、外面に黒漆が塗られている。

115～120は、遺構に伴わない漆器である。115は、内外面に朱漆が塗られた椀である。高台内には「上」と黒漆で書かれている。116は、椀である。内外面ともに朱漆が塗られているが、高台内は黒漆が塗られている。117は、低い高台を持つ皿と思われる。内面は朱漆、外面は黒漆が塗られ、内面には115と同様に「上」と朱漆で書かれている。118は、無文の皿である。116と同様に、内外面ともに朱漆が塗られているが、高台内は黒漆が塗られている。119は、草花文様の描かれた小椀である。内面は朱漆、外面は黒漆が塗られ

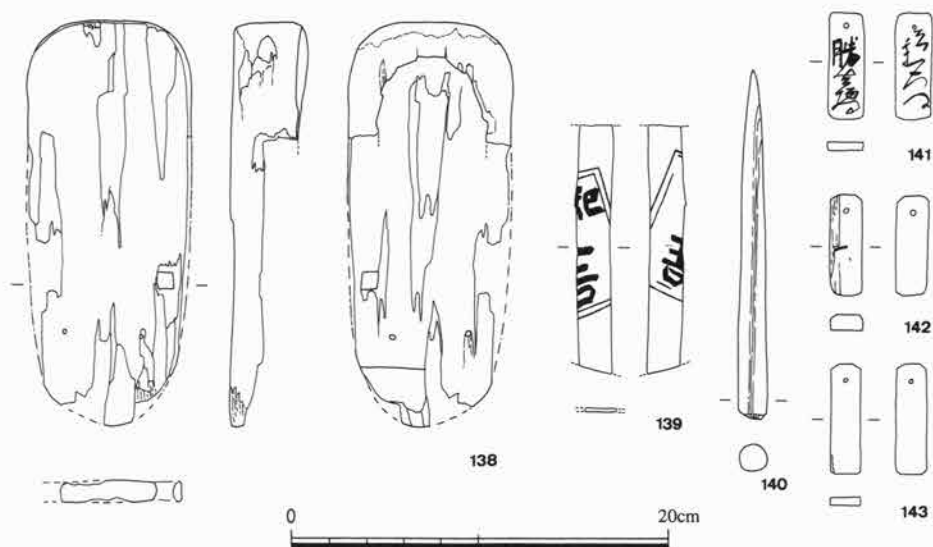


第67図 木製品実測図1 (1/4)

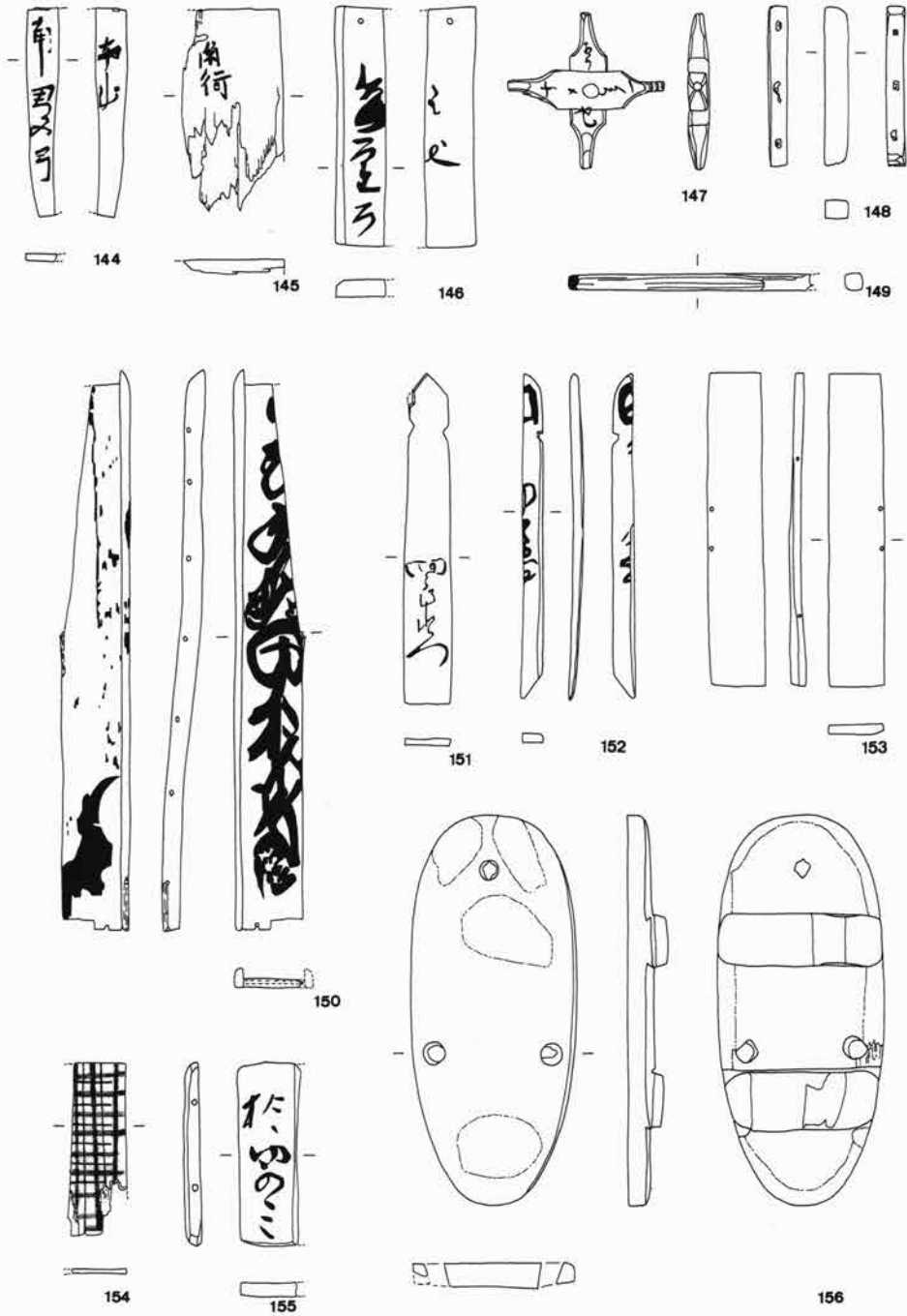
ている。120は、椀の高台部である。黒漆に朱漆でタテ方向の文様が描かれている。

#### ④木製品

121～143は、第1面の遺構に伴う木製品である。121～130は、溝50から出土した。121～129は、墨書のある薄い木片であるが、文字の判読できるものは121のみである。121は、剣頭形をした転読札であるが、下半は欠損している。片面に「○ 奉転読大般若経富貴□」と書かれている。富貴を祈願したものである。123は、下端が尖っており、付け札状の形態をしているものと思われる。129は、小形の曲物の底板であると思われる。131～135は、土坑136から出土した。131・133・134は、漆塗り用のヘラである。131・133は、先端に漆が付着している。132は、墨書のある木片であるが、書かれているものが文字かどうかははっきりしない。135は、羽子板である。朱漆が塗られている。136・137は、土坑152から出土した。137は、完形の付け札であるが、内容を正確に判読することはできない。138は、下駄である。踵部分が非常にすり減っている。土坑148から出土した。139は、細い2重の四角形の中に文字が墨書されたもので、何かのマークであると思われる。両面に同じ物が書かれている。土坑147から出土した。140は、錐の柄である。錐の茎部分がわずかに残っている。石組溝10から出土した。141～143は、土坑406から出土した名札状の木片である。上部に穴が開けられ、綴じるか、釘に掛けるなどして用いられたものと思われる。141の表には「勝左衛門尉」と書かれている。裏には崩れた字体で「□左衛門尉」と書かれており、表と同じ名前が書かれていた可能性が高い。

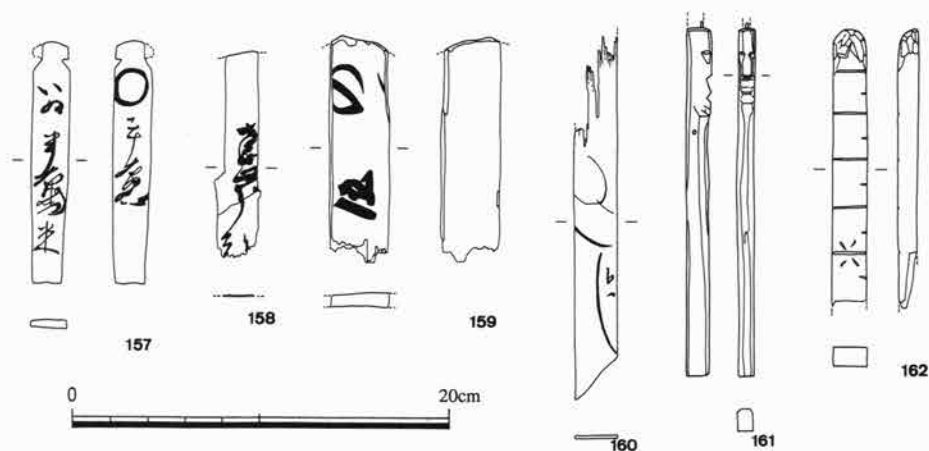


第68図 木製品実測図2 (1/4)



0 20cm

第69図 木製品実測図3 (1/4)



第70図 木製品実測図4 (1/4)

144～156は、第2面の遺構から出土した。144・145は、墨書のある木片である。145は、将棋の「角行」に似た字が板材に無造作に書かれたものである。「行」の偏とつくりの間には小さく「口」が書かれており、その意味は不明である。144は土坑564、145は土坑537から出土している。146は、土坑515から出土した札状の木製品である。ひとつの角を面取りしており、五角形の断面形を呈している。墨書の内容は判読できない。147は、糸巻きの横木である。同形同大のふたつの部品を組み合わせて作られている。ひとつの面に墨書が書かれているが、判読できない。148は、ふたつの長側面にそれぞれ三か所ずつのホゾ穴が開けられたもので、147とは異なる形の糸巻き具の部品ではないかと思われる。149は、断面形が一辺1cmの隅丸方形ないし直径1cmの円形を呈する棒状木製品である。欠損していないほうの端部には朱漆が付いている。147～149は、土坑528からまとまって出土している。150～156は、土坑557から出土した。150は、盆状の木製品の一部と考えられ、底板に側板が木釘で止められている。内底面に墨書が書かれているが、文字であるかどうか不明である。151・152は、付け札である。151は、一面の下部に「四郎衛門」と書かれている。152も151と似た形であるが、先端が尖っている。半分が欠損しているが、151と同じ名前の書かれていた可能性がある。153は、長側辺寄りの中央に2か所の穴が開けられ、側面には2か所の木釘穴が開けられている。154は、細い黒線と太い朱線で格子が描かれた木片である。155は、側面に2つの木釘穴が開けられた木製品の一部で、桶の底板であるかもしれない。最初の2文字が判読しにくい、「於ゆのミ」とでも書かれているのであろうか。156は、下駄である。

157～162は、黒色粘土層から出土した。157は、付け札である。表に「いぬ 半右衛門尉米」、裏面に「○ 半右衛門尉」と書かれている。戌の年に半右衛門尉が貢納した米に

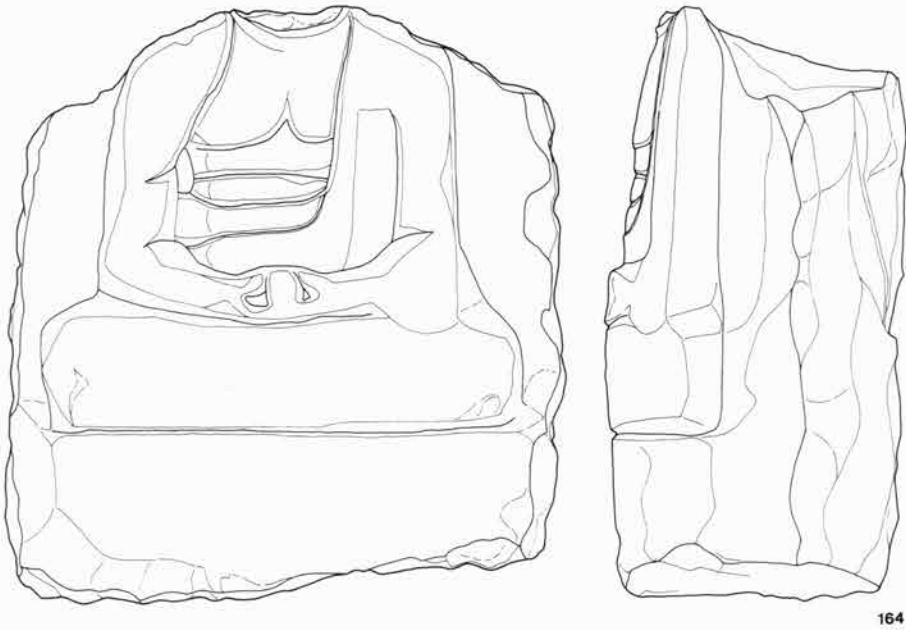
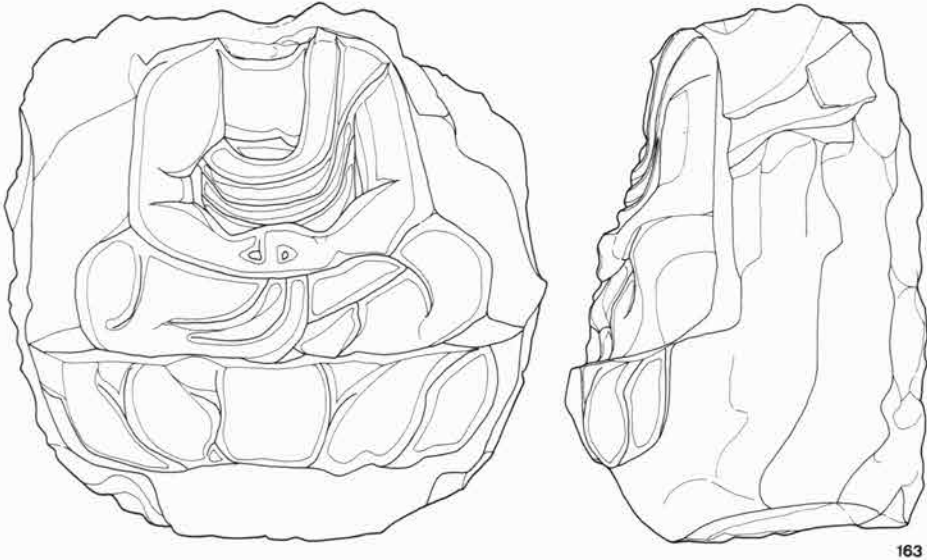
付けられていた荷札であろう。158～160は、墨書のある薄い木片である。いずれも内容は判読できない。161は、人形である。断面長方形の棒状のものに目・鼻・口を彫り出し、前面の下部は面取りを施している。側面に小さな穴が1か所開けられている。162は、物差しである。先端は細かく削って丸くしている。五番目の目盛りに「×」状の印が入れている。一目盛りの長さは2.2～2.6cmで、その間に小さな補助目盛りが一つずつ刻まれている。五目盛りで12.0cmになっている。

### ⑤石仏

南地区の堀Aの人為的な埋土から出土した石仏は、阿弥陀如来が20個体、地藏菩薩・二尊仏が各1個体の合計22個体である。他に、板碑・墓碑・五輪塔の水輪(註2)が各1個体出土している。石材は、すべて花崗岩で北白川産ということである。163～165は、阿弥陀如来座像である。163・164は、首から上が欠損している。163は残存高56cm・幅56cm・厚さ38cmを、164は残存高63cm・幅59cm・厚さ31cmを測る。163は、164では線描きになっている衣

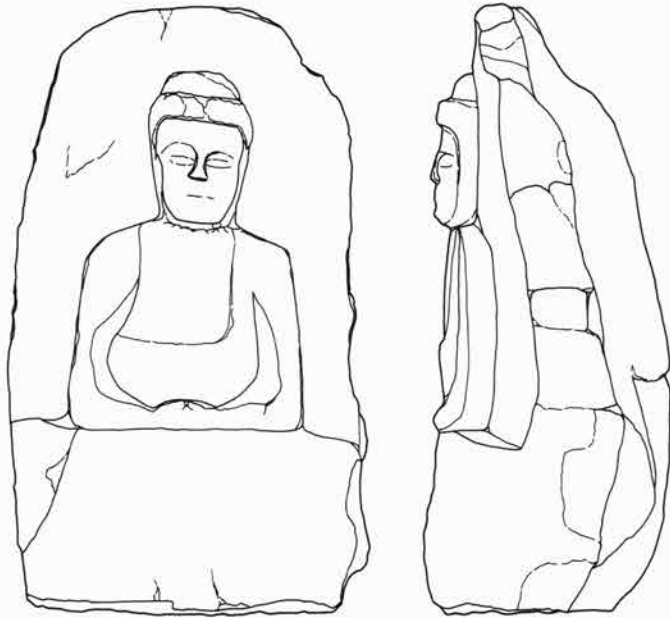
付表4 石仏計測表

No	種類	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
163	阿弥陀如来	56	56	38	
164	阿弥陀如来	63	59	31	
165	阿弥陀如来	64	38	25	
166	二尊仏	71	44	22	
167	地藏菩薩	76	50	28	
168	阿弥陀如来	49	68	24	腹部より上方欠損
169	阿弥陀如来	69	47	22	ほぼ完形
170	阿弥陀如来	63	39	17	ほぼ完形
171	阿弥陀如来	70	44	26	正面左側に矢穴跡あり、ほぼ完形
172	阿弥陀如来	69	48	22	左側背部に矢穴状の痕跡あり、ほぼ完形
173	阿弥陀如来	67	42	25	右側背部に矢穴跡あり、ほぼ完形
174	阿弥陀如来	62	43	20	正面右側・背部左側に矢穴跡あり、左上部欠損
175	阿弥陀如来	66	37	19	ほぼ完形
176	阿弥陀如来	68	40	24	左側背部矢穴状の痕跡あり、ほぼ完形
177	阿弥陀如来	57	46	18	上部欠損
178	阿弥陀如来	41	34	15	上部欠損、台座欠損
179	阿弥陀如来	53	35	18	上部欠損、左側背部に矢穴状の痕跡あり
180	阿弥陀如来	67	47	20	正面左側矢穴状の痕跡あり、ほぼ完形
181	阿弥陀如来	70	43	20	上部欠損
182	阿弥陀如来	74	46	19	右側縁欠損
183	阿弥陀如来	75	43	16	顔部欠損、右側面矢穴状痕跡あり
184	阿弥陀如来	49	38	18	頭部・右側上半身欠損
185	墓碑	43	21	14	
186	板碑	37	20	14	
187	五輪塔水輪	23			



第71図 石仏実測図1 (1/8)





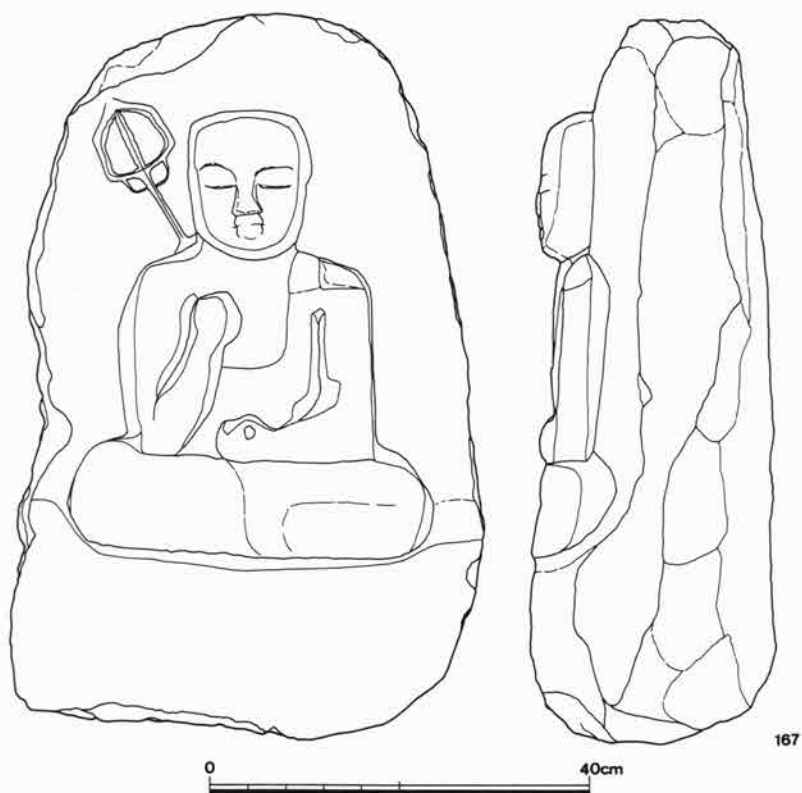
165



166

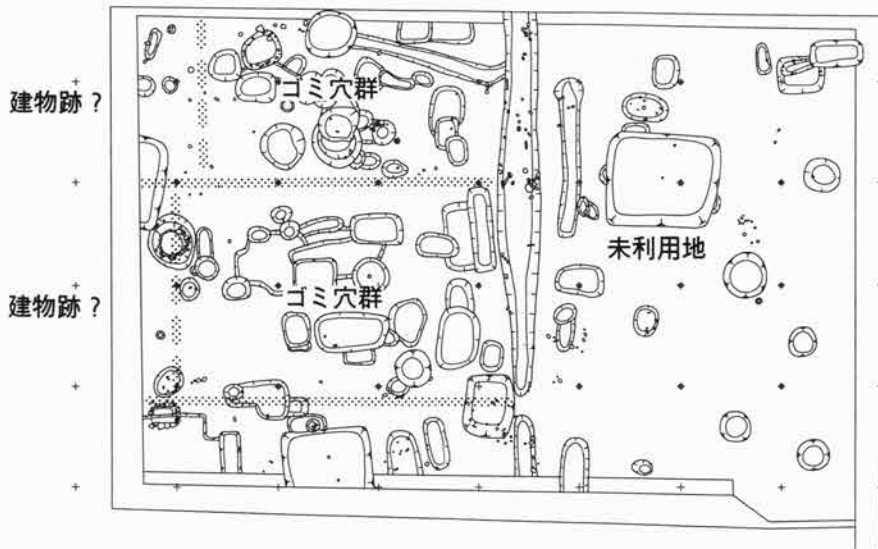


第72図 石仏実測図2 (1/8)



第73図 石仏実測図3(1/8)

紋の襷の表現が立体的で、164では省略されている蓮華座が表現されているなどいいいな作りである。蓮華座の表現されたものはこのほかに1個体出土している(168)。これも幅68cm・厚さ24cmを測る大振のもので、胴部から上が欠損しており、残存高は49cmを測る。165は、高さ64cm・幅38cm・厚さ25cmを測る完形の阿弥陀如来座像である。腰部以下の表現は省略されている。また、右側面には、製作時に石材を粗割りする際に開けられた矢穴の痕跡が調整されないまま残っている。出土した22個体の阿弥陀如来座像のうち、17個体がほぼこれに近い大きさである。そのうち、ほぼ完形のものが9個体、光背の一部が欠損しているものが6個体、阿弥陀仏の顔のみを欠損しているものが1個体、体部以下の約半分の破片が1個体ある。阿弥陀仏の表現を見ると、側面観で頭部が体部よりもかなり突出して立体的に表現されたものから、頭部と体部の厚さがほとんど変わらない平板な表現のものまであり、製作時期にはある程度の時期幅があるものと考えられるが、概ね室町時代のものと思われる。166は、二尊仏である。屋形の中に2体の座像が浮き彫りにされている。高さ71cm・幅44cm・厚さ22cmを測る。167は、地藏菩薩である。ほぼ完形で、高さ76cm・幅50cm・厚さ28cmを測る。錫杖は陰刻で表現されている。



第74図 北地区第1面における土地利用(1/300)

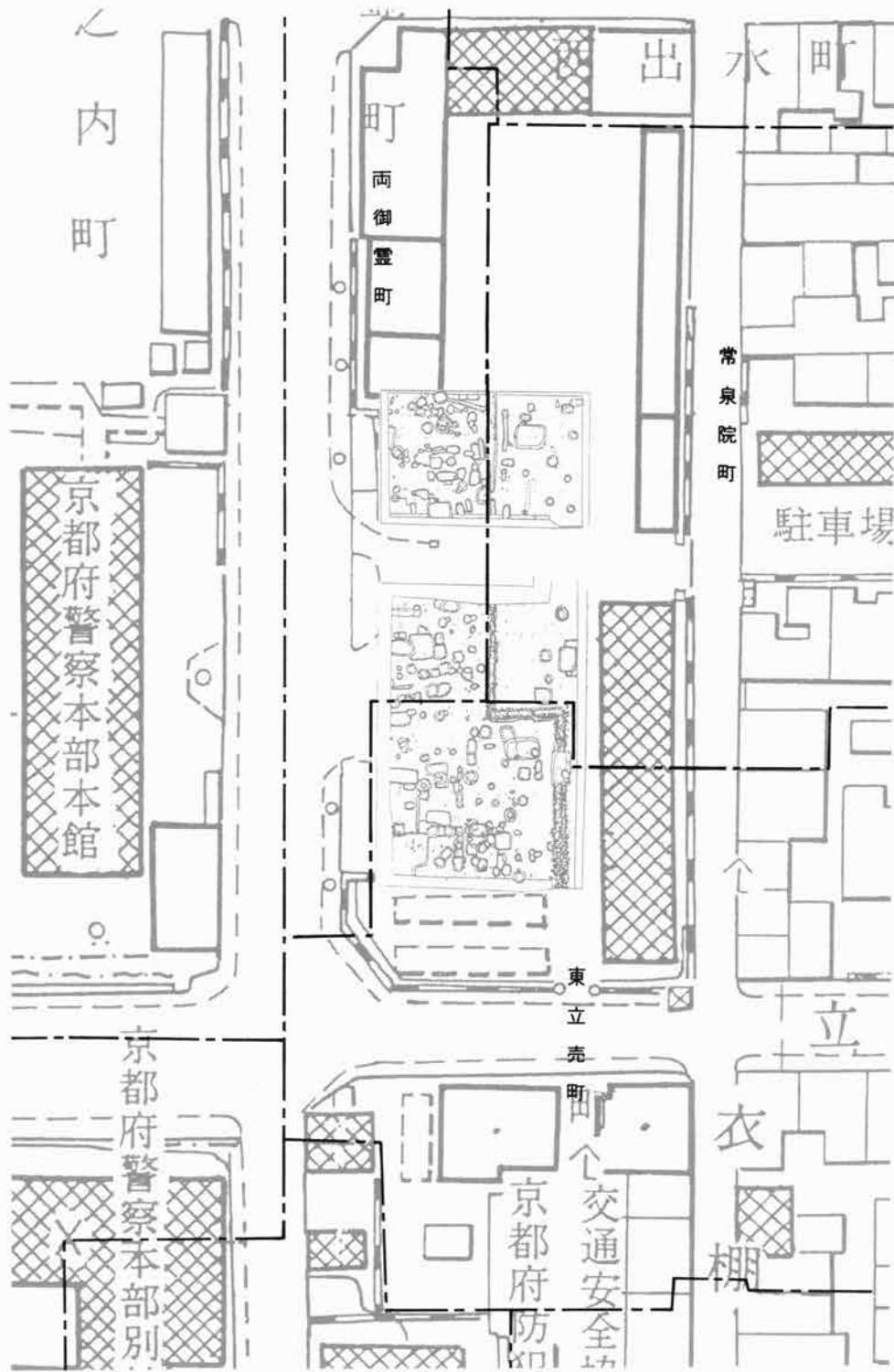
#### 4. ま と め

江戸時代初期、調査地は町屋であったと思われるが、町屋の建物の可能性のある遺構は建物跡1のみである。しかし、第1面の遺構分布から、当該期の景観を想定することが可能である。

まず、北地区の遺構分布を南北方向に見ると、調査区中央を南北に貫く溝50を境として東側には遺構が少なく、西側に遺構が集中している。特に、溝50の西約10mの範囲内は遺構が密集している。この遺構分布の違う各部分は、西から、①新町通りに面した町屋の建物にあたる部分(建物遺構は検出されていないが、建物があったために穴が掘られない)、②生活などで出た廃棄物を処理するための土坑などが集中的に掘られる裏庭にあたる部分、③町屋の裏を流れる溝、④町屋の敷地の裏の未利用地と理解することができる。

次に、遺構分布を東西方向に見ると、Bライン上とDライン上で狭い範囲ながら、遺構の空白部分がある。この部分は、町屋の敷地の境界を示していると考えられ、この調査区内に、2軒分の町屋の景観が復原できる。南地区でも北地区ほど明瞭ではないものの、Kラインや、Pライン付近に東西に遺構の存在しない狭い帯状の部分が認められ、これも屋敷地の境界線である可能性がある。

また、溝50及び石組溝10は、常泉院町・両御霊町・東立売町を分ける境界線であり、1949年に京都市警察の庁舎が建設されたときに地表下約0.5mで確認され、旧二条城の石垣の可能性があると報告されているものの最下部にあたるものと思われる。今回の調査で



第75図 調査区と町境界との位置関係図(1/1,000)

も1949年に破壊を免れた部分で、この石垣が第1遺構面から地表下約0.5mまで積まれていた状況を確認することができたが、土層などの観察によれば、この石組溝は織田信長の時代にはさかのぼらず、江戸時代初期に建設されたもので、その後の周辺の盛り土整地に伴って石組が積み足された結果、最終的に高さ1.5mを越える石組が残されたものであることが判明した。溝50及び石組溝10と常泉院町と両御霊町・東立売町の現在の境界は、Nライン以北までは完全に一致している。すなわち、調査地北端からLライン付近の屈曲部までは溝の西肩・Lラインに沿って東西に走る部分では溝の北肩、さらに屈曲して南北に走る部分では溝の東肩が町の境界線に一致している。石組溝10は、調査地南端までこのまま真っすぐ続くのに対して、現在の町の境界線はNラインとOラインの途中で東へ曲がり、境界線よりも北が常泉院町、南が東立売町となっている。このことは周辺の町の境界線が江戸時代初期以来ほぼそのまま維持されてきたことを示している。

桃山時代の遺構としては、堀Aが目目される。堀Aの人為的な埋土には唐津や志野は含まれず、最上層の黒色粘土層から金箔瓦が出土していることから、埋没時期は16世紀末と考えられる。掘削時期を特定することは難しいが、堀Aが切っている堀Bの埋没年代から考えて16世紀後半であることは間違いない。調査地の位置からみて、旧二条城の堀である可能性も考えられるが、旧二条城は総石垣であったとされ、これまでに発掘調査で確認されている堀もすべて石垣を持っていることから、この可能性は低いと思われる。調査地は、旧二条城の北西に当たり、旧二条城廃城後は、荒廃するに任せられていたとされている。その後、この付近が再開発されるのは、秀吉による聚楽第建設時もしくは京都改造時であろうと思われる。堀Aの埋没が京都改造に伴うものであるとすれば、掘削は聚楽第建設時と考えられ、埋没が聚楽第破却に伴うものとすれば、掘削は聚楽第建設時もしくは京都改造時と考えられるが、堀Aがこのうちいずれの時期に掘削されたかを定めることは現状では困難である。調査地では、金箔瓦がまとまって出土し、また、金箔は認められないものの浅野長政の定文である「違い鷹羽文」の飾り瓦も出土している。いずれにしても、この付近に大名屋敷があったことは間違いなく、堀Aは聚楽第城下町の名古屋敷などに関連する堀ではないかと考えられるのである。

次に、堀Aから多量に出土した石仏について考えたい。前述のように堀Aそのものが旧二条城に関連する可能性は低い、出土した石仏は旧二条城に用いられていたものである可能性が極めて高い。織田信長による旧二条城(足利義昭の居館)の築造のようすは、『耶蘇会士日本通信』の「永禄12(1569)年6月1日付フロイス書翰」に「これに用ふる石なきを以て多数の石像を倒し、頸に縄を付けて工事場に引かしめ(中略)石の祭壇及びフォトケス即ち偶像を地上に倒してこれを破壊して車に積みて運搬し」と書かれている。石仏の中

に頸や胴体の部分で打ち割られたものがあることも記述と一致しており、出土した石仏は、この時に信長配下の武将が寺院から徴発してきたものと思われる。石仏には前述のように型式差が認められるものの、石材をはじめ共通点が多く、いろいろな場所から寄せ集められてきたものというよりも、もともと同じ寺院にあったものをまとめて徴発したのではないかという印象を受ける。地下鉄烏丸線の建設に伴う発掘調査で旧二条城関連と見られる東西の堀が発見されたときにも、石垣などに使われていた石仏が300体以上見つかっており、当時、相当な数の石仏がこの付近に集められていたことがわかっている。

また、旧二条城築城に際しては、細川氏の屋敷にあった藤戸石という庭石や、慈照寺（銀閣）の九山八海という庭石を運んだという記録がある。今回、石仏が出土した堀からも緑泥変岩の庭石が出土しており、これらも石仏と同じように寺院などから徴発してきたものであろう。

このように、今回出土した石仏は、旧二条城で石材として使用されていたものであると考えられる。旧二条城は、天正元(1573)年の室町幕府滅亡以後、御殿などが人々の掠奪の対象になるなどして荒廃し、これらの石仏も付近にうち棄てられていたものと思われる。その後、豊臣秀吉が聚楽第を築いて、天正地割りの施行、お土居の築造、京中屋敷替えの実施と、京都を聚楽第中心の近世の城下町に大きく改造していく過程で、石仏は廃棄物として堀に埋められたのである。

室町時代末の遺構では堀Bが目目される。条坊を無視して斜め方向に走る当該期の堀は、近年下京の各所で発見され、構えの堀であろうと考えられている<sup>(注3)</sup>。このような堀が上京と下京のちょうど中間で発見されたことは興味深い。

このように、今回の調査では中世末から近世初頭にかけて京都の町が大きく変容していったことを示す遺構が検出された。近世都市京都の成立について考えるうえで貴重な資料になるものと思われる。遺物についても、比較的遺存しにくい木質遺物などが良好な状態で出土しており、土器類に比べて量が少ない木質遺物の貴重な資料となった。

一方、中世末以前の遺構・遺物は極めて少ない。このことは、調査地が大きく削平されていることを物語っている。第2面で見られる地山のレベルは、当調査地から西北西に200m足らずの調査地点よりも1m程度低くなっている。この結果、調査地においては桃山時代以前の遺構面は存在せず、堀に上部を削られた井戸などがわずかに検出されたのみであった。桃山時代の土地の改変が大きかったことを示しているものと考えられる。

(森島康雄)

注1 宇佐晋一「京都市警察庁舎敷地遺跡調査報告」(『古代学研究』第2号 (財)古代学協会)

1950

注2 石仏については史迹美術同友会の中西 亨氏にさまざまなご教示を得た。

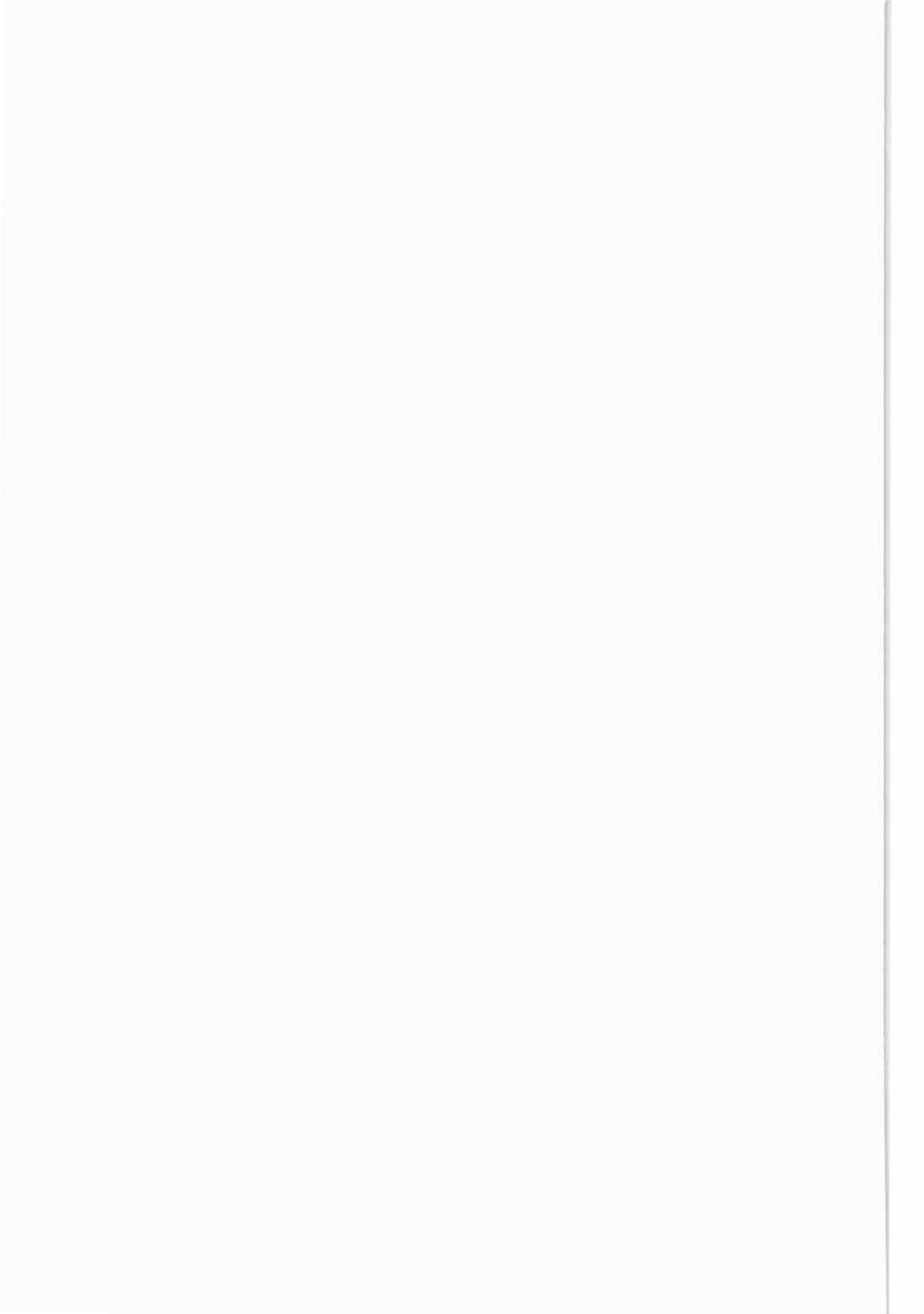
注3 辻 純一・平尾政幸「左京三条三坊」（『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所）1984、「洛央小学校の発掘調査－現地見学会資料－」（財）京都市埋蔵文化財研究所 1992

調査に際しては、多くの方々の参加を得た。以下に記して感謝する。

赤坂 希・岩佐聖子・上田いずみ・内山明子・江崎明子・岡 冬樹・小田栄子・木村朗子・河野幸代・小宮亮子・皿木 綾・田井丈士・田中美恵子・田中ゆかり・陳 敏・寺尾貴美子・富永英之・長友朋子・中前幸子・西川悦子・羽生夕紀子・波部 健・原 剛司・疋田季美枝・平松久和・福島美保・藤居祐子・藤澤地恵・前田暁宏・牧野みゆき・丸谷はま子・初山由紀・山口 均・山下敬子・山中朝子・山本由美子・由水ゆう子

版 圖





図版第1 ニゴレ遺跡

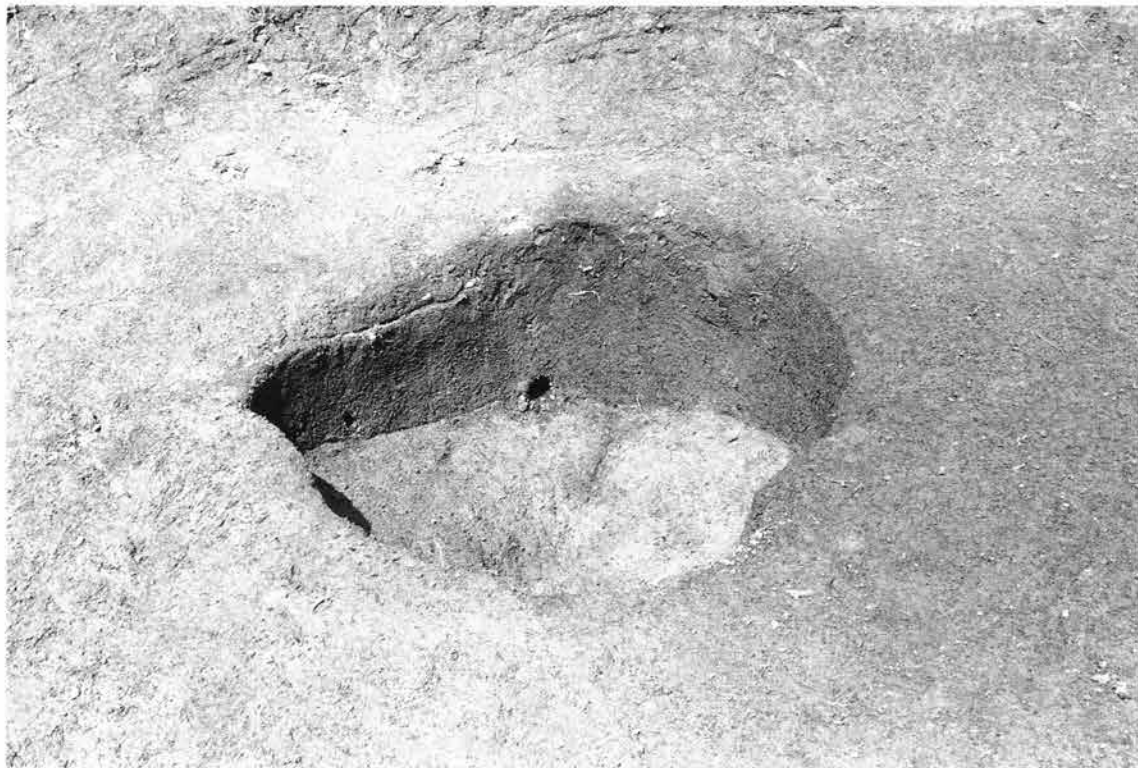


(1) ニゴレ遺跡遠景（東北東から）＝遠方は遠所遺跡群＝



(2) A拉張区・桐谷1・2号墳遠景（南から）

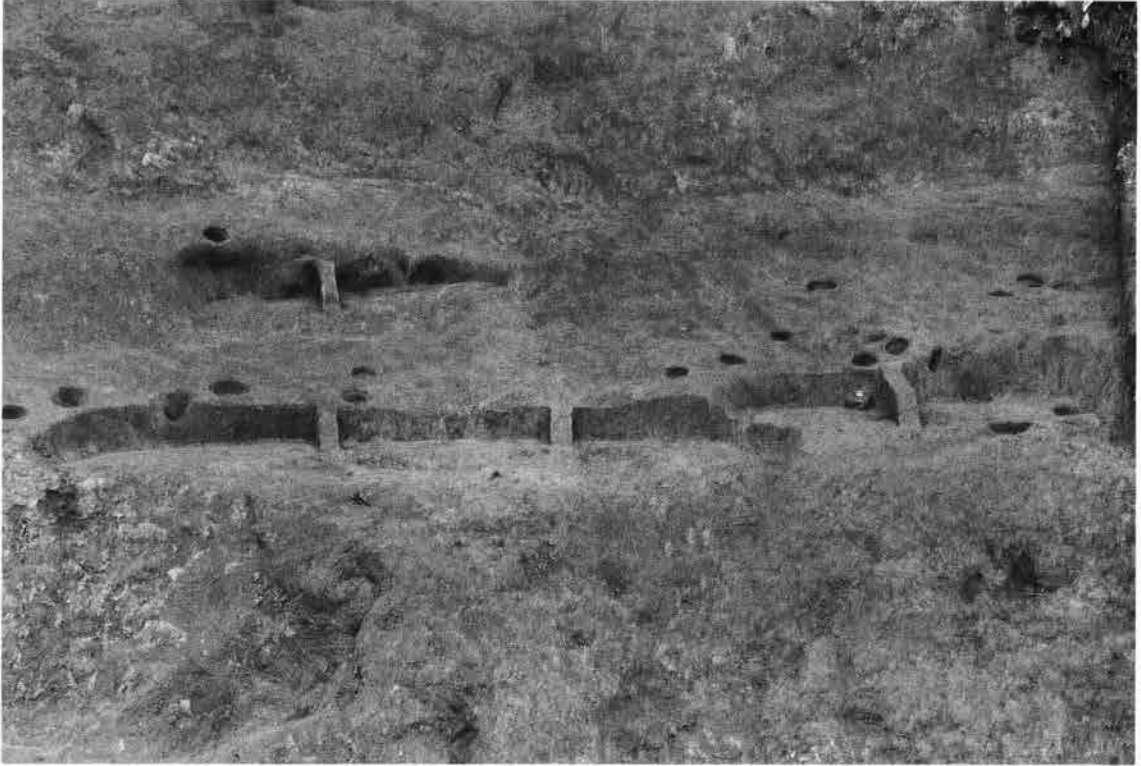
図版第2 ニゴレ遺跡



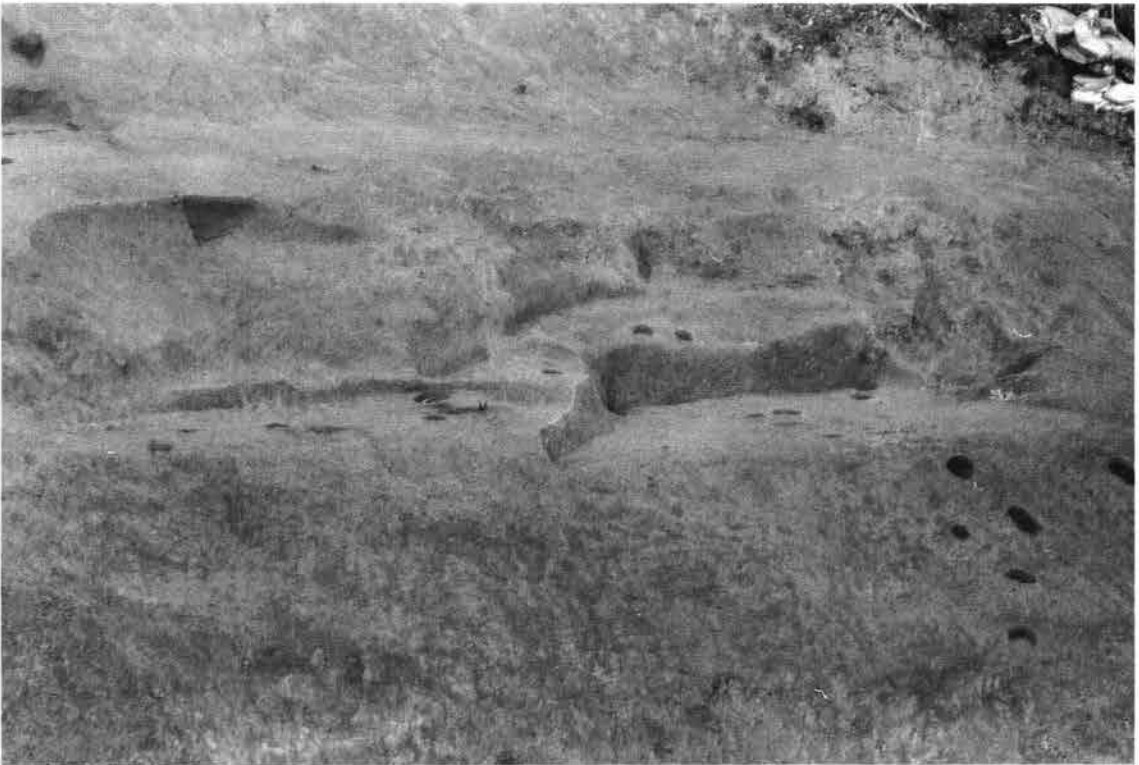
(1) A拡張区炭窯14近景 (南から)



(2) A拡張区炭窯29・30近景 (南西から)



(1) A拡張区住居跡28・24近景(南西から)



(2) A拡張区住居跡27・26近景(南西から)

図版第4 ニゴレ遺跡



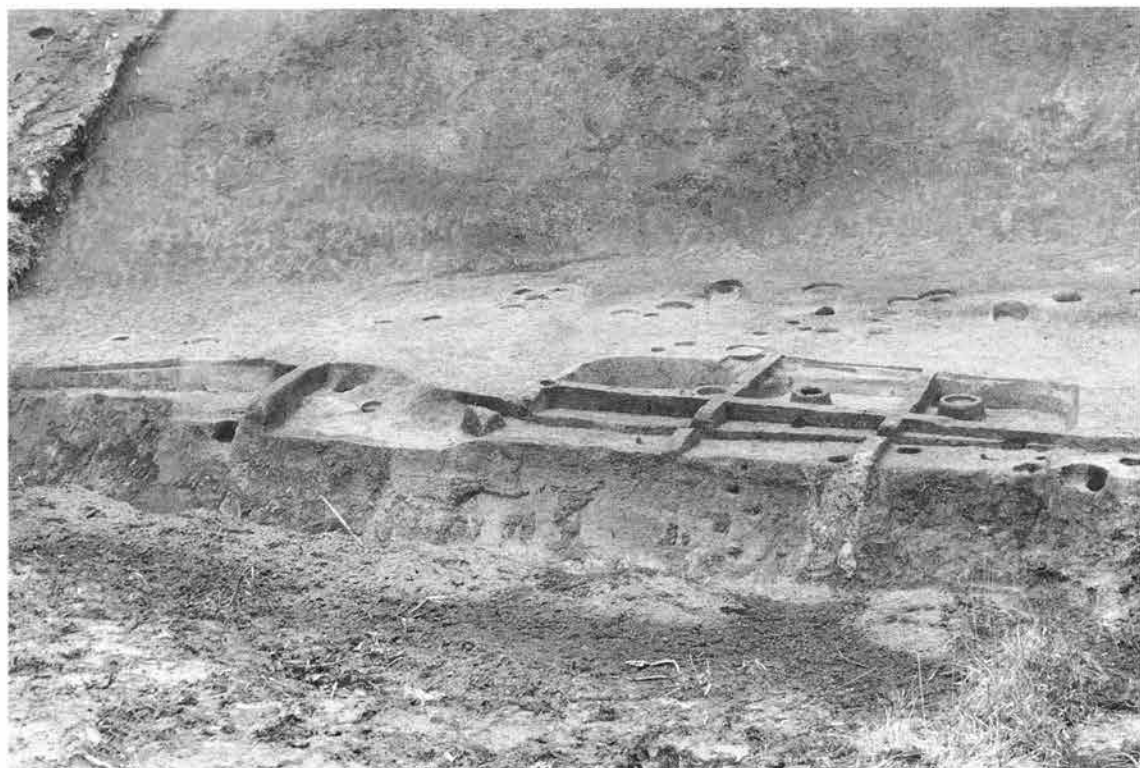
(1) A拡張区住居跡1近景(西から)



(2) A拡張区住居跡1近景(南から)



図版第5 ニゴレ遺跡



(1) A拡張区住居跡9・11近景(南西から)



(2) B拡張区全景(北東から)

図版第6 ニゴレ遺跡



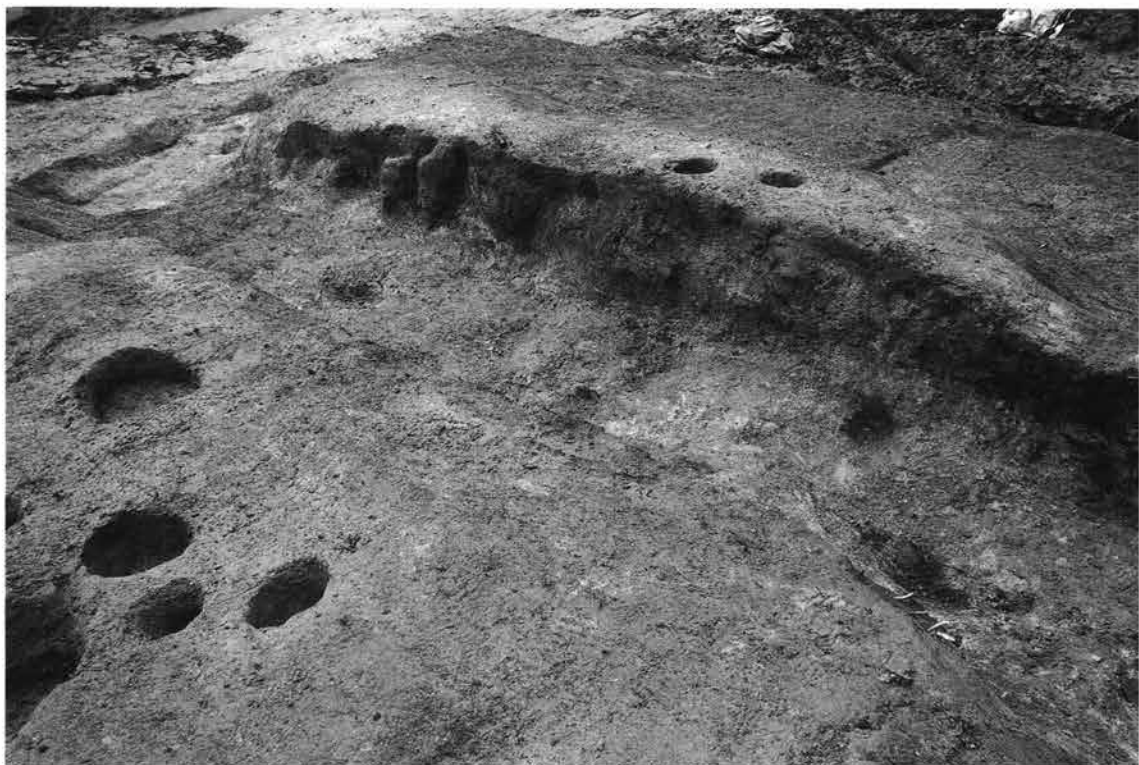
(1) 1号製鉄炉調査前全景（南から）



(2) 1号製鉄炉調査前近景（南西から）



(1) 1号製鉄炉全景（北東から）



(2) 1号製鉄炉近景（北西から）





(1) 1号製鉄炉近景 (南西から)



(2) 1号製鉄炉流れ込み土器出土状況 (南から)



(1) 1号製鉄炉排滓坑近景（北西から）



(2) 1号製鉄炉排滓坑完掘状況（北から）



(1) 2号製鉄炉近景 (南東から)



(2) 2号製鉄炉近景 (南西から)





(1) 調査前近景 (西から)



(2) 調査前近景 (西から)



(1) 試掘調査地遠景（西から）



(2) 第6トレンチ掘削状況

図版第13 伏見城跡

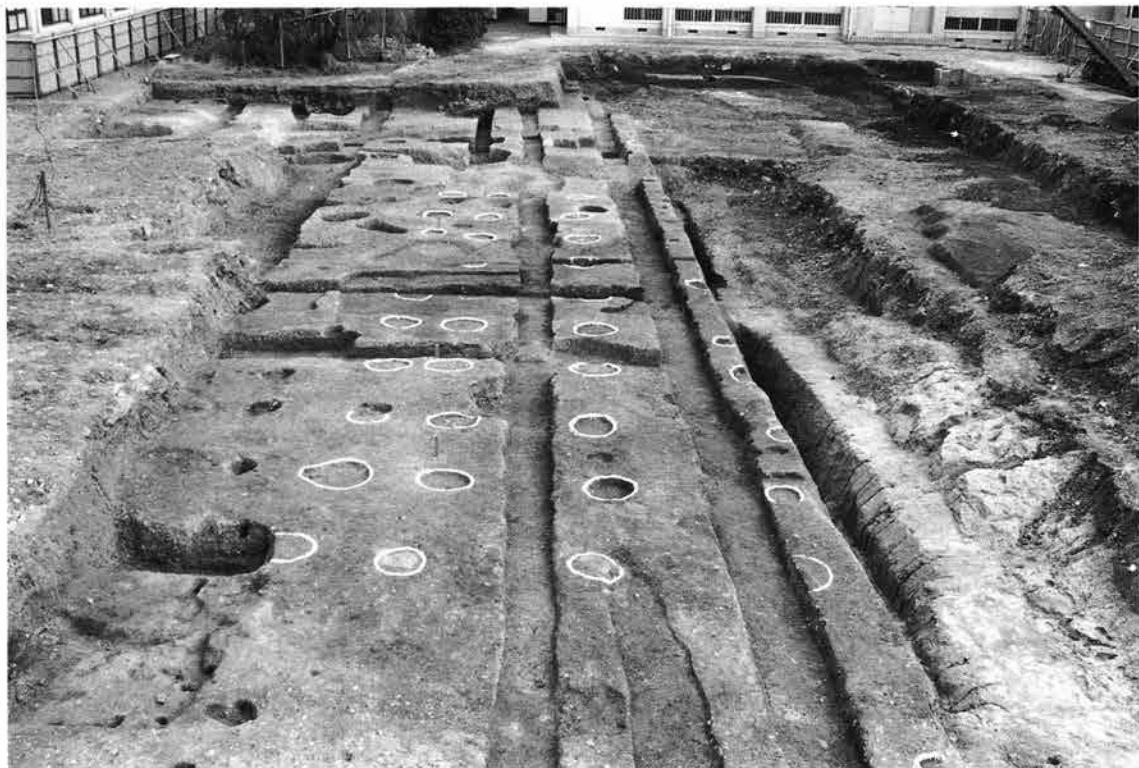


(1) 調査地全景 (西から)



(2) 調査地全景 (北西から)

図版第14 伏見城跡



(1) SB01検出状況 (西から)



(2) SB01検出状況 (北から)





(1) SB02・SB05検出状況（西から）



(2) SB02完掘状況（北から）

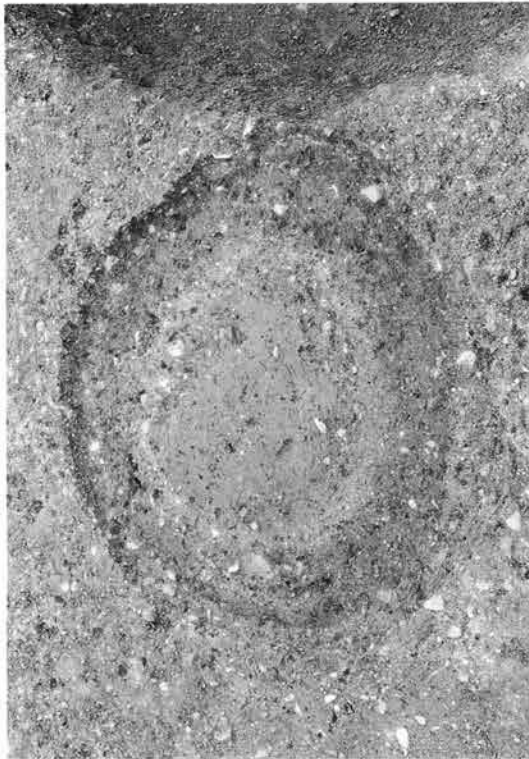




(3) SB05柱穴1 検出状況 (南から)



(4) SB05柱穴1 断面 (西南から)



(1) SB01柱穴5 検出状況 (北から)



(2) SB01柱穴5 断面 (東から)



(3) SB02-3礎石 (東から)



(4) SB02-4礎石 (東から)



(1) SB02-1礎石 (西から)



(2) SB02-2礎石 (東から)



(1) SX03検出状況 (西から)



(2) SX03内遺物出土状況 (南西から)





(1) 調査地東端部検出遺構（北から）



(2) 調査地東南部検出遺構（西から）



(1) サブ・トレンチ内瓦層（南から）



(2) 伏見城に伴う整地層（トレンチ西南部分）



(1) 下層遺構面全景（西南から）



(2) SD16・SD17検出状況（西から）



第34図-2

第34図-3



第34図-20



第34図-7



第36図-1



第34図-12



第36図-2

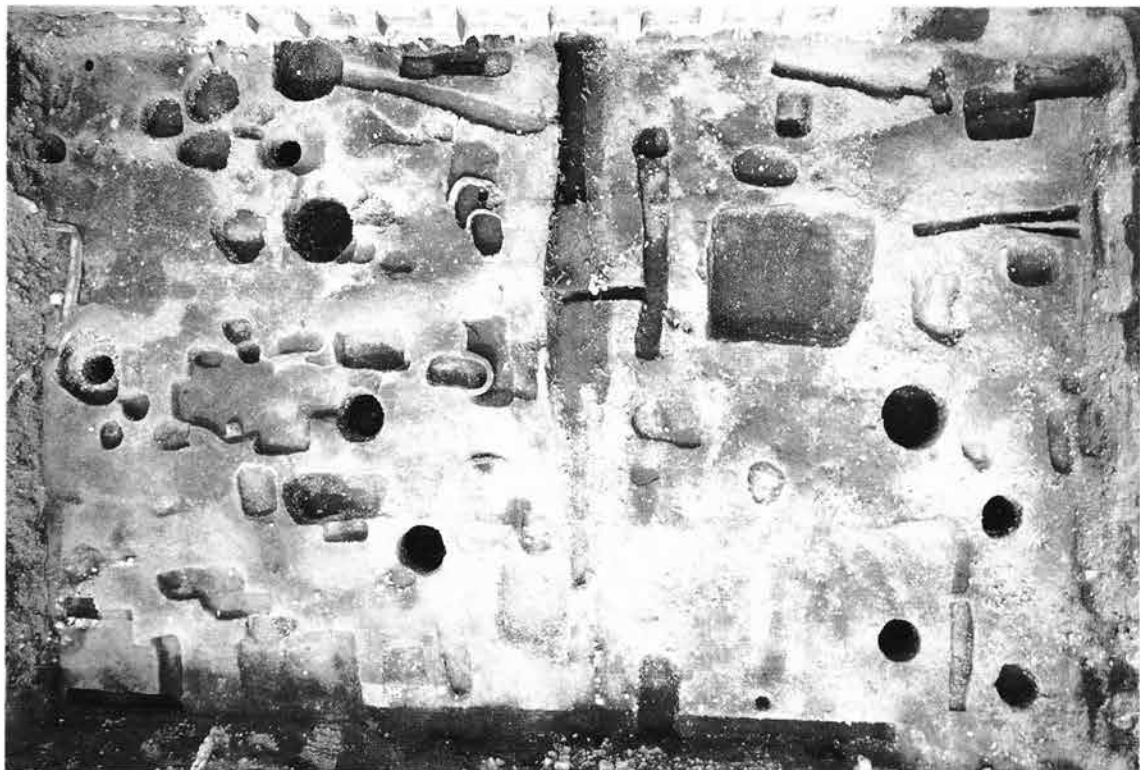


第34図-27



第35図-8





(1) 北地区第1面全景（上が北）



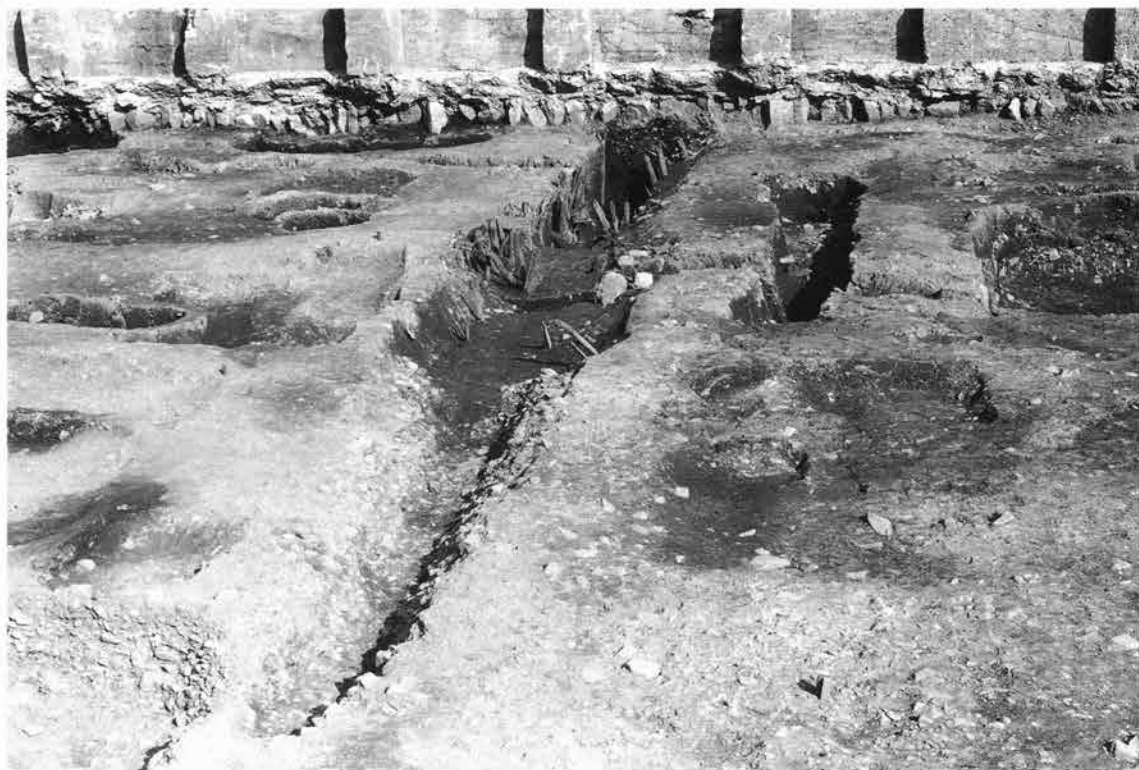
(2) 南地区第1面全景（上が西）



(1) 北地区第2面全景（南から）



(2) 南地区第2面全景（南から）

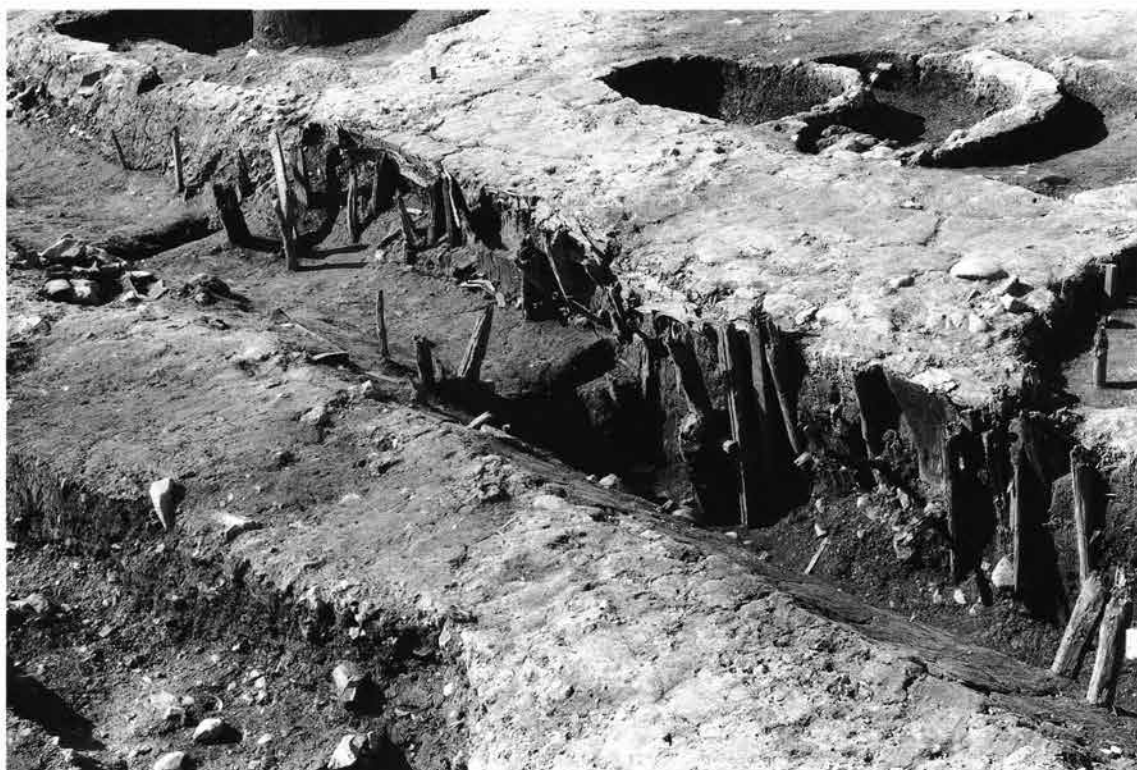


(1) 溝50全景（南東から）



(2) 溝50杭列検出状況（南から）





(1) 溝50杭列検出状況（北東から）



(2) 溝50断面（南から）



(2) 土坑62断面 (南から)



(1) 土坑62検出状況 (南から)



(1) 土坑39断面 (西から)

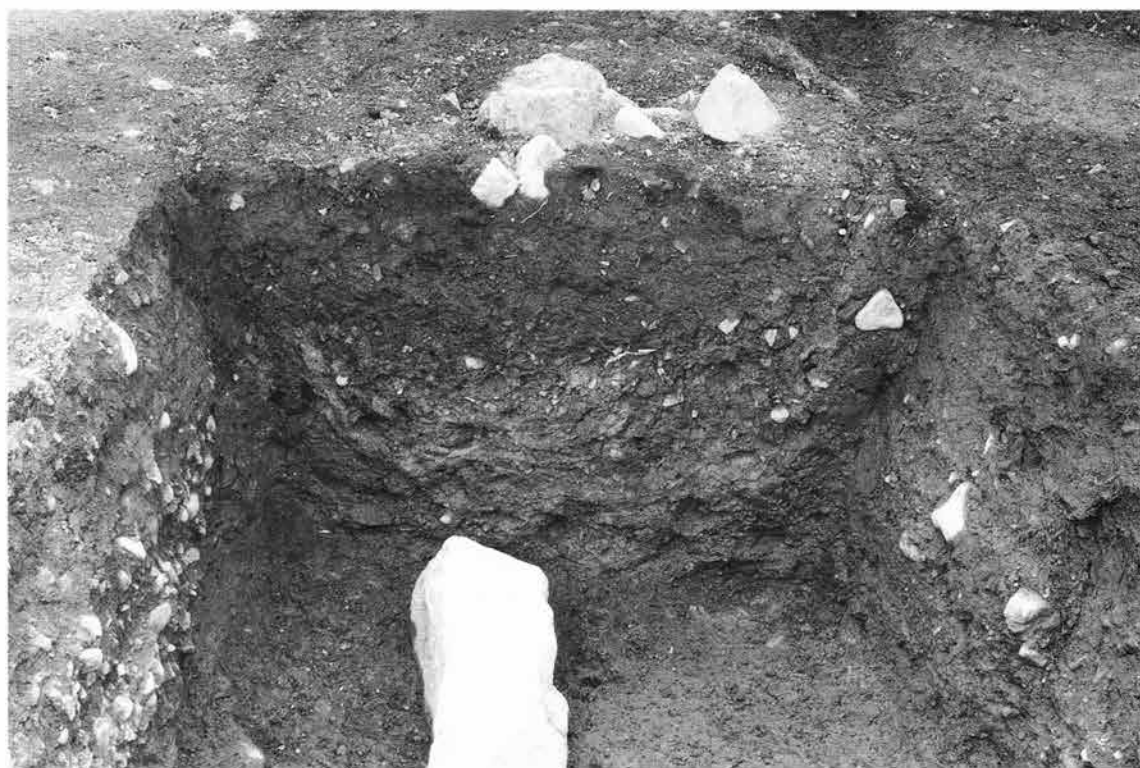


(2) 土坑43断面 (西から)





(1) 土坑42断面（北西から）



(2) 土坑63断面（西から）





(1) 土坑114全景 (南から)



(2) 土坑114遺物出土状況 (南西から)



(1) 土坑89・90断面 (南から)



(2) 土坑136断面 (北から)



(1) 堀A検出状況（南から）



(2) 堀A断面（南から）





(1) 堀B検出状況 (南から)



(2) 井戸210全景 (南から)



(1) 建物跡1全景（上が北）



(2) 石組溝10南部（上が西）



(1) 石組溝10南部 (南から)



(2) 石組溝10屈曲部 (東から)





(1) 石組土坑12全景（西から）



(2) 石組土坑12東面石組状況（西から）



(1) 石組土坑12南面石組状況（北から）



(2) 石組土坑12北面石組状況（南から）

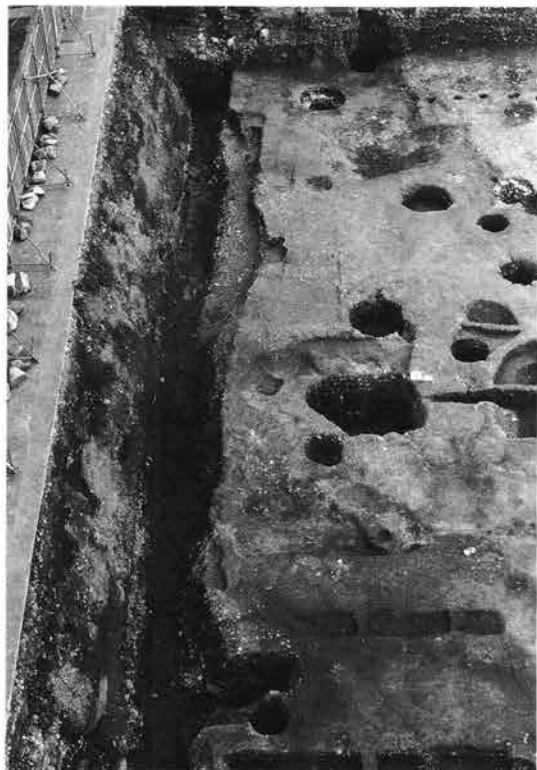


(1) 土坑303全景（南から）



(2) 土坑310全景（東から）





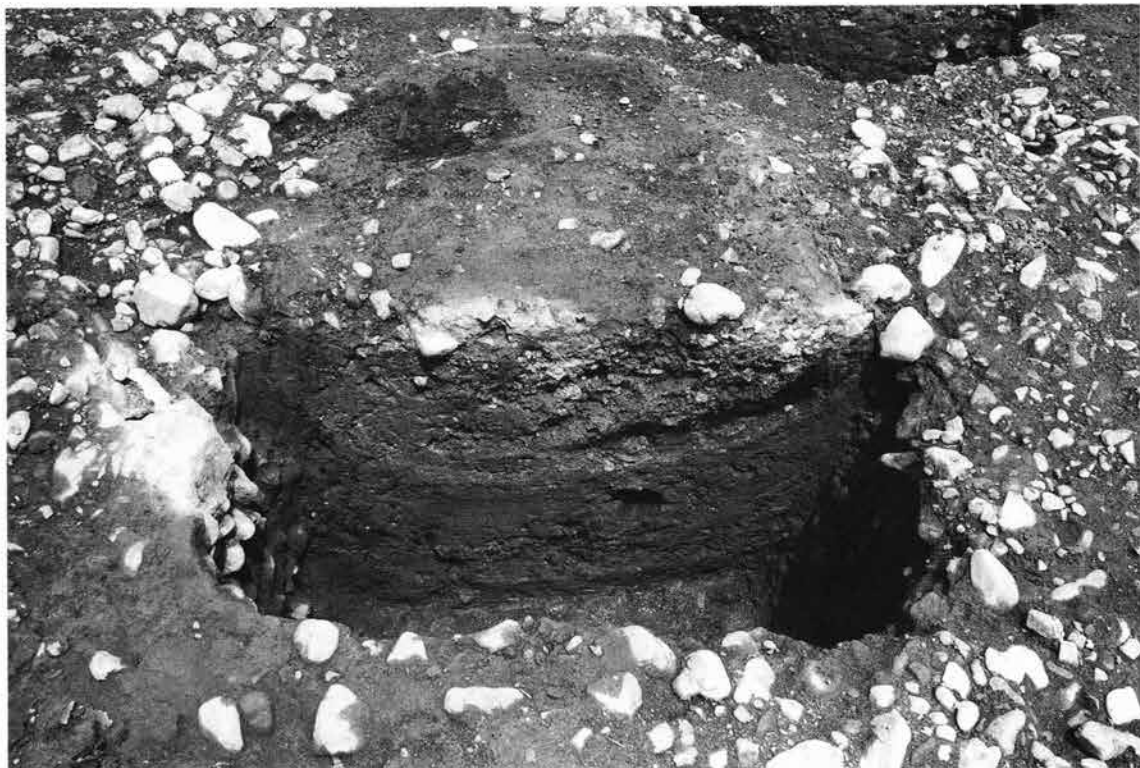
(1) 堀A (北から)



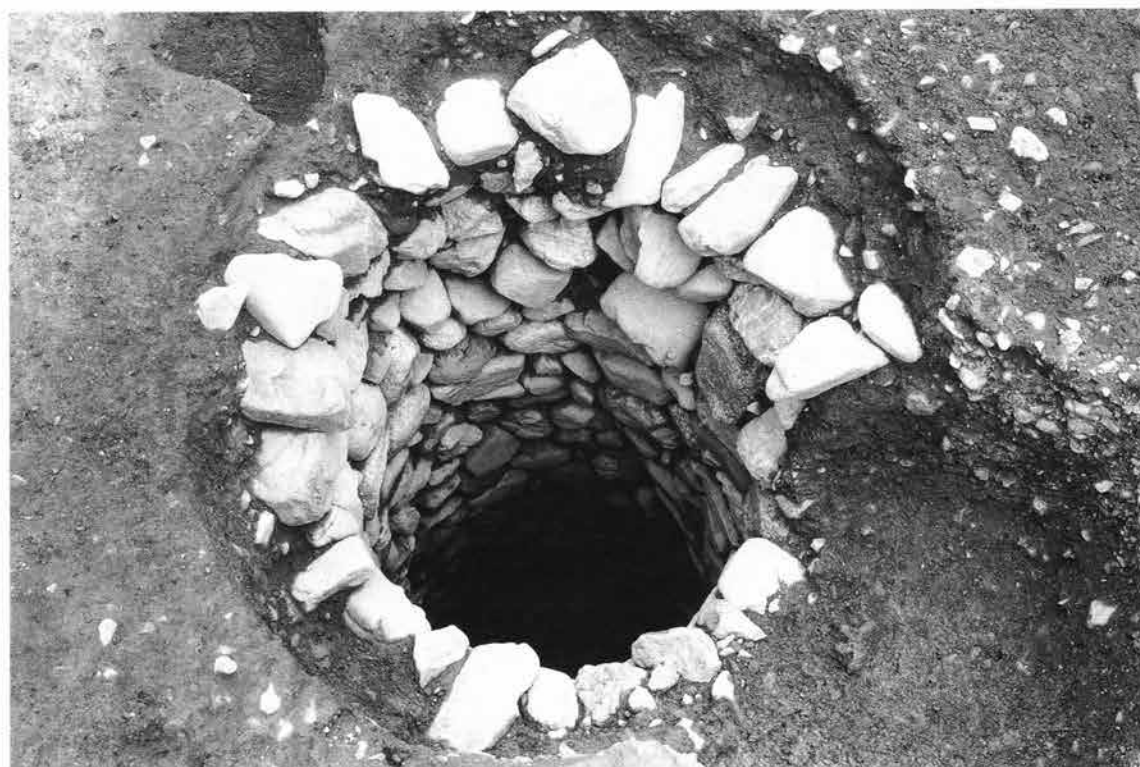
(2) 堀A (南から)



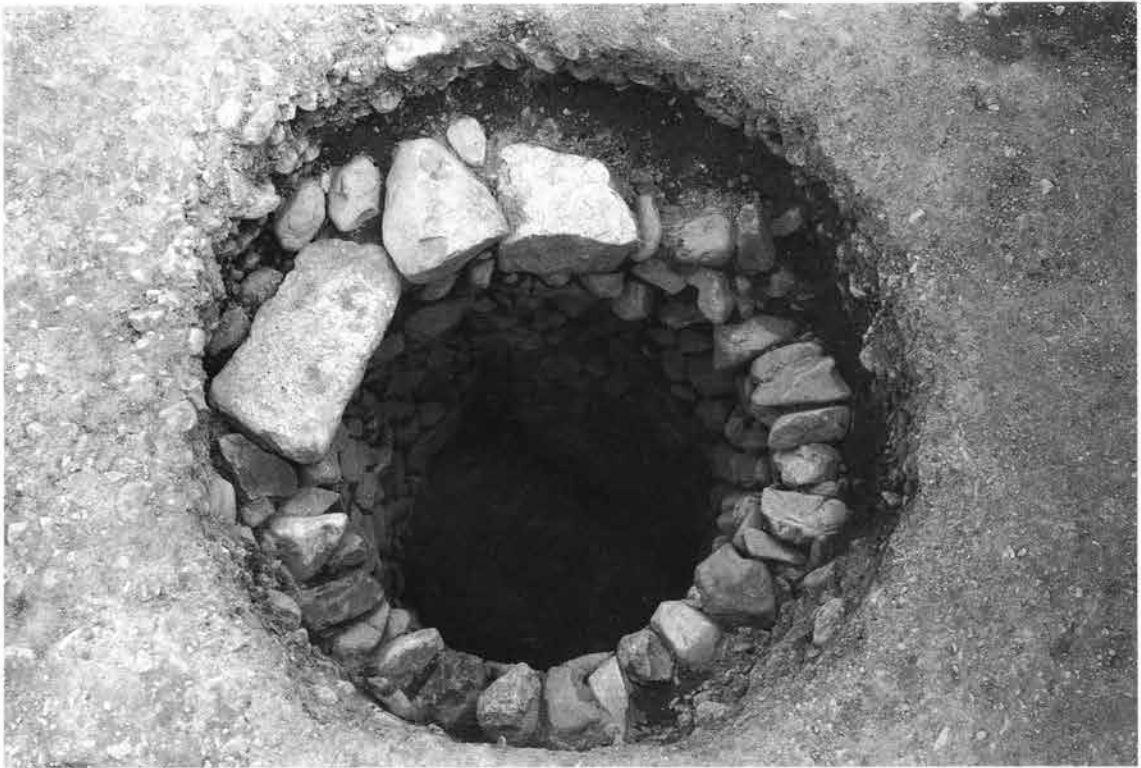
(3) 堀A断面 (北から)



(1) 土坑503全景 (南から)



(2) 井戸546全景 (北から)



(1) 井戸501全景（北から）



(2) 井戸501石組状況（北から）





1



8



2



9



3



10



4



5



11



6



7



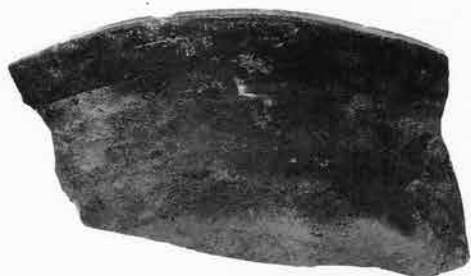
12



13



20



15



21



16



22



17



23



24



25



30



26



27



28



33



39



36



34



40



38



35



41



43



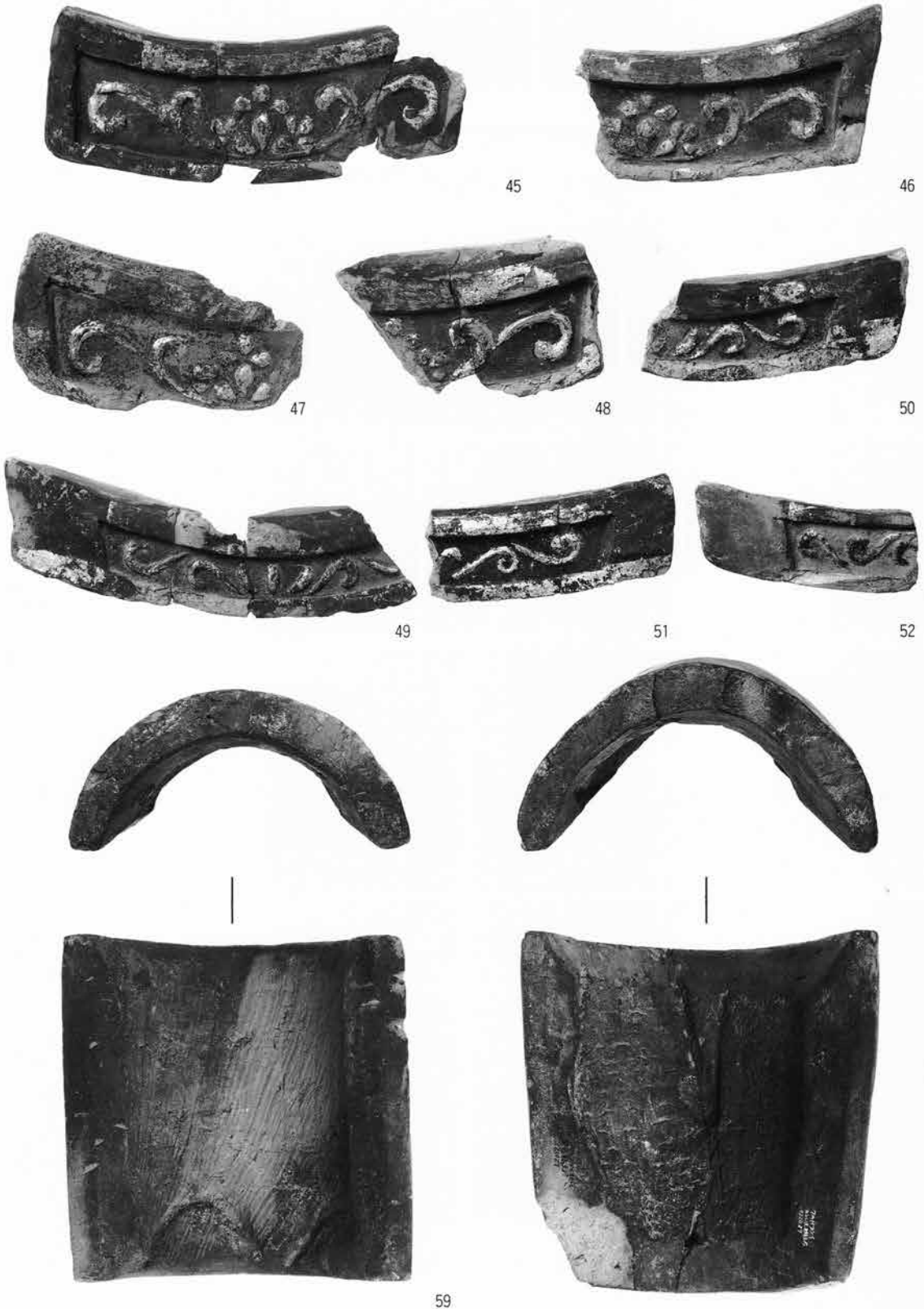
37



42



44





54



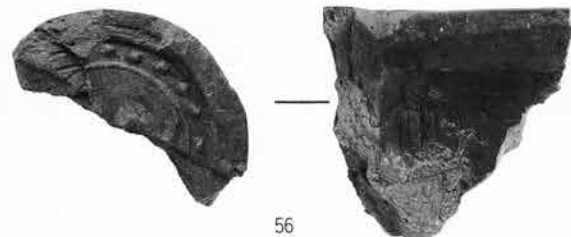
55



53



57



56



58







60



61



63



65



64





96



99



100



101



102



97



103



98



104



105



109



106



110



111



107



112



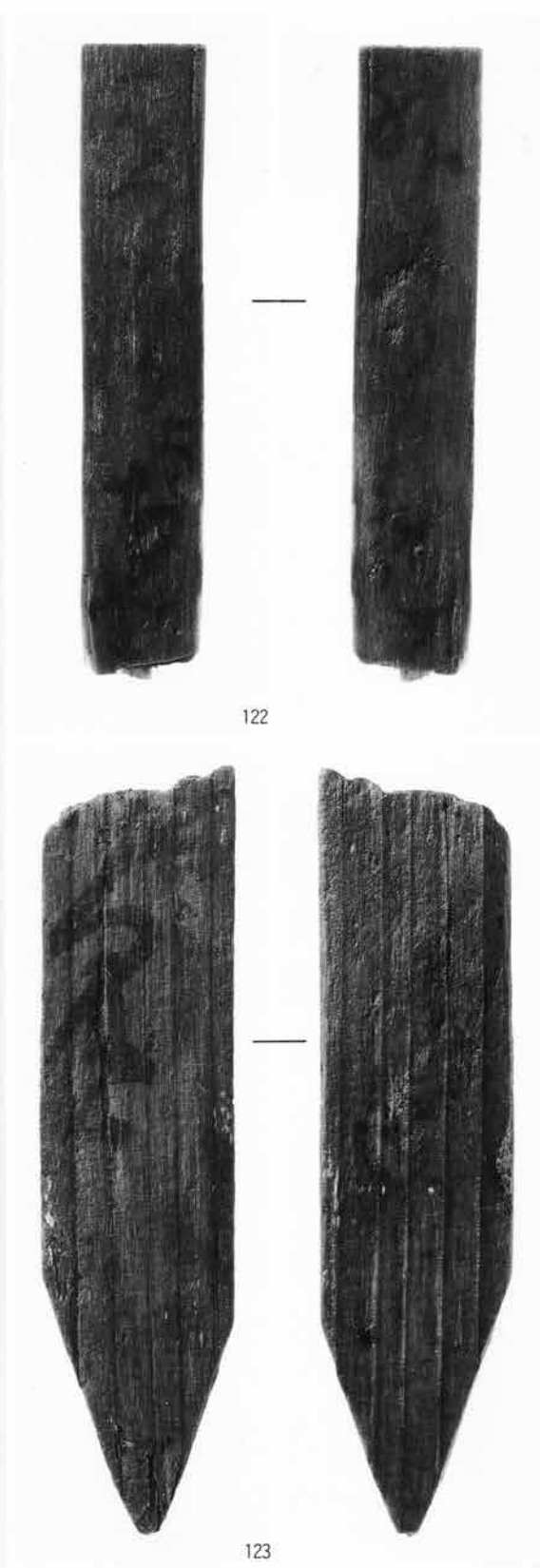
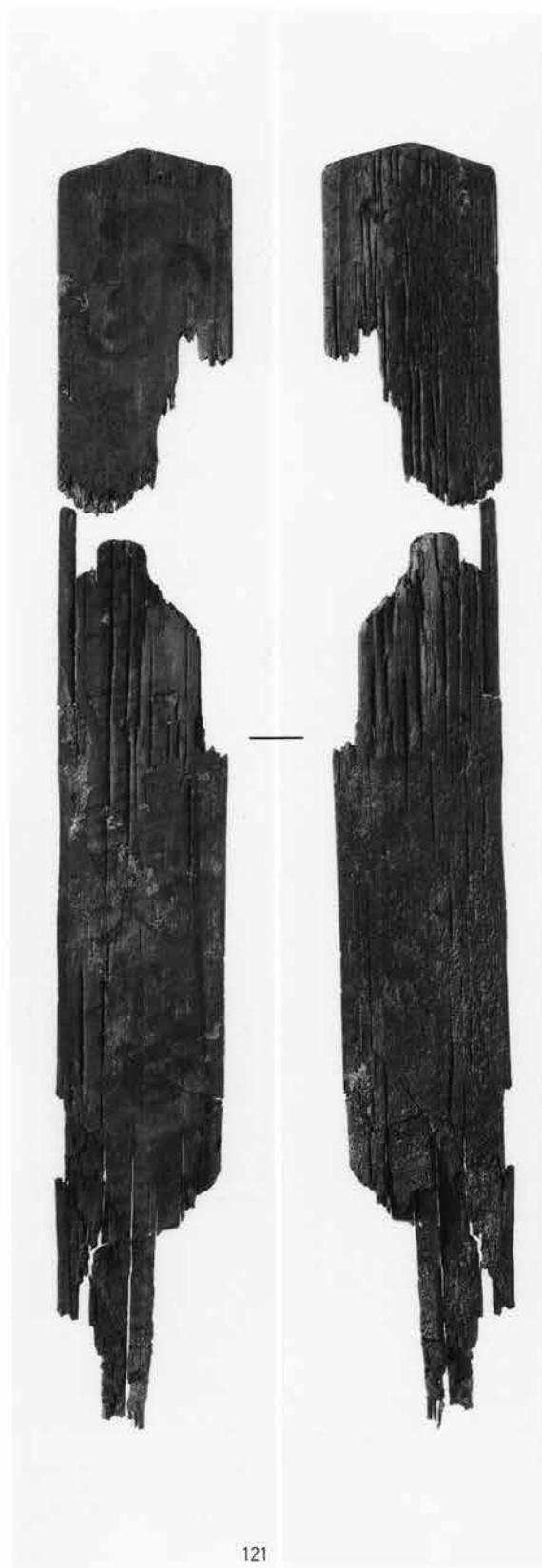
108



113



114





131



132



134

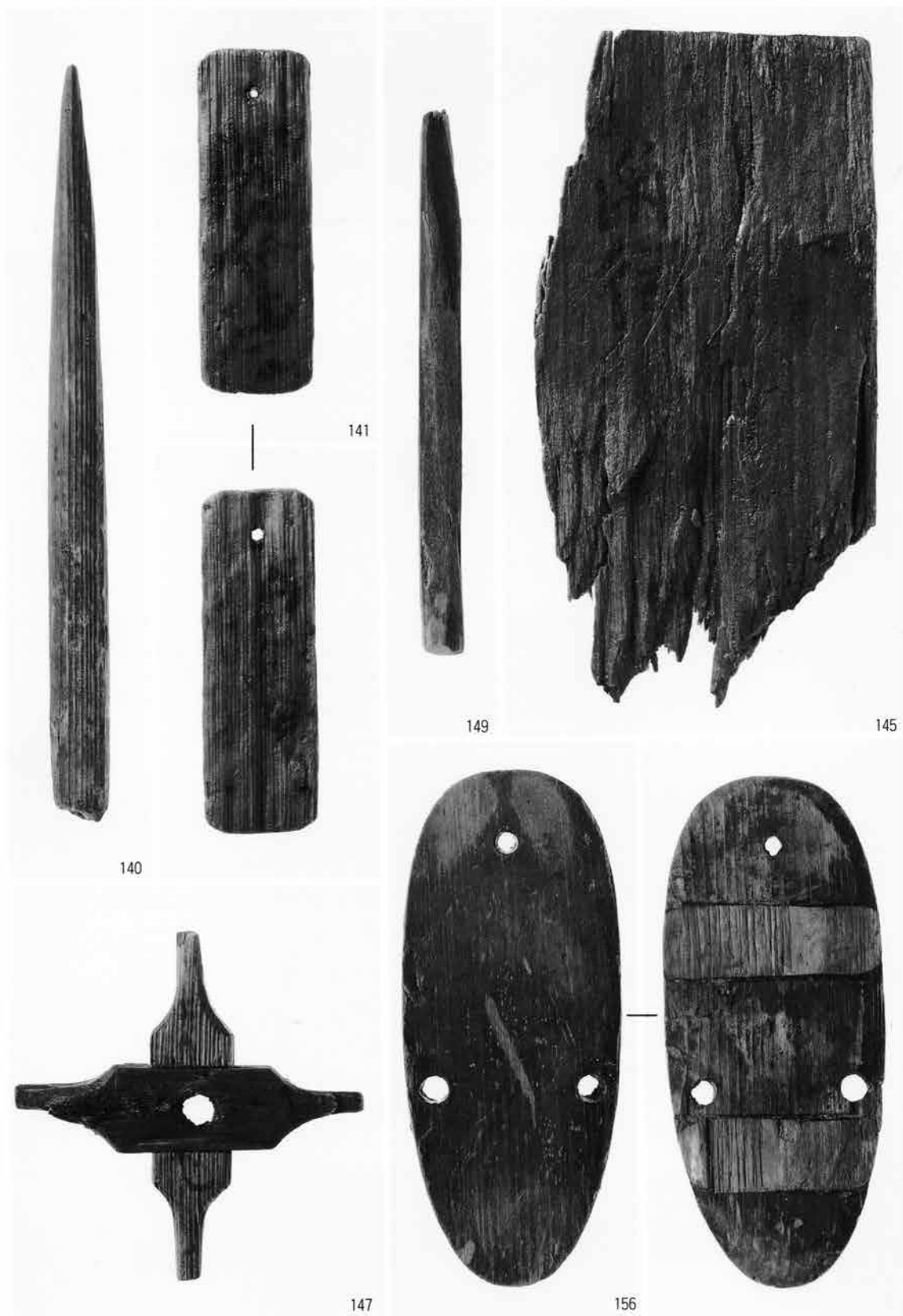


135

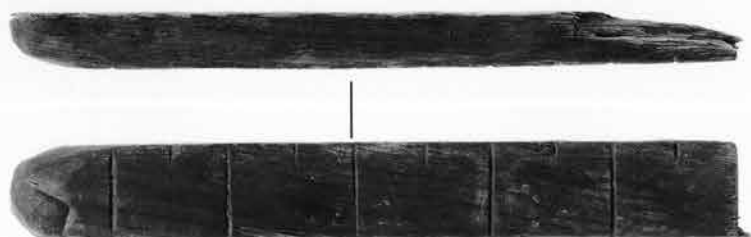


136

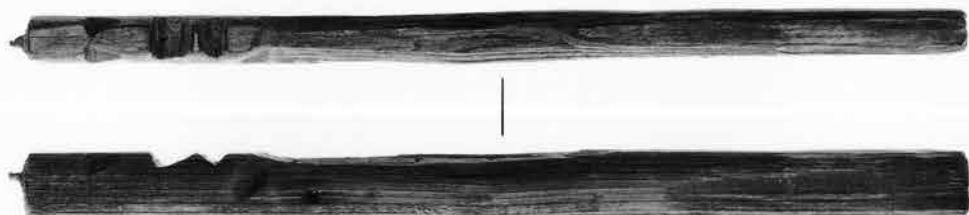








162



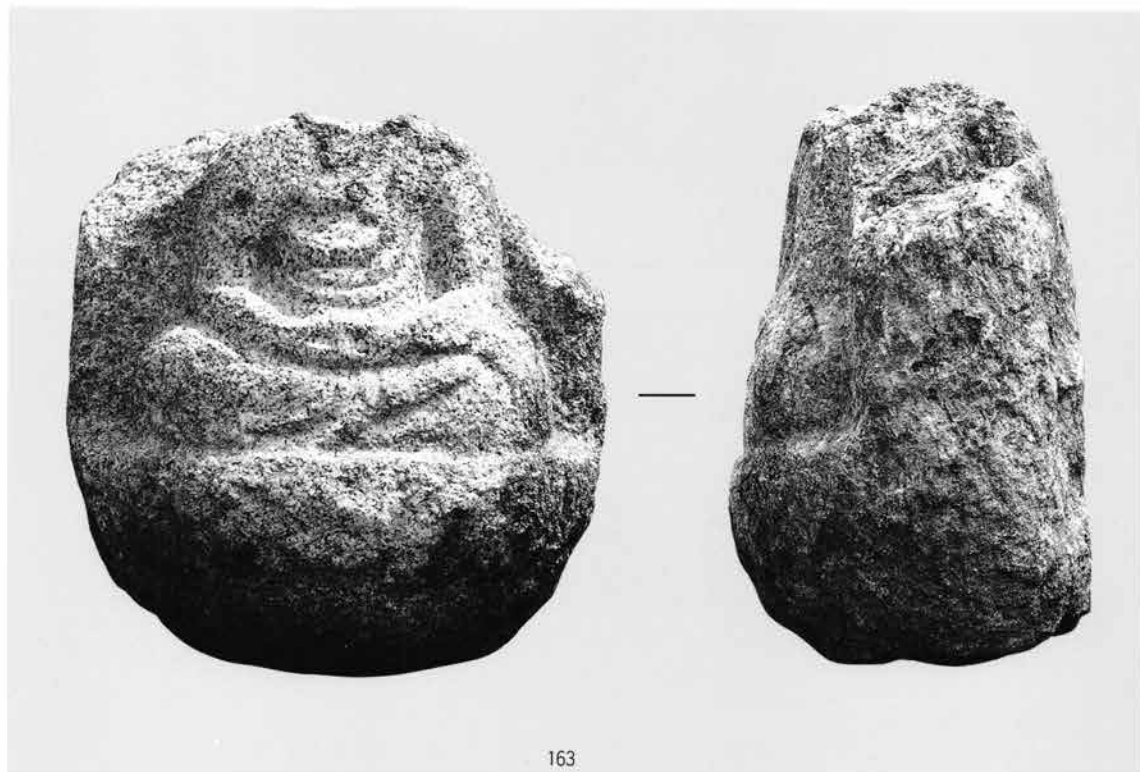
161



157



151



163



164





167



168



186



185

## 京都府遺跡調査概報 第59冊

平成6年3月25日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
Tel (075)441-3155 (代)



